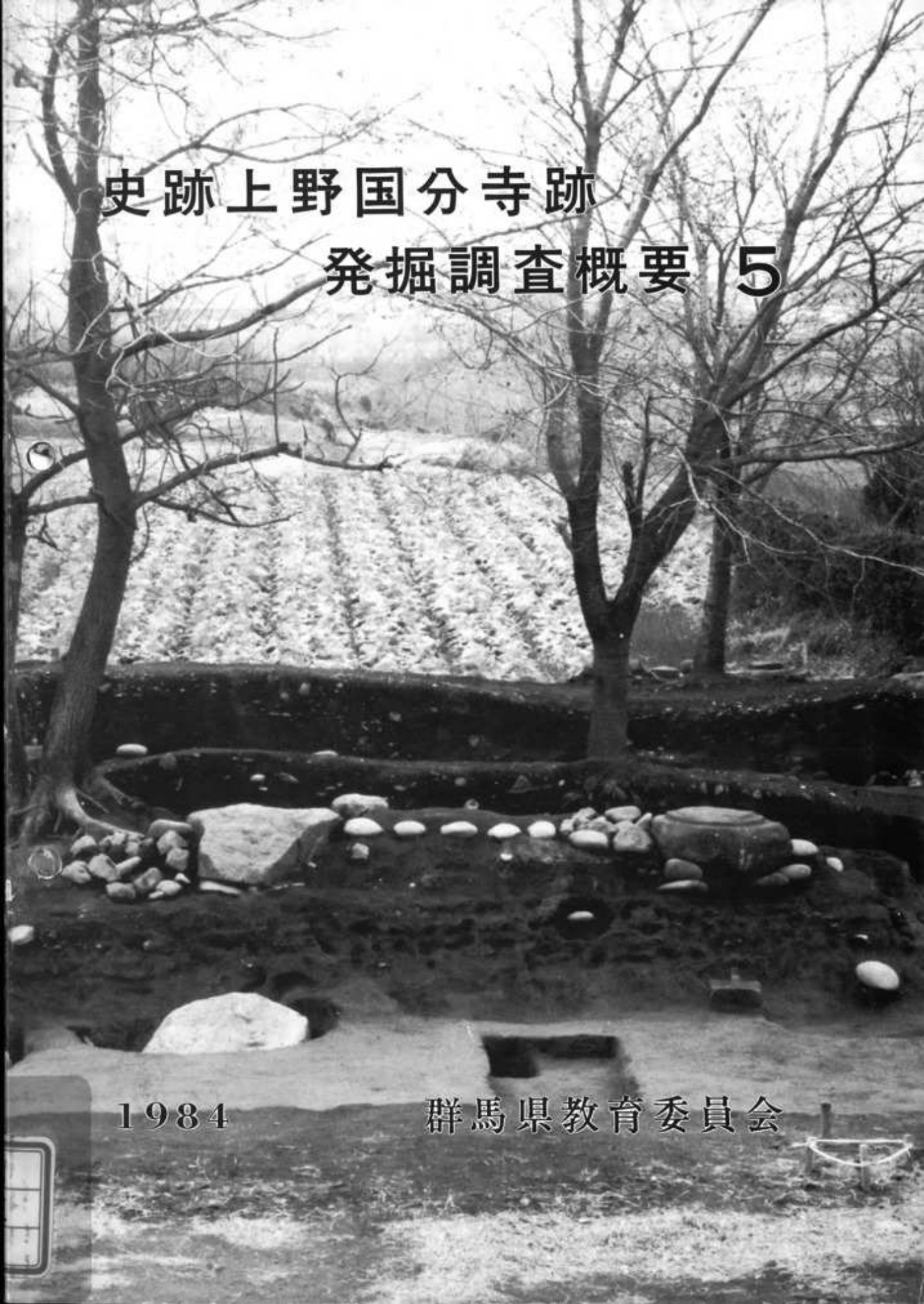


史跡上野国分寺跡
発掘調査概要 5

1984　　群馬県教育委員会

史跡上野国分寺跡発掘調査概要5　正誤表

頁	行	誤	正
1	7	テラス状の平担地	テラス状の平坦地
17	Table.4 ① 図版番号		18－3
17	Table.4 ⑨ 図版番号		18－13
21	Fig.13	SE11	SB11
36	Table.9 ⑮ 底部径 高　さ	—— （5．1）	（5．1） （——）
41	1-①　内容	多胡郡織裳匚	多胡郡織裳郷匚
46		Ⅳ　まとめ	Ⅵ　まとめ
62	PL.15　9	須恵器皿	灰釉陶器皿
	Fig.16、同22は印刷が不鮮明であるため別刷を添付してあります。		

序

史跡上野国分寺跡の保存整備事業も５年目となり、発掘調査の結果、1,230余年前に建てられた伽藍の様子も明らかとなってまいりました。今年度は中心となる建物である金堂や寺域南西隅の発掘調査を中心に進めてまいりましたが、南辺築垣は地形に沿って曲っていることが確認されるなど、注目すべき成果を上げることができました。また出土した瓦の中に人名や地名が書かれているものが多数ありましたが、この国分寺の創建や修理の様子を知る上で重要な資料であると同時に、私たちのはるかな祖先の活躍ぶりをしのばせる遺産として興味つきないものであります。

この調査の概要を紹介し、今後の事業の進展の一助とするため本書を刊行いたしました。関係者をはじめ広く県民の皆様にご活用いただければ幸いです。

最後となりましたが、本事業を進めるに当って多大なるご協力をいただいた文化庁、地元教育委員会など各機関、地元をはじめとする多数の方々に深甚の謝意を表する次第です。

昭和60年３月31日

群馬県教育委員会教育長　横山　巌

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と立地環境……1
　1．位　　置……1
　2．立地環境……2
Ⅱ　調査に至る経過……3
Ⅲ　昭和55～58年度調査の概要……3
　1．昭和55年度の調査……3
　2．昭和56年度の調査……3
　3．昭和57年度の調査……4
　4．昭和58年度の調査……5
Ⅳ　調査の概要……6
　1．目的および調査方法……6
　2．調査の経過……8
　3．第23次西拡張調査……9
　　(1)　遺　構……9
　　(2)　遺　物……11
　4．第15トレンチ拡張調査……12
　　(1)　遺　構……12
　　(2)　遺　物……14
　5．第24次調査……18
　　(1)　遺　構……18
　　(2)　遺　物……22
　6．第25次調査……24
　　(1)　遺　構……24
　　(2)　遺　物……28
　7．第26次調査……32
　　(1)　遺　構……32
　　(2)　遺　物……36
Ⅴ　文　字　瓦……40
Ⅵ　ま　と　め……46
　図　　版……48

例　　言

1．本書は、群馬県群馬郡群馬町東国分・前橋市元総社町他に所在する史跡上野国分寺跡の昭和59年度保存整備事業に伴う発掘調査の概要である。
2．本調査は、国庫補助事業として群馬県教育委員会が実施した。
3．本調査は、史跡上野国分寺跡整備委員会の指導を受け、群馬県教育委員会文化財保護課主任前沢和之が担当し実施した。
4．出土遺物については整理途中であるため、その一部に触れるにとどまる。
5．出土した遺物は群馬県教育委員会が保管している。
6．本書の作成、編集は前沢が担当し、遺構実測・写真撮影は前沢他が担当した。遺物実測および実測図トレースには関口功一氏他の協力を得た。

史跡上野国分寺跡整備委員会委員・幹事

委員　大図軍之丞（委員長・県文化財保護審議会委員長）
　　坪井　清足（副委員長・奈良国立文化財研究所長）
　　大塚　初重（明治大学教授・考古学）
　　平野　邦雄（東京女子大学教授・古代史）
　　近藤　義雄（県文化財保護審議会委員・中世史）
　　藤井　精一（前橋市長）
　　志村喜三郎（群馬町長）
　　女屋　覚元（県総務部長）
　　柳沢　　宏（県土木部長）
　　横山　　巌（県教育委員会教育長）
　　石田　重男（県教育委員会管理部長）
退任　加門　　勝（前県土木部長）

幹事　田中　哲雄（奈良国立文化財研究所技官・史跡整備）
　　福田　　拓（造園家）
　　松島　栄治（県立前橋第二高等学校教諭・考古学）
　　青柳　　勇（県総務部財政課参事）
　　山本　　肇（県土木部都市施設課参事）
　　矢沢　隆資（県都市公園事務所長）
　　森田　秀策（県教育委員会文化財保護課長）
　　井上　唯雄（　同　　参事）
　　近藤　　功（　同　埋蔵文化財第２係長）
　　前沢　和之（　同　　主任）

　　岸　　栄（前県教育委員会文化財保護課参事）

Ⅰ　遺跡の位置と立地環境

1．位　置

関東平野の北西隅、前橋市街の西方約4㎞で、群馬郡群馬町東国分・同引間・前橋市元総社町に跨る位置にある。地形的には榛名山東南麓に広がる扇状地の末端にあたり、南を染谷川、北を牛池川に挟まれる北西から南東への緩い傾斜を示す微高台地上に立地する。寺域の北西部は標高129.0m、南東部は127.5mを測る。西から妙義・浅間・榛名・小野子・子持・谷川・赤城の山々を眺み、南には平野が広がる景観をもつ。

史跡地の北側に町道、東と西側に小道が走り、南にはテラス状の平担地が約100m続いて染谷川に至る。北側に群馬町東国分の集落が近接するが、南・東・西方は畑と水田で家屋は少なく、比較的良好な環境が保たれている。寺域内は北半部に民家と墓地があり、中央部に金堂と塔跡が土壇状に残る以外は畑地であり、かっては桑園であった。

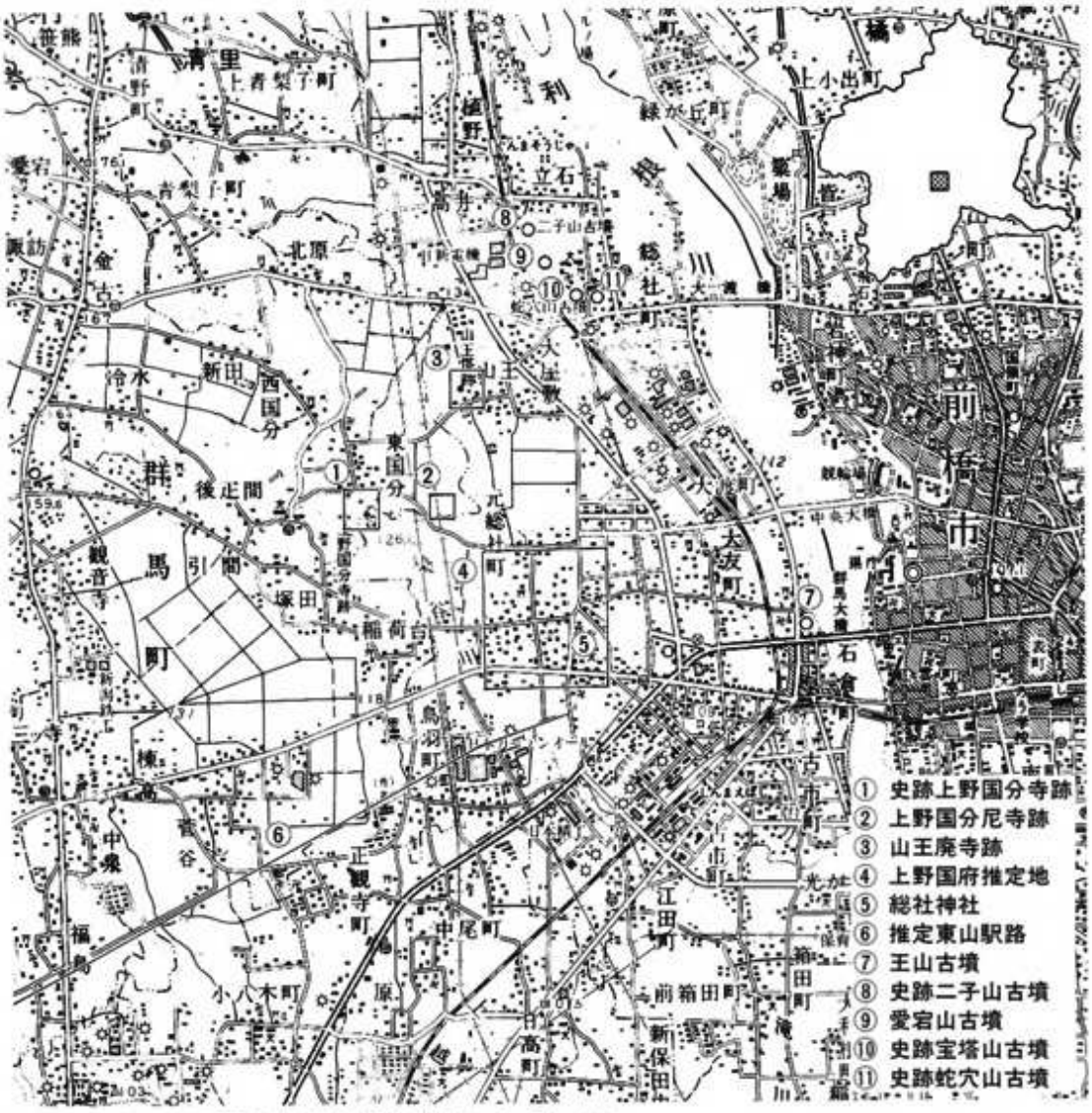


Fig. 1　史跡上野国分寺跡と周辺の遺跡　1／50,000

2．立地環境

東方約500ｍに国分尼寺跡がある。昭和45年に行なわれた調査で6×4間の講堂と推定される礎石建物が確認されているが、伽藍配置・寺域の範囲については不明な点が多い。現在は畑地となっており比較的良好な環境を保っているので、今後調査が行われればそれらも明らかにされることが期待される。南東約1.4㎞には国府推定地がある。市街地化が進んでいるが、旧総社の跡とされる小祠などがあり、南面には推定東山駅路に接して人為的とみられる段差が認められる。また北東約1㎞には7世紀後半の創建である山王廃寺がある。ここには地下式の塔心礎や石製鴟尾・根巻石が残っており、「放光寺」とヘラ描きされた瓦が出土している。国分僧寺と尼寺の間を南北に貫くように建設されている関越自動車道の敷地の発掘調査では、縄文時代から近世まで各時代の遺構が検出されているが、奈良～平安時代の集落も多く確認されており、そこから出土した瓦や石材などの遺物と併せて国分二寺の立地や変遷と密接な関連を示している。そして南約3.5㎞の日高遺跡では広い範囲に条里制地割をもつ水田址が検出されている。これらの遺跡の所在から、この一帯が律令制下における上野国の中枢部をなしていたことが知られる。

Fig. 2　史跡上野国分寺跡全景（昭和56年３月撮影）

II　調査に至る経過

上野国分寺跡は、平安時代中頃の記録が残る稀有な遺跡として知られており、大正15年10月20日付で史跡に指定された。指定面積は62,092㎡で寺域の南面部分も含んでいる。昭和43年に関越自動車道の基本計画が、その翌年には整備計画が発表されたが、それによるとこの自動車道は国分寺跡の東側約150ｍのところを南北に走り、南東約2㎞のところには前橋インターチェンジができることになった。この開通により国分寺周辺への開発の波及は必至の情勢となり、群馬県教育委員会ではこの保存のため指定地の公有化を検討し、昭和47年度から地権者との折衝を開始した。その結果、史跡上野国分寺跡土地買上事業は昭和48年度から開始され、以後昭和59年度までに総事業費11億1,922万円、買上面積は51,463.35㎡で全体の82.9%となった。

この土地買上事業の進展に伴い、昭和55年度から史跡上野国分寺跡整備委員会を発足させるとともに、遺構を確認し整備のための各種の資料を得るべく発掘調査に着手した。

III　昭和55～58年度調査の概要

1．昭和55年度の調査

寺域および主要伽藍の配置の確認を目的とし、全域に第1～11トレンチ(巾3m)を設定して実施した。

遺構　確認された主な遺構の概要は次の通りである。

①　第1、9トレンチのS96～101で南辺築垣（SF01）が確認された。基底巾4.8～6ｍ、上端巾（現状）1.5ｍで、高さは寺域内から0.7～1.4ｍ、寺域外から1.3ｍ～1.8ｍを測り、断面は台形状を呈す。地山を削り出し、その上に粘性のある黒褐色土を積んで造っているが、版築の状況は見られない。南側に接して巾約3.6ｍの浅い溝（SD01）がある。築垣の北側には瓦片を包含する層があり、この上に浅間山噴出のB軽石（以後、B軽石と略す）の純層堆積が認められる。

②　第11トレンチの塔跡に近い位置に瓦の集積があり、W1～3では8世紀後半の竪穴住居（SJ01）が検出された。また寺域の中央部を南北に走る細長い窪地は、深さ約2ｍの溝状に掘られたものであることが確認され、底部から五輪塔・馬骨などが出土した。

遺物　コンテナーバット200個分が出土した。その大部分は瓦であるが、奈良～平安時代の土師器・須恵器・中世土器も出土しており、特に奈良三彩片の出土したことが注目される。

発掘調査と併せて、金堂・塔跡の現況実測図（1／50）の作成、航空測量用写真の撮影を実施した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡―寺域確認発掘調査概要―』にまとめて発表した。

2．昭和56年度の調査

金堂周辺と東半部に第12～15のトレンチ（巾3ｍ）を設定し、検出状況に応じて拡張を行った。

遺構　確認された主な遺構の概要は次の通りである。

①　第5トレンチのN17・E132で100×70㎝で上面が平坦な石1個を検出した。これは『史蹟調査報告第二』（内務省　1927年）などに記録されている礎石と同一とみられ、道路を挟んで東

側にも同様な石の存在することが確認されている、金堂中心との距離は106.8mを測る、などの点からこれを東大門西側柱列の礎石の1つと推定した。東辺築垣は史跡地の東側に沿う農道に一致することが想定された。

② 金堂の北側～史跡地北辺の第12トレンチでは、地山を浅く掘り込み、周縁に玉石が散在する径約90cmの円形の掘形を2ヶ所で検出した。これを周辺の7ヶ所の円形掘形と玉石集積とを併せて検討した結果、中央部の間口420cm、その西側が390cm、奥行は4間で330cm等間、中軸線は金堂と一致することがわかり、これを講堂跡（SB06）と推定した。金堂とは中心一中心で4,710cmを測る。桁行の両側部分は攪乱のため検出できず、また基壇の痕跡も確認できなかった。

③ 塔跡東側の第11トレンチを拡張し、S9・W1で径約80cmの円形土壙内に玉石が密集してあるのを検出した。金堂の西側柱列から14.5mの位置にあり、西面回廊の礎石根石の可能性がある。

④ 塔跡と中軸線を挟んで東に相対する第15トレンチでは、地山が窪地状となっており、夥しい量の瓦が山積み状にあった。この中には壁土・漆喰片・木炭片が混じり、下部からは溝状の切り込みをもつ凝灰岩切石が出土したことから、建物の部材が一括して廃棄された状況が想定される。

遺物 瓦を主に、コンテナーバット110個・20kg入飼料袋497袋分がある。土器片では奈良三彩片、「福」と墨書する須恵器椀、内面に輪宝を墨書する中世の素焼きの皿など、また円面硯・瓦塔などがある。文字瓦は300点近くあった。石造物は宝篋印塔・五輪塔など70点の出土をみた。

発掘調査に併せて、航空測量による地形図（1／200、1／500）を作成した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要2』にまとめて発表した。

3．昭和57年度の調査

第16～19次調査を、寺域南東隅周辺の確認、塔基壇と西面回廊の確認を目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第16次調査は南辺築垣（SF01）と東辺築垣との交点と推定される部分とその南側で行った。地山はS100～101で階段状に削られており、南に向って次第に低くなっていく。これは築垣基部の造作とみられるが、この南側は染谷川に向って広がる谷地形となっている。この谷地の土層の中位にはB軽石の純層堆積があり、谷地の縁辺部には踏み固められた状況があって、B軽石堆積以前に改修がなされたとみられる。以上のことからこの谷の北縁上を南辺として寺地の占定がなされたことが窺える。

② 塔跡南東側の第17次調査では、一帯に軽石混黒褐色粘質土の盛土があり、これがW12～13を境として塔跡寄りでは一段低くなっており、一面に瓦片と土器類が散布している状況が確認された。W7～10で金堂と方向を同じくする梁行2間（3.45m）の掘立柱建物（SB09）9間分が検出され、西面回廊の一部である可能性が考えられたが、南面回廊の部分は確認できなかった。

③ 金堂跡西側の第18次調査では、SB09の北側への延長および金堂への屈曲部は検出されなかった。N5・W7付近で2×3間の掘立柱建物(SB08)を検出し、また塔跡の北東約23mで竪

穴住居１軒（ＳＪ08）を検出した。金堂の西側の部分には中世に属する墓壙７基があり、国分寺廃絶後金堂周辺が墓域化していたことを窺わせる。

④　第19次調査は塔基壇の規模と構造の確認を目的とした。この結果、基壇は一辺長1,920㎝(64尺）側柱列からの出は 420 ㎝（14尺）で、旧表土を掘り込んで版築状に盛土をし、標高 129 m を基部として角閃石安山岩切石を積み上げて側面の化粧をしている。礎石上面は標高130.25～130.34であることから基壇の高さは 120 ㎝（４尺）前後であるとみられる。

遺物　瓦を主に、コンテナーバット 300 個・飼料袋1,200 袋分以上が出土した。

発掘調査に併せて「史跡上野国分寺跡整備基本計画」を委託して作成した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要３』にまとめて発表した。

４．昭和58年度の調査

第12トレンチ拡張・第20～23次調査を、南大門の確認などを目的として行った。

遺構　確認された主な遺構の概要は次の通りである。

①　第21次調査は史跡地北西隅の墓地跡で、金堂中心から１町の線上(Ｎ133.9)にかかる位置で行った。ここは周辺より一段高い地形となっており、築垣の遺存することが期待されたが、地表下20㎝程度で砂質土の地山となっていることがわかった。このため築垣は残存していなかったが、Ｎ130から北側が僅かに高くなり、Ｎ136から北に向って急に低くなっている状況が検出された。最終的には金堂中軸線から北側へ１町の位置で、現在道路舗装の下にあると伝えられる礎石の確認をまたねばならないが、北辺築垣は金堂中心から１町の位置にある可能性が高いと判断される。

②　第23次調査は南大門の確認を目的として行ったが、東妻側の礎石３個と基壇、それに取りつく南辺築垣などが検出された。礎石は両側の心心距離が 630 ㎝で、南辺築垣の東半部はこの中心部に取りつく。築垣は地山を削り出した上に、基部巾 200 ㎝で粘質土を１単元３～５㎝で版築様に積み上げている状況が認められた。また１ヶ所のみであるが寄柱とみられる柱穴１対を検出した。この調査の結果から、（１）南大門で検出された礎石の方位は金堂・南辺築垣の方位と約4°の振れをもち、塔とほぼ同方位を示す、（２）現状の礎石の奥行きは 630 ㎝（21尺）であるが、これは「上野国交替実録帳」の記載と異なる、（３）南大門基壇は造り替えの行なわれた形跡があり、古い段階では南辺築垣と方位を同じくするものとみられる、（４）南辺築垣の西半部は東半部に対して北側に振れる方位をもつ可能性がある、（５）これまでの伽藍配置の想定と異なり、南大門は南辺築垣から内側に入って造られていた状況は認められない、（６）南大門の東約28ｍの所に方位を同じくする 680 × 560 ㎝で南北に長い基壇とみられる遺構がある、などの点が確認された。

遺物　瓦を主に、コンテナーバット 300 個分以上が出土した。南大門周辺では瓦溜があり、多数の文字瓦が出土したが、この中には「物部」・「大伴」などの人名、「山字」・「辛□」・「八田」など多胡郡に関係する地名の多いことが注目された。

これらの成果は『史跡上野国分寺跡発掘調査概要４』にまとめて発表した。

Ⅳ　調査の概要

1．目的および調査方法

目的　昭和55～58年度の調査の成果にもとづき、整備のための具体的な資料を得るために次の諸点を目的として実施した。

① 第15トレンチで検出された瓦溜の全容の確認。

② 南大門西端部分と南面築垣の取り付き状況の確認。

③ 寺域南西隅周辺の状況の確認。

④ 金堂の構造および規模の確認。

⑤ 金堂北西方の微高地の状況の確認。

調査方法　基本的には昭和55～58年度と同じである。

① 昭和56年度まではトレンチによる調査を主とし、状況に応じてこれを拡張する方法をとり、第1～15トレンチを設定した。昭和57年度以降は発掘区域を面的にとるためトレンチの名称を廃し、「第○次調査」と称している。

② トレンチ名称との混同を避けて第16次調査から始め、以後調査順に第26次調査まで実施した。

③ 調査基準線は国土座標Ⅸ系X＝＋43,750.0、Y＝－72,500.0を基準点として、座標北より4°西偏させて設定した。ただし本書においては、方位は国土座標によって表示している。

④ 各調査区域・遺構の座標値は、基準点を（0・0）とし、東・西・南・北をE・W・S・Nとして、これからの距離（m）でもって表示した。

⑤ 遺構の配置などの検討にあたっては1／200および1／500地形図を使用した。

⑥ 遺構は次の分類記号によって表示し、それぞれの遺構ごとに一連番号を付した。

SA：柱穴列など　SB：建物　SD：溝・濠　SE：井戸　SF：築垣・塀　SJ：竪穴住居　SK：土壙　SX：性格不明

Table. 1　調査区の位置と目的　　発掘面積　1,847.5㎡（23次西拡張を除く）

調査次	位置	目的	備考
23次西拡張	寺域南辺の中央部・南大門跡の西側 S92～102 E10～16	南大門西端部の確認	調査面積　55㎡ 昭和58年度調査の拡張（継続）
15トレンチ拡張	金堂の南東方 S15～20・E50～110 S20～25・E50～59 S20～25.5・E80～89	東面回廊の確認 瓦溜の全容の確認	調査面積　394.5㎡ 昭和56年度調査の拡張
24	寺域南西隅・塔跡の南西方 S81～S92・W60～72 S68～S71・W70～75.5 S50～58・W69～79	寺域南西隅の確認 西辺築垣の確認	調査面積　215㎡ 昭和55年度調査7トレンチの北側
25	金堂跡 N15～34・E13～42 N15～N30.5・E12～13 N14～15・E13～30 N12～14・E14～17.5	金堂の規模・構造の確認	調査面積　494㎡
26	金堂跡の北西方 N25～56・W6～30	金堂北西方の遺構の状況の確認	調査面積　744㎡

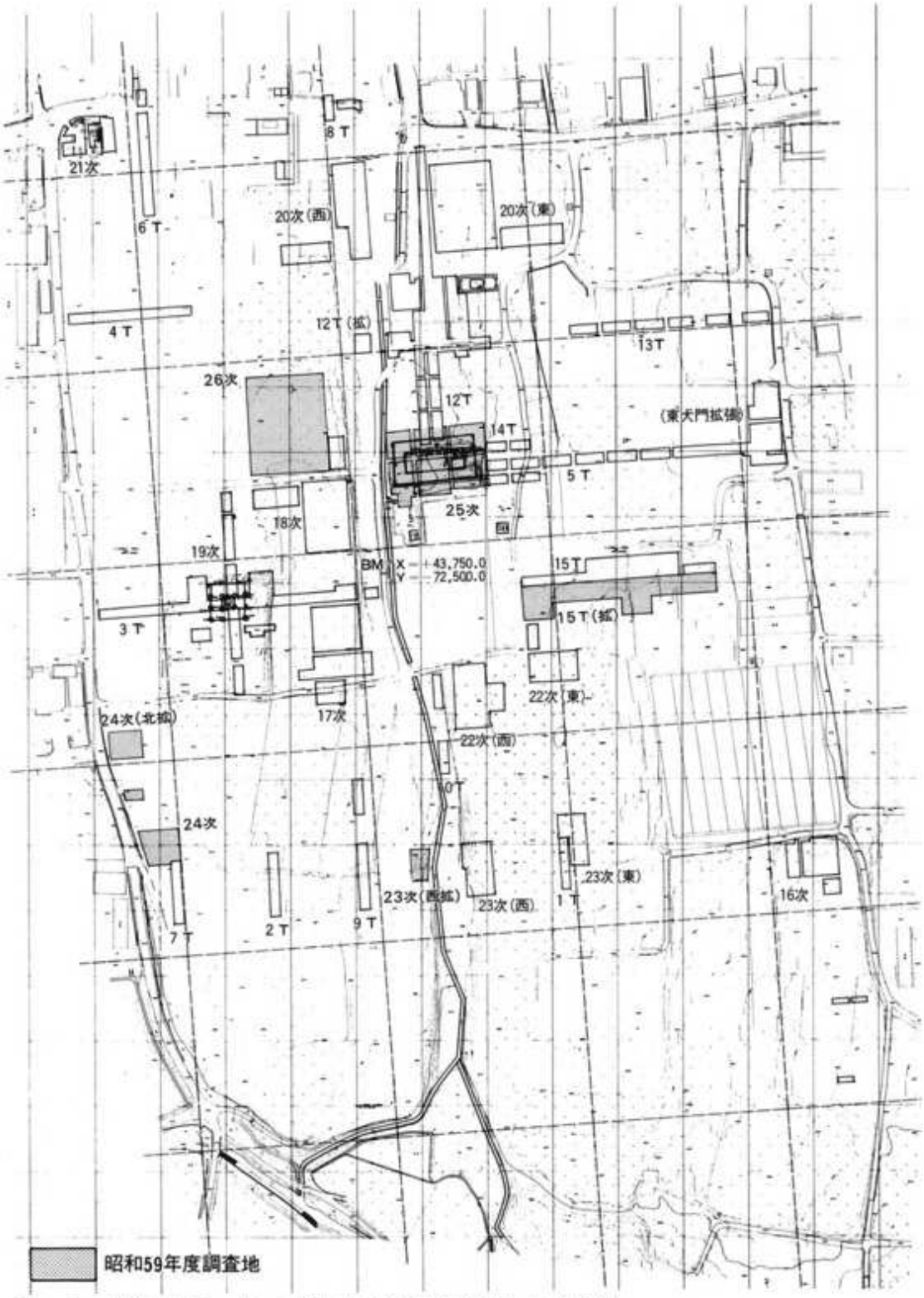


Fig. 3　遺跡全体図・トレンチおよび調査区位置図　1／2,000

2．調査の経過

本年度の発掘調査は昭和59年6月4日から昭和60年1月31日まで実施し、同2月1日からは資料および出土遺物の整理を行っている。以下、その経過を月ごとに略記する。

6月　4日より第24次調査に着手する。S89付近で南辺築垣の基部とみられる高まりを検出する。これから南は急に低くなっていることから、南辺築垣は「く」型に屈曲していたとみられる。北拡張区で長方形の掘形をもつ2×2間の掘立柱建物SB11を検出する。

7月　第23次西拡張区の掃除と実測を実施する。南大門の西端は確認できないが、南辺築垣の基部が検出される。15トレンチ拡張区の調査を進める。E50～70は地山が高く小柱穴が多数検出されたが、東面回廊と認められる遺構は確認されない。E80～90で瓦溜りの南半部を検出する。

8月　第25次調査に着手する。表土には夥しい量の瓦片・礫が混じり、発掘に手間どる。金堂の南側柱列の礎石3個を検出する。基壇は後世の撹乱が著しく、中世～近世の墓壙が重なり合う状態で検出される。身舎北側柱列の礎石の間に玉石列の設けられているのを確認する。

9月　第25次調査を進める。基壇中央部の撹乱のため、礎石は原位置から移動した1個の遺存を確認したにとどまり、礎石掘形も僅かに玉石の遺存により確認ができるにとどまった。また基壇中央部には東西方向に溝状に掘り込みがある。第24次のだめ押し調査により、平安時代の竪穴住居跡2軒を確認する。

10月　第24次の南面築垣の断ち割り調査を行う。15トレンチ拡張の瓦溜りのとり上げを行う。第25次から「勾舎人匚」がヘラ書きされた瓦片が出土する。第26次調査に着手する。9日に整備委員会幹事会議を開催する。

11月　第26次調査を行う。全体に表土は薄く、地山まで撹乱が及んでいる。長方形の土壙・小柱穴が多数検出される。また井戸跡が7基確認される。土壙SK33の埋土から平安時代の土器類が多数と鉄製鉸具などが出土する。国分寺に直接関係する遺構は確認できない。17日に「文化財の集い」・現地説明会を行い、20日に整備委員会を開催する。

12月　第25次の精査を行う。基壇南縁の一部を確認するが、東・西・北縁部は削平が著しい。第26次調査を続行する。実測の後だめ押し調査を行う。

1月　第25次の実測の後、基壇の一部断ち割り調査を行い、地形および築土の状況の確認をする。26日に埋め戻しと金堂基壇の養生作業を終了する。

2月以降　各種調査資料の整理と出土遺物の洗浄・注記・実測および拓本とりなどの作業を進める。また文字瓦については、拓本と各データを記入した検索用カードの作成を行う。

調査期間中、学校・史跡研究グループ・公民館主催の団体、研究・視察など多数の来跡者があり、できる限りの案内・説明をするように努めたが、十分になし得たとは言い難い。史跡整備のもつ意義を考慮した場合、調査とともにこれらの案内・説明にもより積極的な対応がなされるべきことが痛感された。

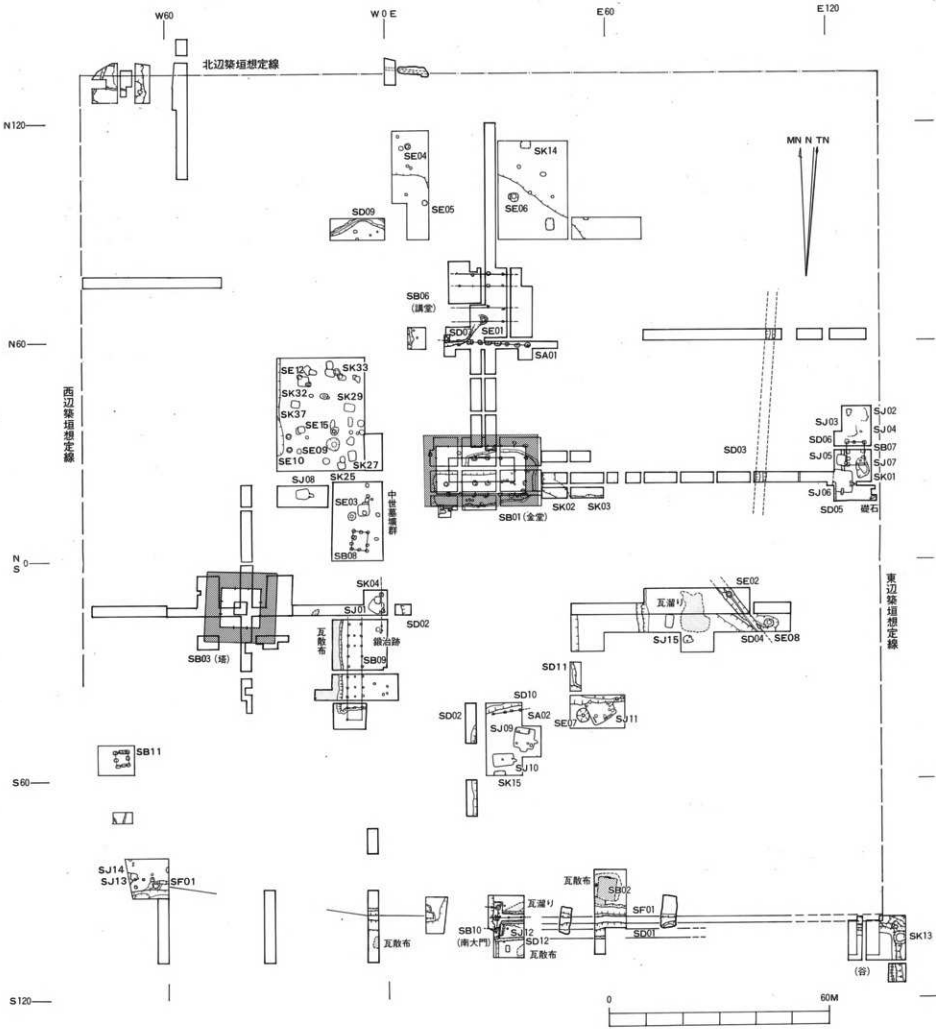


Fig. 4　遺構全体図　1／1,000

3．第23次西拡張調査

(1) 遺　構

昭和58年度の第23次調査によって東妻側柱列の礎石が検出された南大門（ＳＢ10）の西端部分の確認と、南大門と南辺築垣の取り付きの状況の検出を目的として調査を行った。

南大門については、長元３（1030）年に作成された「上野国交替実録帳」金光明寺項に「南大門壹宇　長伍丈捌尺　広壹丈伍尺　高壹丈参尺」と記されており、1010年代には既に減失していたと記録されている。また築垣についてもこの時までに全壊していたとされている。この記事から南大門の規模は間口17.4ｍ前後、奥行4.5ｍ前後と想定された。このような史料による所見を勘案しつつ第23次調査を実施したが、南大門に関する主な成果と問題点は次のようであった。

① Ｓ95.2～101.4の範囲でＥ29.6ラインを中心とする位置に、南大門東妻側柱の礎石と認められる80×80cm前後の自然石を使った礎石３個が南北に並んで検出された。北側礎石と南側礎石との心心距離は630cmで、その中心に中央礎石が位置する。礎石上面の標高は北側から127.75ｍ－127.74ｍ－127.70ｍとなり、方位はＮ－0°－Ｅで調査軸線に対し4°の振れを示す。

② 北側礎石中心から北へ120cmの位置に、30cm大の玉石が３個東西方向に並んでいるのが検出された。この方位は礎石の方位と直交する関係にあり、南大門基壇の北側縁石の一部と判断された。この上面は標高127.69ｍで、礎石上面との比高差が６cm以下であることから、縁石は原状でも１段であったと判断され、基壇は寺域内の生活面より45cm程度の高まりで造られていたとみられる。

③ 基壇は南辺築垣の外側に設けられている溝（ＳＤ01）に張り出す形で造られており、南側縁下部は南側礎石中心より240cmの位置にある。この張り出し部の東側縁の基部には径30cm前後の扁平な玉石が並べられている。この石の下部の標高は126.60ｍである。

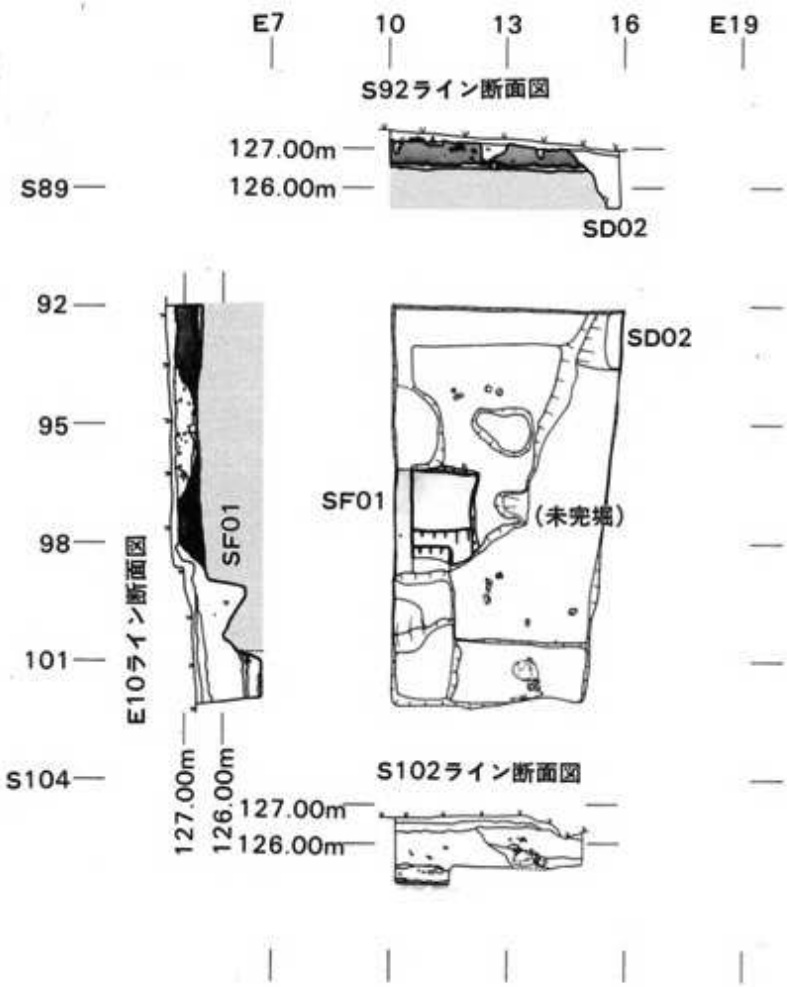
④ 南大門基壇の東側中央部に取りつく形状で、東に延びる築垣が検出された。Ｓ98.4を中心とし、現況で築土の上部巾180cm・同基部巾200cm、地山を削り出した上に軽石混黒色土を盛って造った築垣基部巾420cmを測る。この築垣基部上面に外側は約60cm、内側は約40cmの巾で犬走り状の平坦部を設け、この間に黒色粘質土とローム混暗褐色粘質土を１単元３～５cmの厚さで版築様に積んだ本体部がある。

⑤ 以上のことから、南大門の礎石の距離は630cm＝２丈１尺であり「上野国交替実録帳」に１丈５尺と記されているのと相違し、南大門の礎石の方位は南辺築垣東半部分と直交しておらず基壇東側縁の玉石列は現基壇盛土内部にも方位をやや異にする一列が検出されており、改修のなされた可能性が考えられる点が注目される。

今回の西への拡張では、「上野国交替実録帳」の記事に従って東妻側柱列（Ｅ29.6）から西へ５丈８尺＝17.4ｍの線（Ｅ12.2）がかかるように調査区域を設定し、第23次調査区の西側に接してある大規模な南北方向の溝状の掘り込み（ＳＤ02）の西岸付近で、南大門跡の西側にあたる位置の調査を行った。ここは地形的にＳ97～98を境に北が高く、南が低くなる段差のあるのが認め

られ、以前に旧地主により南大門跡で検出されたのと同様の礎石とみられる自然石２個が掘り出されている。調査の結果、耕作による撹乱は比較的少ないが、S92・E15とS99・E12とを結ぶ線から東は溝状の掘り込み（ＳＤ02）によって撹乱をうけており、南大門とみられる遺構は確認できなかった。しかし、E10～12.1では南辺築垣の基部とみられる東西方向の帯状の盛土のあるのが確認されるなどの成果を得た。

ＳＦ01（南辺築垣）　S96.1～98.4、E10～12.1の位置で、現状で上部巾150㎝、基部巾330㎝高さ55～60㎝の断面が台形を呈する帯状の盛土が検出された。白色小礫を含む赤褐色土の地山面の上に、強い粘性をもつ軽石混黒褐色粘質土を固く締めて造られている。この地山上面の標高は



断面図中の斜線は地山および自然堆積土を、アミ（細い）は築垣基部盛土を、アミ（粗い）は整地盛土を示す。

Fig. 5　第23次西拡張調査区全体図　1／200

126.5～126.6mである。その形状および位置から南辺築垣の基部の一部であると判断される。この南側は、S98.6で地山が急角度に約100cm掘り込まれており、S 100で一度山型に高くなるがここから南では再び一段深く掘り込まれ、その底部は標高125.05m付近となる。S98.6～100の掘り込みは、埋土中に中世以降の遺物が含まれること、人骨の含まれることから、後世になされたものと判断される。S 100以南の掘り込みには、底部に地山の崩落による黄灰褐色土、その上に瓦片を含む黒褐色粘質土、築垣基部の崩落による灰色砂（FAとみられる）を含む暗褐色粘質土の堆積が見られることから、南辺築垣南側の溝（SD01）にあたるものであるとみられる。築垣の北側は、地山面の上に軽石混黒褐色粘質土が堆積するが、これには創建期の軒平瓦片を含む瓦片が少量包含されている。この現状での上面の標高は127.2mであり、第23次調査で確認された南大門北側の旧生活面の標高が127.69mであることを考慮すると、南大門および南辺築垣の建立に伴ってなされた整地のための盛土であると考えられる。

SD02　S92・E15とS99・E12とを結ぶ線から東に向って急傾斜の掘り込みが確認されたが、これは寺域中央部を南北に走る溝状の掘り込み（SD02）の西岸にあたる。S92ラインでみるとこの掘り込みは整地盛土である軽石混黒褐色粘質土の上面からであり、埋土の軽石混暗褐色土には瓦片・礫・五輪塔の部分などが含まれている。

以上の状況から、南辺築垣は南縁部が削平を受けた可能性があり、原状ではさらに1m前後南側に巾広であったとみられる。その場合、南大門の東側では南辺築垣の中心がS98.4であるのに対し、この位置ではS97.8付近（現状ではS97.3付近）となり北へ寄っている。このことは南大門礎石が、金堂と方位を同じくする南辺築垣東半部と一直線ではなく西側で北へ振れる方位をもって検出されたことを考え併せると、南辺築垣西半部は東半部と一直線ではなく西側で北へ寄る傾きを持つ形状であった可能性を示している。さらに表土の堆積状況を見ると、この築垣基部を境にして南側が一段下っており、ここから西に延びて認められる現地形の段差は築垣の位置を示すものであることが想定できる。南大門についてはその西端を確認することはできなかったが、築垣基部および南側の溝状掘り込みの状況から、その位置はE12より東であることは確実であり、また今回の調査において礎石とみられる石が出土していることを考え併せると、それはE12～15の範囲にあった可能性が高いと判断される。

(2)　遺　物

表土中には瓦小片が包含され、またS94～96・E10～11.4にある楕円形土壙の埋土には瓦片・礫が多く含まれていた。整地盛土の上面には瓦片・人頭大の礫とともに角閃石安山岩切石1点のあったことが注目される。S92・E12～13のSD02の埋土中位に多量の瓦片・礫に混じり、角閃石安山岩製の五輪塔火輪1点、60×50×40cmの自然石1点が出土した。この自然石は礎石とみられるが、原位置からは移動しており、根石などの所在も確認できず、どの部分に使われたものであるかは不明である。

4．第15トレンチ拡張調査

(1) 遺　構

昭和56年度に調査を実施した第15トレンチを南に拡張した。E50～67では厚さ約30cmの表土下は黄褐色ロームの地山となるが、E67から東では地山は一段下がっており、E 105付近から東では再び高くなる。第11トレンチおよび第17次調査の結果から、E52.6～62.2の間で東面回廊の検出が期待されたが、この範囲では30～40cm大の小柱穴が多数検出されたものの、回廊または建物としてのまとまりを確認するには至らなかった。

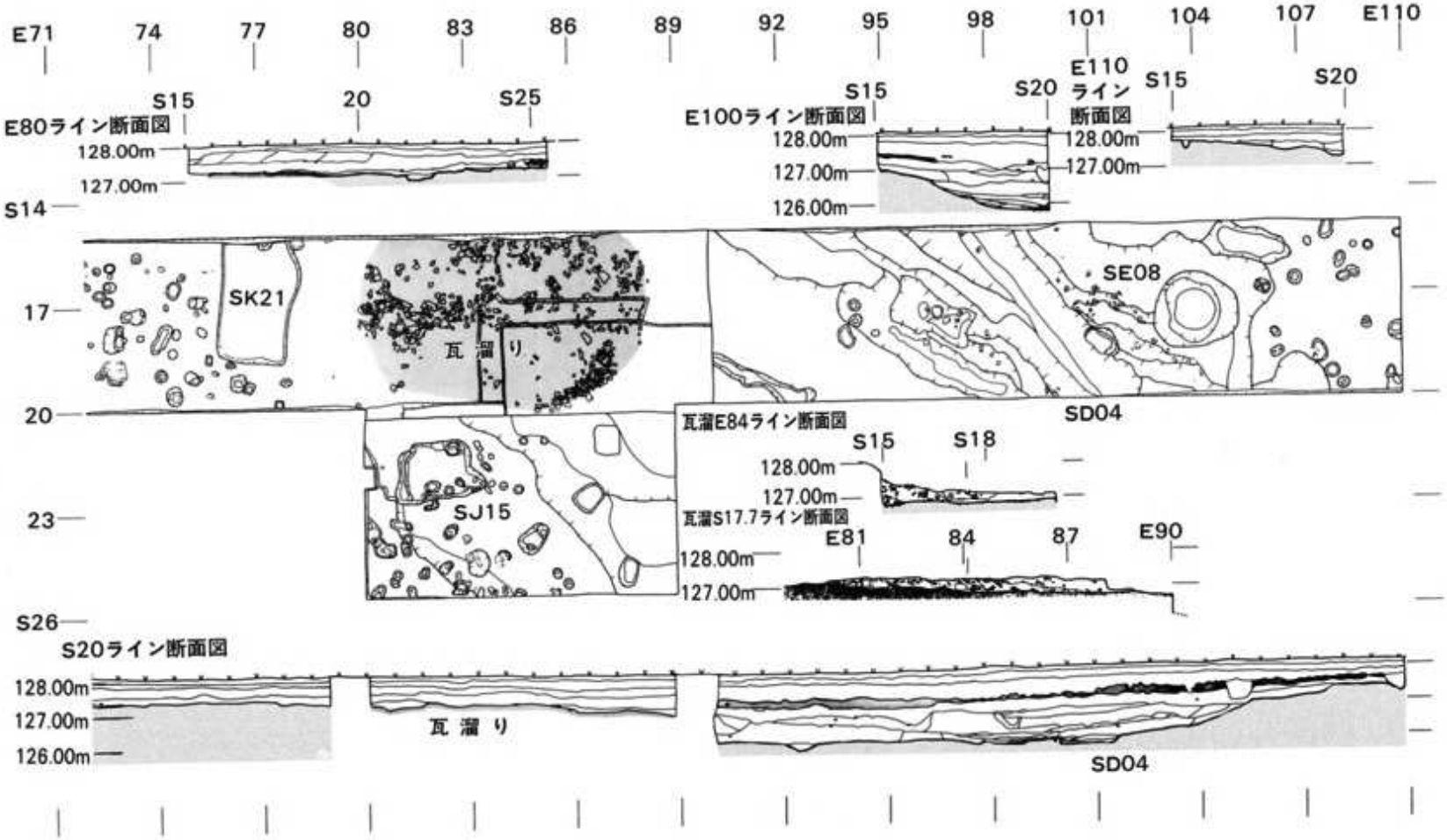
SD04　S15ラインのE95.5～99とS20ラインのE101～104とを結ぶ位置で、溝1条が検出された。上部巾約200cm、底部巾約30cm、深さ約80cmで断面は「∨」型を呈する。方位はN－40°－Wを示し、底部の標高はS15・E97.5で126.0m、S20・E101.3で125.8mと北西から南東へ向って緩く下がっている。S18.5から南では自然地形が南西に向かって下がっている関係で西岸の立ち上りはほとんど無くなっている。東岸中位のS18・E101には110×50cmの長方形の掘り込みがあるが、溝底部へ降るための中段とみられる。時期については底部に瓦片が入るが新しい時代の遺物は認められず、底面より130cm上に浅間山B軽石の堆積が認められることから、国分寺存続期のものとみられる。

SJ15　S21～23・E81～83.5で、黄褐色ロームを掘り込んだ竪穴住居1軒が検出された。東西長210cm×南北巾160cm、壁高30cm前後で床面には凹凸が多く、柱穴・貯蔵穴は無い。方位はE－6°15′－Nを示し、東側壁南端部にカマドが設けられている。埋土中には大形の瓦片、土器片などが多数包含される。カマド内部には焼土が少量混じるが、壁体はほとんど焼けていない。時期については出土する土器から9世紀前半のものとみられ、存続期間は短かったと判断される。

SE08　S17～18・E103～105で上部径240cm、本体部径110～120cm、深さ750cmの円形の素掘りの井戸遺構が検出された。上部が朝顔型に開く形状を示すが、石組・木枠などの施設は確認できていない。埋土中には内耳鍋型土器などが含まれ、中世に使用されたものとみられる。

瓦溜り　S15～20・E80～88で、暗褐色粘質土上に多量の瓦片などが山盛り状に堆積しているのが確認された。これは第15トレンチで検出された瓦溜りの南半部である。この下面は標高126.8m、上面は127.4m付近にある。今回の調査により瓦溜りは南北約11m、東西約8mの範囲で、中心部の厚さ約70cm、周辺部では薄くなる形状を示すことが確認された。瓦片は焼土、壁土塊、漆喰片を多く含む暗褐色土中に乱雑な状態で積み重なるようにしてあり、瓦完形品、鬼瓦、塑像片、凝灰岩切石、土師器坏なども含まれている。この状況から、この瓦溜りは寺域内の窪地に建造物の残骸を廃棄したものとみられるが、出土品および位置から金堂のものと判断される。この瓦溜りの形成された時期は内耳鍋型土器、石臼などが含まれることから中世であると考えられる。

調査の状況をみると黄褐色ロームの地山がS18～20・E90～96を底部とする擂鉢状の地形となっており、この直上まで瓦片、奈良時代に属する土器片の散布が認められる。この底部の標高は125.95mを測る。このことから国分寺創建前後にこの面まで露出をしていたことがわかる。



断面図中の斜線は地山および自然堆積土を、土層中位のアミの部分は浅間B軽石を多量に含む黒褐色土を示す。

Fig. 6　第15トレンチ拡張調査区主要部　1／200

(2) 遺　物

E50～70の表土下部からは、耕作によって出土した瓦片が再び埋め込まれた状態で出土している。E70～77の地山面上で検出された小柱穴の埋土の中には瓦片を含むものがあるが、S17.5・E74.5にある方形の小土壙の底部には素焼きの皿の完形品が1枚は伏せて、1枚は上向きの状態であった。この状態がどのような意味をもつのかと併せて、この付近の遺構の存続年代を知る上で重要である。またE100～110の表土下層から、内面に輪宝を墨書する小型の素焼きの皿1点が出土している。これと同様に輪宝を墨書する土器は、昭和56年度の第12トレンチの調査でも1点出土しているが、仏教的特色をもつこのような資料の出土は、国分寺衰退の後、この付近がどのように使われていたかを示唆するものと言えよう。瓦溜りからは完形品を含む夥しい数の瓦が出土しているが、それとともに塑像台座とみられる瓦質の焼成品、凝灰岩切石なども出土している。これらの包含層には壁土塊、漆喰片なども多数含まれていることから、この瓦溜りは大規模な瓦葺き建物の廃材を棄てたものとみられ、その位置を考慮すると、これらは金堂のものである可能性が強い。竪穴住居SJ15の床面および埋土中からは多数の瓦片が出土し、カマドからは9世紀前半に属する土師器甕や須恵器蓋の出土をみた。この住居が現地表下100cm以下にあることを考えると、この付近の各時代ごとの地形の状況を知る良好な手懸りとなる。

Table. 2　第15トレンチ拡張調査区出土遺物（Fig. 7）　　法量の（　）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	法量(cm) 底部径	法量(cm) 高さ	胎土 素地	胎土 挟雑物	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	瓦溜	塑像片	——	——	——	粗	砂粒多し	軟質	黒褐色	3片が接合。台に目の細かい布を敷き粘土板を重ねながら成形し、ヘラ状のもので整工。クシ状のもので界線、竹筒状のもので模様を刺突して作る。	PL. 16-1
②	表土	坏	(16.4)	——	5.4	やや粗	砂粒	軟質	赤褐色	口辺½を欠く。体部外面はヘラ削り、口辺ヨコナデ、体部内面はヘラナデ、底部ユビナデ。	
③	表土	蓋	(10.6)	——	——	やや粗	黒色鉱物	硬質	暗褐色	小破片。ロクロ水挽き成形。	
④	瓦溜	坏	10.8	——	3.0	粗	砂粒多し	軟質	暗褐色	ほぼ完形。底部外面はヘラケズリ。	
⑤	SJ15	蓋	17.0	4.0	4.5	粗	黒色鉱物	硬質	灰色	ほぼ完形。ロクロ水挽き成形、回転ヘラケズリ後摘みを付す。	15-1
⑥	瓦溜	坏	(14.0)	(8.0)	(6.5)	やや密	白色鉱物	硬質	灰色	1/4程度。左回転ロクロ成形底部糸切後付高台。	
⑦	瓦溜	坏	(13.4)	(6.2)	(6.8)	粗	石英など	やや軟質	灰白色	1/4程度。右回転ロクロ糸切未調整後付高台。	
⑧	表土	甕	(20.8)	——	——	やや密	砂粒	軟質	赤褐色	口辺破片。輪積成形。口辺ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
⑨	表土	甕	(20.0)	——	——	やや粗	砂粒	軟質	赤褐色	口辺破片。輪積成形。口辺ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	
⑩	表土	甕	(18.0)	——	——	やや粗	黒色鉱物	焼き締め	灰色	口～体部の1/4程度。輪積(？)後口辺ヨコナデ、体部外面平行叩き、内面同心円叩きを比較的丁寧にナデ消している。	
⑪	表土	小皿	7.0	4.0	2.0	やや粗	白色鉱物を僅か含む	やや軟質	黄褐色	完形。左回転ロクロ成形後糸切未調整。内面に輪宝の墨書があり、その中央に梵字「ア」を記す。	15-2
⑫	SE08	皿	12.6	7.0	3.1	粗	砂粒	軟質	赤褐色	完形。左回転ロクロ成形後糸切未調整。口辺ヨコナデ。	
⑬	SE08	皿	12.8	6.6	2.6	粗	砂粒	軟質	赤褐色	完形。左回転ロクロ成形後糸切未調整。口辺ヨコナデ。	

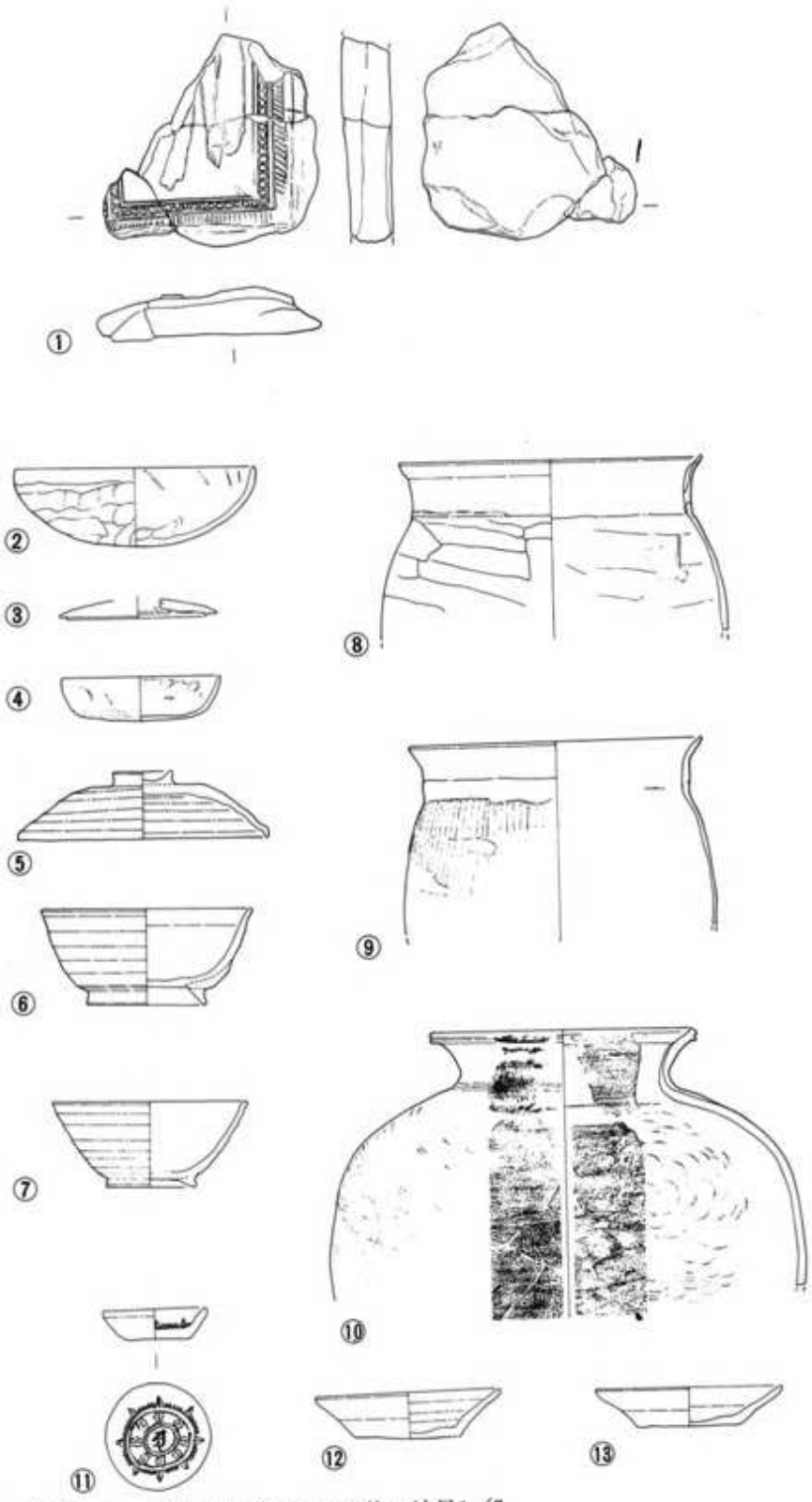


Fig. 7　第15トレンチ拡張調査区出土遺物　縮尺1／5

Table. 3　第15トレンチ拡張調査区出土軒丸瓦（Fig. 8）

番号	出土位置	胎　土	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	瓦溜	素地はやや粗く、白色鉱物細粒を多くふくむ	硬質	暗赤褐色	瓦当部完形。裏面に布目がある。丸瓦部凸面ナデ。接合は丸瓦部に瓦当部をはめ込んでいる。	PL. 17-1
②	瓦溜	素地は粗く、黒色鉱物を多くふくむ	やや軟質	黄灰色	瓦当部完形。裏面は下半ケズリ。上半から接合部にかけてユビナデ。丸瓦部凸面ケズリ後ナデ。側端の面取り3。	17-2
③	瓦溜	素地は粗く、石英・白色鉱物を多くふくむ	硬質	灰色	瓦当部上端～丸瓦部を欠く。裏面下半ケズリ。上半ユビナデ。接合は、瓦当部をレンズ状につくり、はめ込む為の溝をつくって丸瓦部をさし込んでいる。	17-3
④	瓦溜	素地は粗く、黒色・白色鉱物等を多くふくむ	焼き締め	外面灰白色、断面赤褐色	瓦当部1/4程度残存。裏面に布目があり、合せ目が残る。	17-4
⑤	瓦溜	素地は粗く、石英・白色鉱物を多くふくむ	焼き締め	外面灰白色、断面赤褐色	瓦当部1/4程度残存。裏面ナデ。薄皮を剥ぐように剥離が認められる。	17-5
⑥	瓦溜	素地はやや粗く、白色鉱物細粒を多くふくむ	やや軟質	外面灰白色、断面赤褐色	瓦当部小破片。裏面に布目あり合せ目が残る。粘土の継ぎ目があり断面レンズ状を呈する。	
⑦	瓦溜	素地はやや粗く、白色鉱物細粒を多くふくむ	焼き締め	外面暗灰色、断面褐色	瓦当部小破片。裏面に布目あり。1本作り。⑤の踏み返しか。	
⑧	瓦溜	素地は粗く、白色鉱物細粒を多くふくむ	硬質	灰色	瓦当部1/4程度残存。裏面に布目が残り布の合せ目がある。断面レンズ状を呈する。	17-6

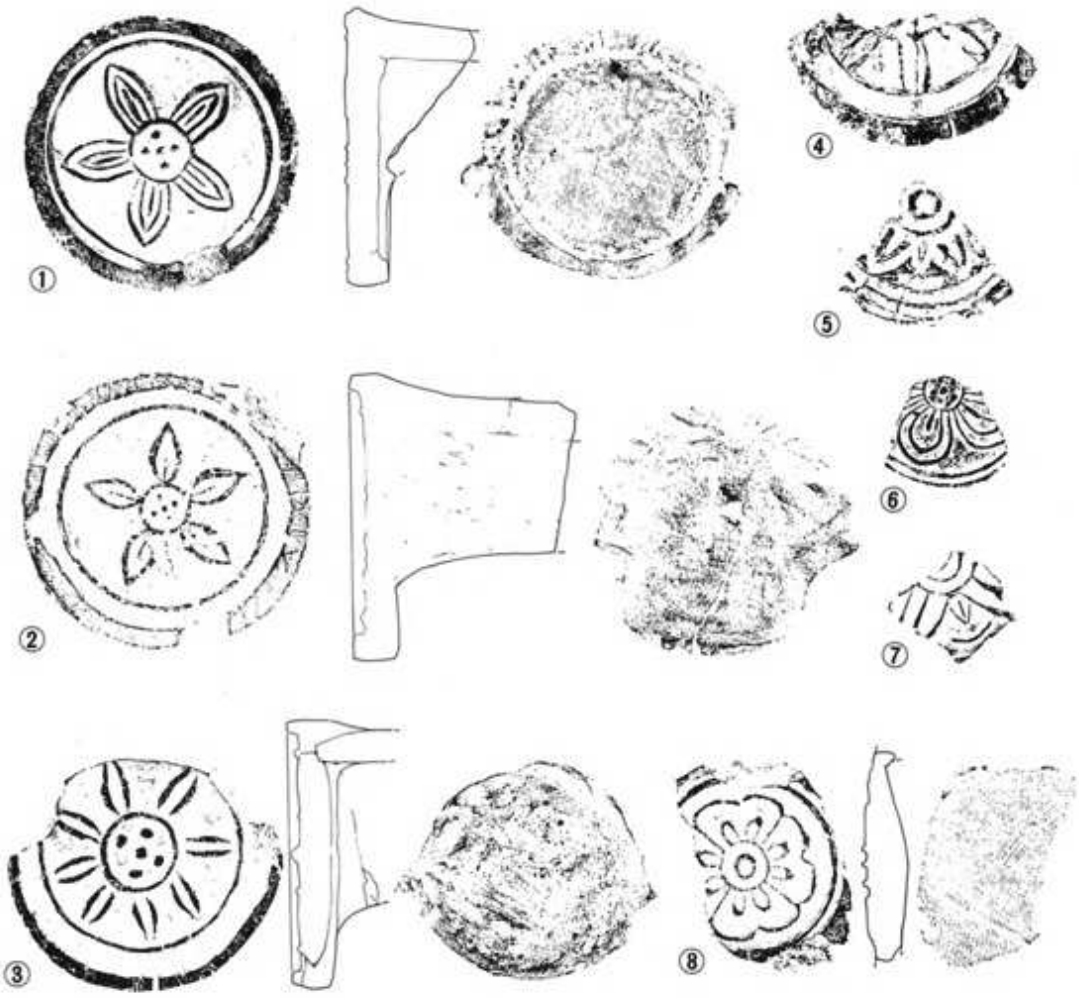


Fig. 8　第15トレンチ拡張調査区出土軒丸瓦　縮尺1／5

Table. 4　第15トレンチ拡張調査区出土軒平瓦・鬼瓦（Fig. 9）

番号	出土位置	胎土	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	瓦溜	密、白色鉱物小石を含む	硬質	灰色	凸面はナデが施されているが縄目叩きが残る。顎部付近には赤色塗料の付着が認められる。凹面はタテ方向にヘラナデ。側面の面取り3	
②	瓦溜	やや密、白色鉱物を含む	やや軟質	灰色	凸面は顎部、平瓦部共にヨコ方向の丁寧なナデ。凹面は丁寧なナデ。側面の面取り2	PL. 18-1
③	瓦溜	密、黒色・褐色鉱物を含む	やや軟質	黄灰色	瓦当部完形。凸面はタテ方向のナデが施されているが斜格子叩きあり。顎部付近には赤色塗料の付着が認められる。凹面はヨコ方向の比較的丁寧なナデ。側面の面取り2	18-2
④	瓦溜	やや粗、やや大粒の白色鉱物を含む	やや軟質	外面は赤褐色 断面は灰色	凸面は顎部、平瓦部共にヨコ方向のナデ。顎部付近には赤色塗料の付着が認められる。凹面は布目痕あり。側面の面取り3	
⑤	瓦溜	粗、白色・黒色鉱物を含む	軟質	凸面は淡灰色 凹面は褐色。 断面は灰白色から暗褐色	凸面は顎部はヨコ方向のヘラケズリ。顎部と平瓦部の境はヨコ方向のナデ。顎部付近には赤色塗料の付着が認められる。凹面は布目痕あり。側面の面取り2	18-4
⑥	瓦溜	やや粗、細かい白色鉱物を含む	やや硬質	灰褐色、部分的に明褐色	凸面は顎部から平瓦部にかけてナデ。凹面は瓦当部の縁を指でヨコ方向にナデているが、平瓦部は布目痕あり	18-6
⑦	瓦溜	粗、大粒の白色鉱物、小石を含む	軟質	灰色	凸面は顎部、平瓦部共にヨコ方向のナデが施され、顎部付近の平瓦部には一部赤色塗料の付着が認められる。凹面は布目痕あり。側面の面取り3	18-5
⑧	瓦溜	やや粗、大粒の白色鉱物を含む	やや軟質	灰色	表面は笵型によって作られているが、鼻の先端部は欠けている。裏面は粘土板剥ぎ取り痕、布目痕あり。側面はヘラケズリ。上半部が残存。	18-13
⑨	瓦溜	やや粗、大粒の白色鉱物を含む	やや軟質	灰色	表面は笵型によって作られている。裏面は布目痕あり。側面はヘラケズリ。左下部が残存	

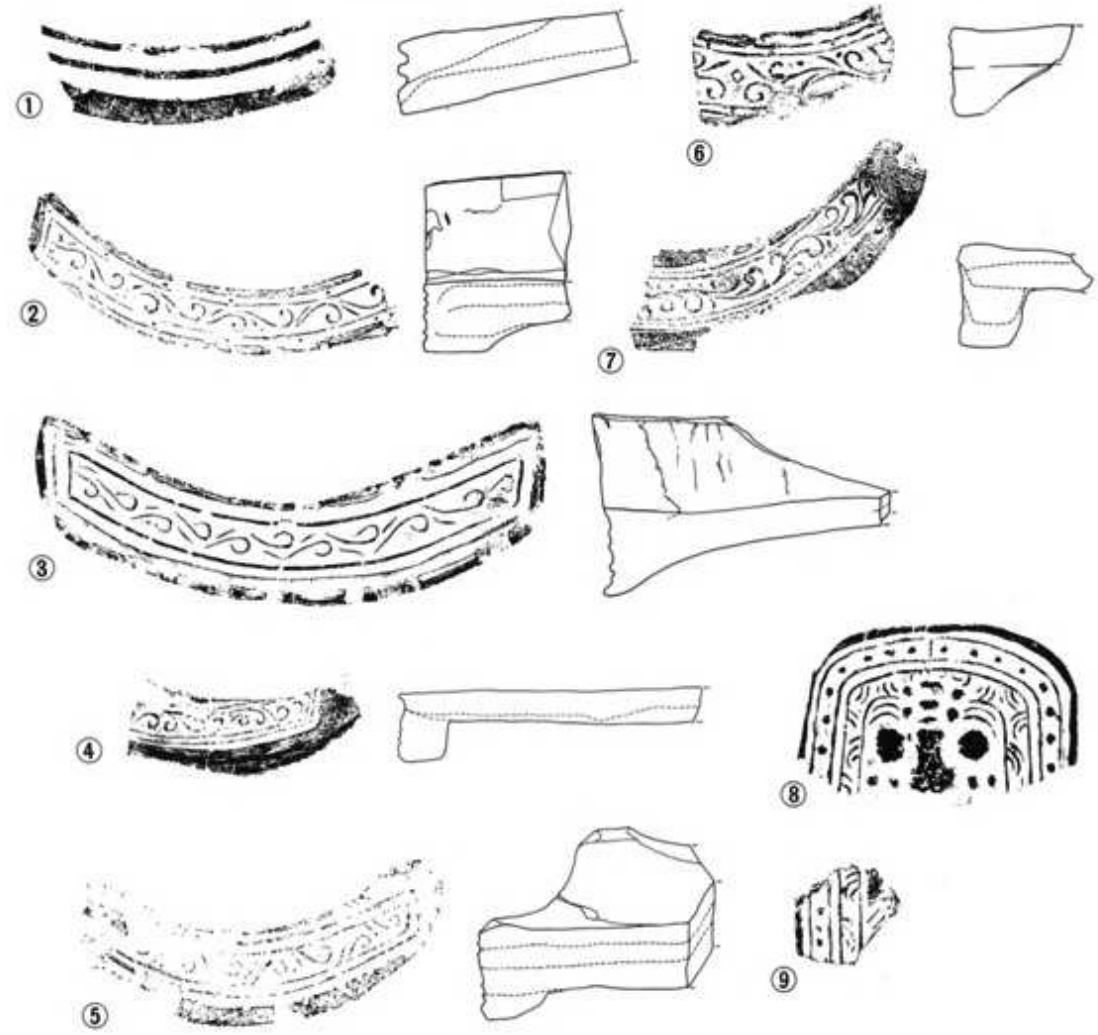


Fig. 9　第15トレンチ拡張調査区出土軒平瓦・鬼瓦　縮尺1／5 ⑧・⑨は1／10

5．第24次調査

(1) 遺　構

昭和55年度の第7トレンチ（S 92～110・W60～63）は、寺域南面東半部の第1トレンチなどで検出された南辺築垣の西端部分を確認するため、築垣の西側への延長線上に設定して調査を行ったが、想定位置（S 96～101）では地形は窪地状を呈しており、築垣に伴う遺構は確認されなかった。このためこの北側に接し、現地形で段差の認められる部分を含む位置に調査区を設定して調査を実施した。また、西辺築垣の確認を行うため、この北側約35mで史跡地西端に接する位置に北拡張区を設定した。この寺域南西隅付近は耕作による攪乱が深さ約60cmで黄褐色ロームの地山に達しているが、南辺築垣の一部および竪穴式住居跡などを検出した。

SF01（南辺築垣）　S87.6～90・E60～64.4の位置で東西方向の帯状の高まりを検出した。北側が耕作により削られているが、現状で上部巾140cm前後・下部巾275cm前後の台形状で、ロームを少量含む軽石混り黒褐色粘質土が固くしまった状態であり、W62.5～64.4ではこの上に黄褐色ロームと暗褐色粘質土が1単元の厚さ約8cmで3層分残存しているのが認められた。この南側は地山が掘り下げられた形状を示していることを考慮すると、この盛土は南辺築垣の基部でありその上の築土は築垣本体の残部であると判断される。この標高をS88.5・W63の位置でみると基部盛土下面（地山上面）は127.08m、同上面は127.32m、本体築土上面は127.47cmとなる。方位は調査軸線にほぼ一致するが、僅かに西に進むに従って北へ寄る傾向を示している。この基部盛土中からは国分期に属する須恵器埦の小片が出土し、またこの下部には焼土塊が混じり、細長い玉石が立てるようにしてあるのが確認された。これは竪穴式住居のカマドの残骸であるとみられ、このことから南辺築垣の西端部付近は、平安時代に基部の盛土から造り直しがされたことが知られる。それ以前の位置については確認できない。この所見から、現地形にみられる段差は築垣の位置に重なるものであることが明らかになり、南辺築垣の西半部は南大門の東側を基準とすると西へ100mの位置で10m北に寄る形状であったことが明らかになった。

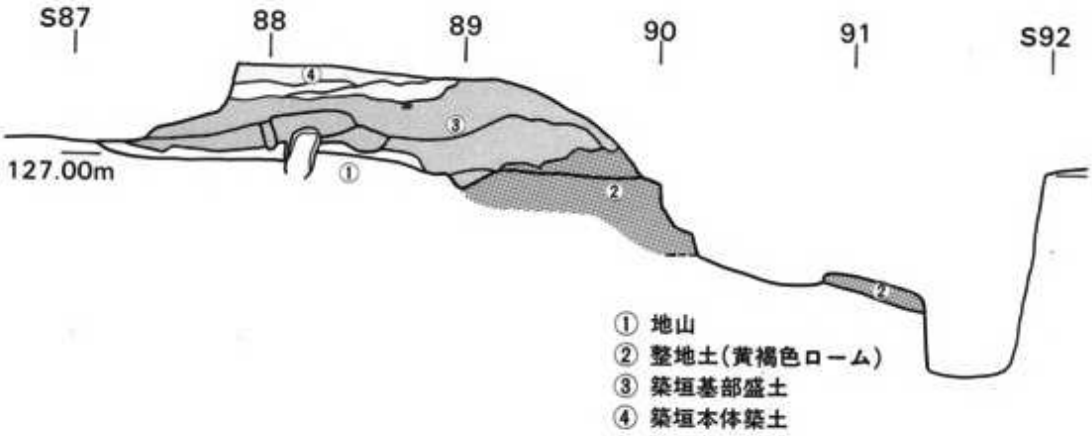
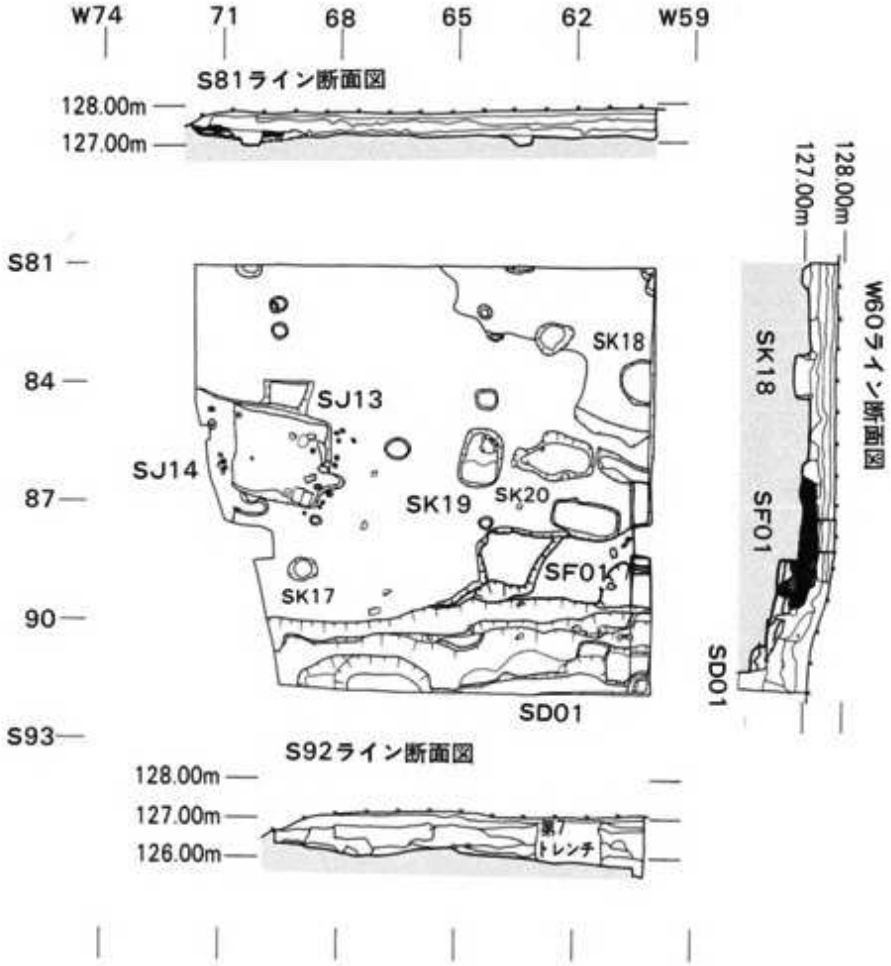


Fig. 10　南辺築垣(SF01)断面図(W63ライン)　1／40

ＳＪ13　Ｓ86～89・Ｗ67～70の軽石混りの暗褐色粘質土面上に浅間山Ｂ軽石層のあるのが検出された。この下面の標高は127.2ｍであり、これが12世紀初頭の地表面と判断される。Ｓ86・Ｗ70を中心とする位置で、この軽石層下から竪穴式住居２軒が検出された。東側のＳＪ13は250×250㎝の小型のもので、東側壁の中央よりやや南寄りにカマドが設けられている。方位はＥ－6°－Ｓを示す。床面は黄褐色ローム層に造られており、固くしまっているが凹凸が多く、柱穴・貯蔵穴は無い。検出面からの深さは20㎝前後を測る。床面上には土器および大形の瓦片・玉石などが散布するが、南東隅には平瓦完形品が２枚凸面を上にして並べるようにしてあった。カマドの状況からみて、使用された期間は短かったと考えられる。時期は10世紀初め頃のものとみられる。

ＳＪ14　ＳＪ13の西に接してあり、西側⅔以上は地形の変化によって滅失している。規模はＳＪ13よりやや大きめとみられ、東側壁に焚口の袖に瓦を使ったカマドが設けられている。伴出する



断面図中の斜線は地山および自然堆積土を、アミ（細い）は築垣基部および本体盛土を、アミ（粗い）は整地盛土を示す。

Fig. 11　第24次調査区全体図　1／200

土器からみてＳＪ13よりやや古いものとみられる。

ＳＢ11　北拡張区のＳ51～56・Ｗ70～75で２×２間の掘立柱建物１棟を検出した。100×80cm前後の長方形の掘形をもち、深さは現状で50cm前後であるが東西の妻側中柱は20cm前後と浅く、30cm大の蜂巣石および角礫を礎石状に据えている。規模は東西の桁行が390cm、南北の梁間が360cmを測る。柱間は等間とみられるが、平面形は若干の歪みをみせている。方位はE—9°45′—Nを示す。柱穴掘形の埋土は黄褐色土を含む黒色粘質土を主体とし、この中には縄文時代中期の土器片および打製石斧片が少量包含されるが、土師器・瓦片などは含まれていない。これらの点と、これまでに寺域内で確認された掘立柱建物の状況とを勘案すると、この建物は奈良時代に属するものである可能性が高い。

これらの他にＳ81～87では、国分寺存続期のものと推定できる底部に径30cm大の扁平な玉石を礎石状に据えた長方形土壙（ＳＫ19）、内部に浅間山Ｂ軽石がつまった状態である円形土壙（ＳＫ17）、粘性の強い黒褐色土の埋土中に縄文時代中期の土器片、打製石斧片などを含む円形土壙（ＳＫ18）などが検出された。これらは単独であるためその性格は不明であるが、ＳＫ17は南辺築垣と重なる位置にあることが注意される。

今回の調査の結果と第23次西拡張調査区での所見を考え併せると、南辺築垣の西半部は東半部と一直線をなさず、西に進むに従って北へ寄る形状であったことがほぼ確実となった。そして現地形で北が高く南が低くなる段差が、築垣の位置を示すものであることがわかった。しかも、こ

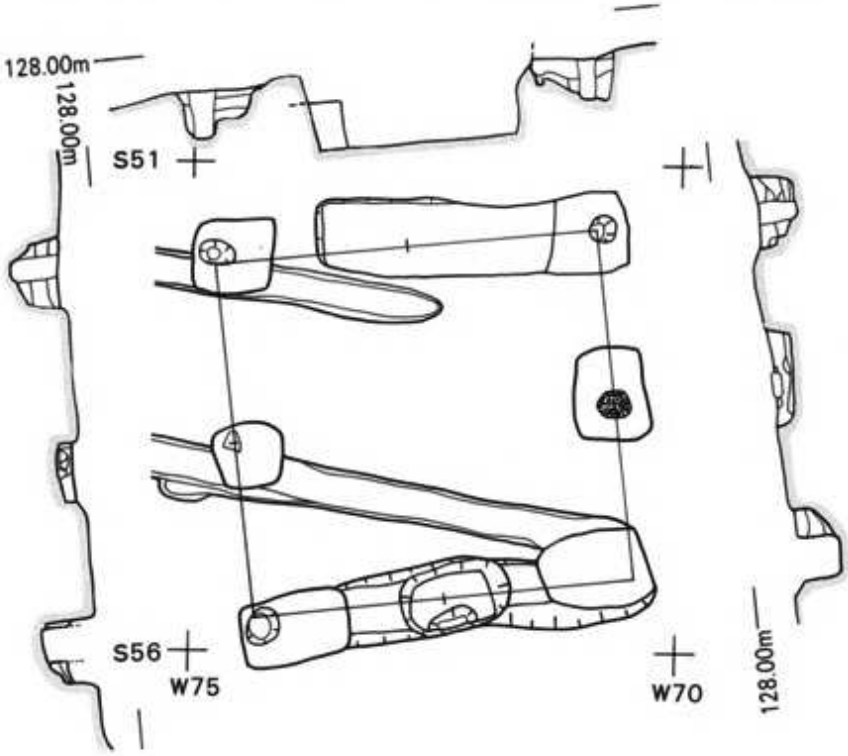
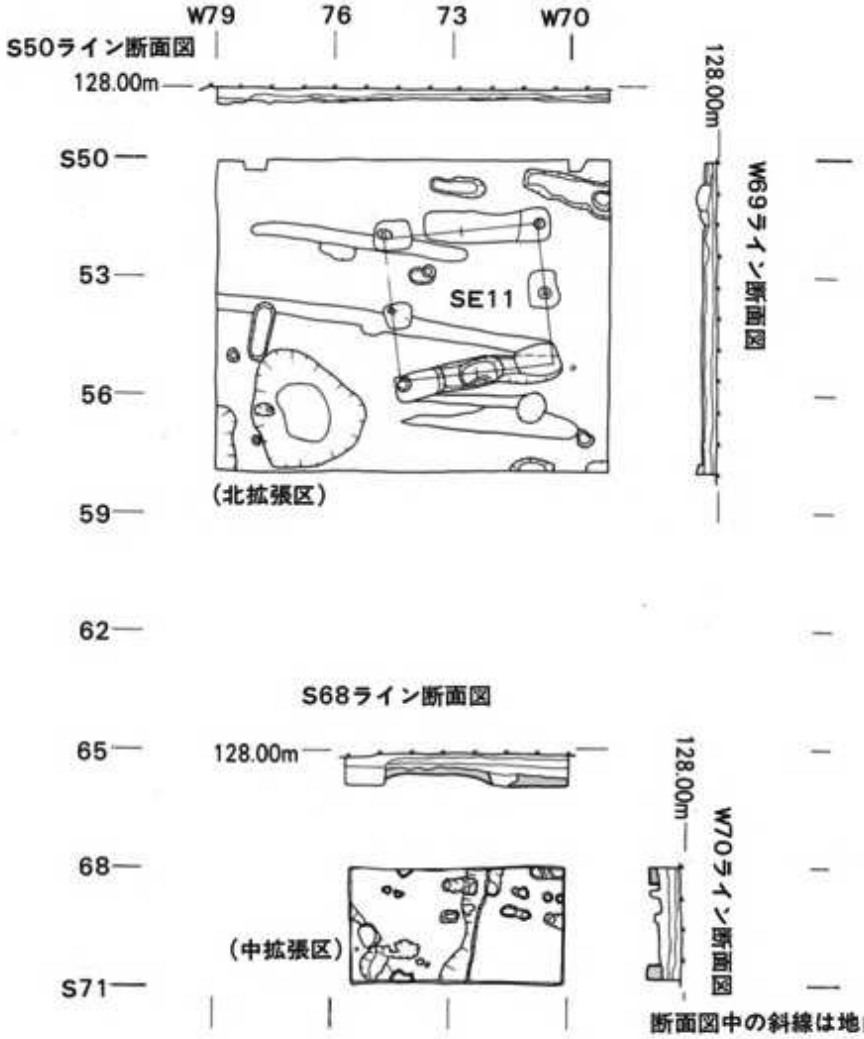


Fig. 12　SB11　1／80

れまでに確認された状況からみて、西半部は途中で屈曲していた可能性が高く、従来想定されてきた国分寺の南正面は一直線の築垣で画されるという認識を改める必要が生じた。これは寺域南側では地形が深く下がっているという条件に規制された結果と考えられ、またこれを埋め立てて造成することがなされなかったという事情によるものと看做される。西辺築垣については、調査区内では遺構を確認することはできなかった。ただS83～85・W69～70で黄褐色粘質土上に軽石混り黒褐色粘質土が盛土された状況であるのが検出され、築垣基部の残痕かと考えられた。寺域西辺の塔跡より南側は、「V」型に南に開口する谷のために寺域南西隅部が切りとられた形状を示している。現状は、この段丘の崩落が進行した結果、旧形状よりも4～5m寺域内（東側）へ谷地形が入り込んでいる。この西辺築垣においても谷を埋めたてて直線形をつくる作業のなされた痕跡は認められず、これも南辺築垣と同様に「く」型に屈曲していた可能性があり、SB11の方位はこれに直交するように建てられた結果とも考えられる。



断面図中の斜線は地山および自然堆積土を、アミは整地盛土を示す。

Fig. 13　第24次調査中拡張区・北拡張区全体図　1／200

(2) 遺　物

全体的に遺物の出土は少い。表土中および検出された地山面上には瓦片の散布がみられたが、瓦の集積、瓦溜りといった遺構は無く、その量は僅かである。南辺築垣の周辺には小児頭大の礫と瓦片が散在し、築土が削平された状態を示す部分には火をうけた痕跡を留める大型のレンガ状の砂岩切石があった。また築垣基部の盛土中からは平安時代に属する土師器小片が、その下部にはカマドの痕とみられる玉石と焼土塊とが出土した。さらに調査区西端で検出された竪穴住居ＳＪ13の床面には平瓦の完形品が２個置かれたようにしてあり、カマド周辺にも大形の瓦片と土師器坏、径約30cmの扁平な玉石などが散在していた。この西に接してある竪穴住居ＳＪ14の床面の東端には土師器坏・埦などが集中してあった。これらの土器は10世紀初め頃のものであり、この頃にこの付近に竪穴住居が数軒造られたことを示すのと併せて、これらの住居が築垣の修造に関係するものであることを窺わせる。調査区東端の円形土壙のロームの小粒を含む軽石混り黒褐色粘質土の埋土中からは縄文時代中期の土器片、打製石斧の破片などが出土しており、この付近に縄文時代の生活痕の遺存している可能性を窺わせる。

北拡張区では遺物はほとんど出土しなかったが、掘立柱建物ＳＢ11の東妻側柱の中央の掘形の中に32×26cm、厚さ10cmの蜂巣石が１個据えられていた。建物の礎石としての機能をもつものかとみられる。

Table. 5　第24次調査区出土遺物（**Fig. 14**）

法量の（　）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	法量(cm) 底部径	法量(cm) 高さ	胎土 素地	胎土 挟雑物	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	表土	坏	13.4	6.4	3.8	粗	砂粒多し	軟質	外面褐色	口辺写を欠損、ロクロ成形後底部へラケズリ、内面は体部横方向、底部は縦方向のミガキ後、黒色処理。	
②	ＳＪ13	坏	13.0	6.0	3.3	粗	砂粒	軟質	黄褐色	口辺を僅かに欠く。	
③	ＳＪ13	坏	(10.0)	——	(3.0)	粗	砂粒	軟質	褐色	写残存。体～底部外面へラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。外面には炭素が付着している。	
④	ＳＪ14	坏	(14.6)	——	——	やや粗	砂粒	軟質	黄褐色	口辺小破片。ロクロ成形。	
⑤	ＳＪ14	坏	13.4	5.3	5.0	粗	白色鉱物等	軟質	黄灰色	完形。ロクロ右回転成形後、糸切り付高台。	
⑥	ＳＪ14	坏	12.8	5.0	5.0	粗	白色鉱物等	軟質	黄灰色	完形。ロクロ右回転成形後、糸切り付高台。	
⑦	ＳＪ13	平瓦	(広端) 25.0	(狭端) 21.0	(長さ) 38.0	やや粗	白色鉱物多し	焼き締め	黒灰色	完形。凸面ナデ、凹面布目。粘土板剥ぎ取り痕、粘土板の合せ目、布の合せ目等なし。単位の狭い模骨状の痕跡があり、輪積成形によるか。	PL. 18-14

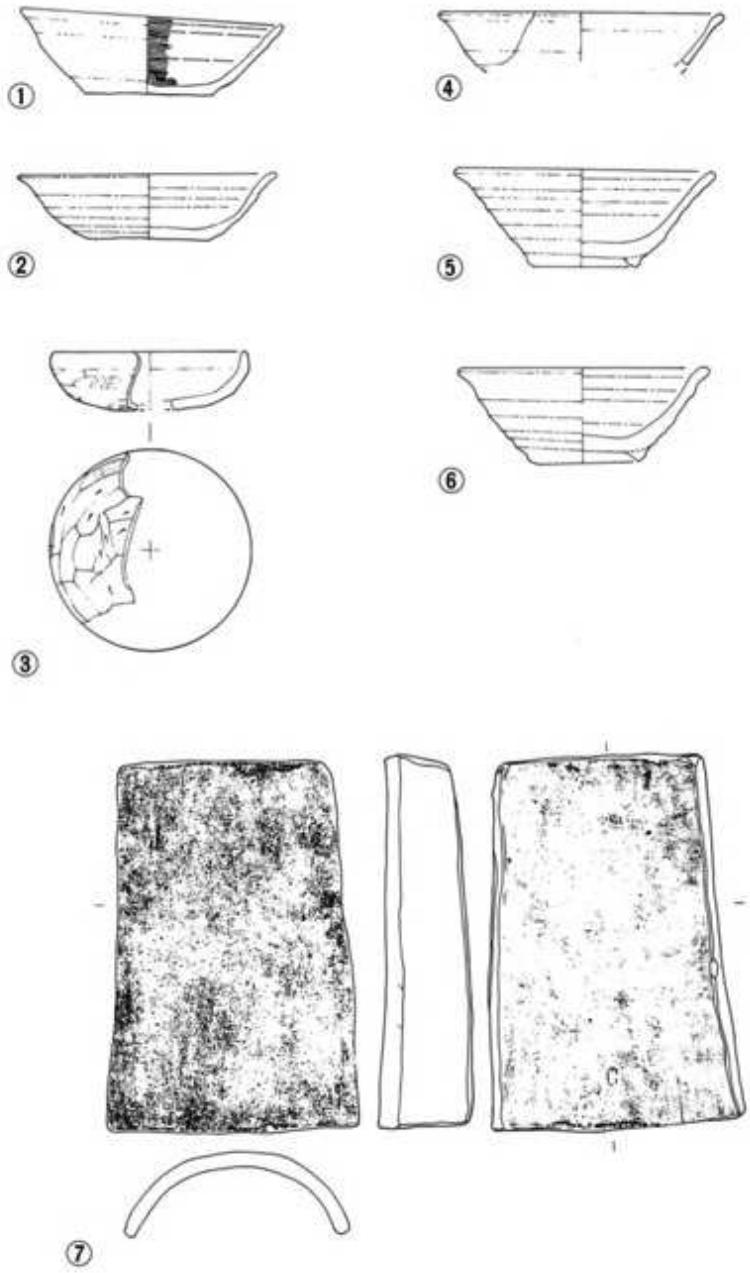


Fig. 14　第24次調査区出土遺物　縮尺1／4　⑦は1／8

6．第25次調査

(1) 遺　構

金堂跡は、史跡地の中央部北寄りに基壇が残存し、その上面には4個の礎石が現存している。現状の観察では、円形の柱座が造り出されている身舎北側柱列の礎石が根石まで露出するような状態であることから、基壇北縁部はかなり削平をうけていることが知られ、西縁部は後代の溝状掘り込みおよび水路によって切り取られた状況を示している。基壇の北東の一画には近世から現在まで続く墓地があり、また北西の一画は一段低くなりその中に多量の陶磁器片・ガラス・瓦などが廃棄されている。中央部は削平をうけた痕などによる凹凸があり、全面に夥しい数の瓦片や礫、それに五輪塔・宝篋印塔の部分などが散乱している。これらは主に周辺の耕作によって出土した瓦などが投げ上げられたものである。金堂跡は地元では「捨て場」と呼ばれており、昭和10年代まではこの上で道祖神焼きなどの行事が行われていた。

金堂については福島武雄「上野国国分僧寺址考」（上毛及上毛人　第53号　１９２１年）には当時の現状が記録され、内務省『史蹟調査報告第二　埼玉茨城群馬三県下に於ける指定史蹟』（１９２７年）では現状の調査に加えて、その規模などについて考察を加え、７間×４間で礎石の間隔は11尺８寸もしくは11尺５寸であることなどが指摘されている。さらに基壇断面の観察が行われ、表面より深さ４尺５寸で黄色の地盤に達している、その上層の３寸程は黒色土で旧地表に属し、その上の３尺５寸は層状をなしている、築土下面には三重孤文・唐草文の軒平瓦を含む瓦片が夾在しているなどの点が記録されている。太田静六他「上野国分寺伽藍の研究」（『建築学

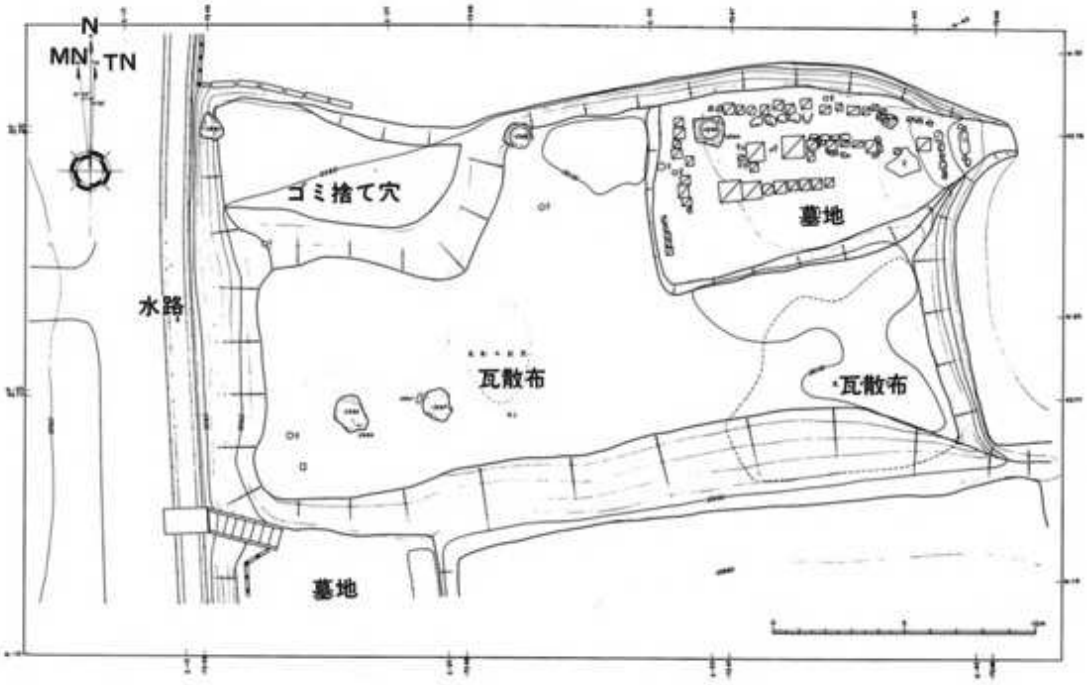
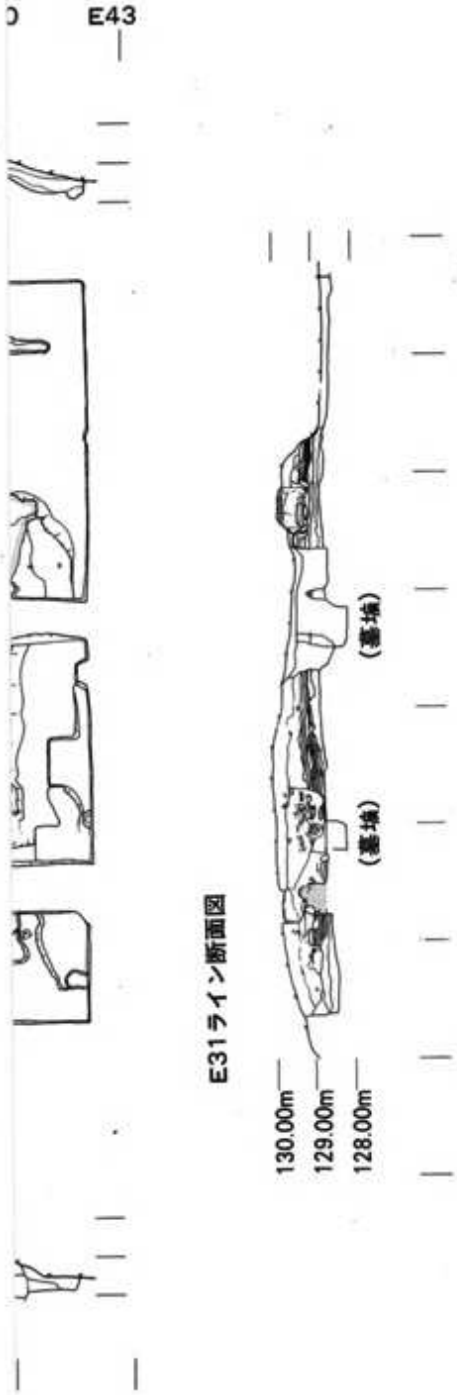
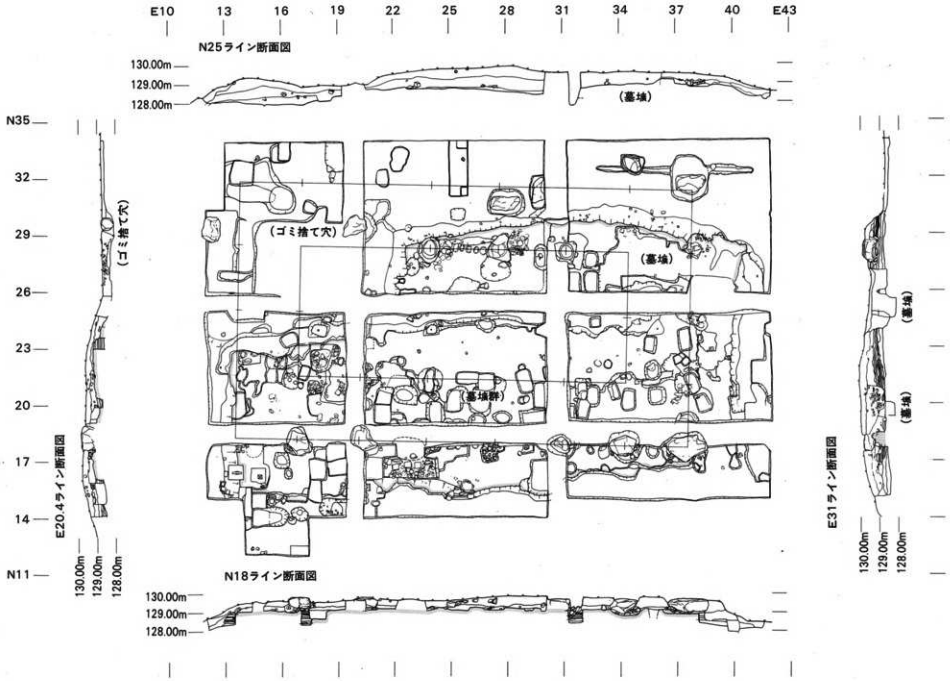


Fig. 15　金堂跡現況実測図（昭和56年）　1／300



平面図中のアミの範囲は金堂基壇築土残存部の範囲を示す
断面図中のアミの部分は基壇築土を示す。

Fig. 16　第25次調査区全体図



平面図中のアミの範囲は金堂基壇築土残存部の範囲を示す
断面図中のアミの部分は基壇築土を示す。

Fig. 16　第25次調査区全体図　1／200

会論文集』１９４２年）では、現状の観察と実測をもとにして柱間寸法および全体規模の復元を行っている。それによると、桁行は11.5—11.5—12—12—12—11.5—11.5（尺）、梁間は11.5—11.5—11.5—11.5（尺）となることが指摘されている。この時点で確認された礎石は、原位置にあるもの８個、移動しているもの６個と報告されており、これは調査の状況と一致する。また堂塔の方位はN—3°50′—Eを測ることが指摘されている。史跡整備事業の一環として昭和55年に金堂跡と塔跡の現形測量を行った。これによって1／50実測図が作成されたが、この段階では礎石は原位置にある南側柱列西側部分の２個、身舎北側柱列中央部の２個、原位置から動く１個の合計５個を認めるのみであった。この礎石の配置と距離とから柱間寸法は、桁行は11—12—12—12—12—12—11（尺）、梁間は11—11—11—11（尺）となることが想定された。

今回の調査は東西方向・南北方向それぞれ２本の観察用ベルトを残して、基壇の範囲を全面発掘した。また最終段階で、基壇の構築の状況を調べるために一部の断ち割り調査を実施した。ただ基壇の南面に接して私有地があるため、南縁の中央部から東端にかけては調査区域が制限された。全体に厚さ30～60cmで、夥しい数の瓦小片や礫、陶磁器片などを含む表土があり、これの下部には馬を主とする獣骨が多量に入っていた。この中から「宝暦三年」（１７５３年）の墨書銘をもつ馬頭観音が出土しており、この場所は近世には死馬牛の捨て場とされていたとみられる。表土下の基壇残部の検出状況では、中央部より南側一帯に長方形の墓壙が三ないし四重に重なってあり、その内部には人骨が残存していたが撹乱が著しく、原形をとどめるものはほとんどない。墓壙は上部にあるものには伸展葬のものと座棺のもの、下部には脚を曲げ横臥する寝棺のものとに大別され、上部のものには寛永通宝・陶器・銅製の煙管の吸口など、下部のものには素焼きの皿などが副葬されていた。これらの墓壙により基壇上部は著しい撹乱を受けており、部分的には基壇築土を抜いて地山に達している。このため礎石据えつけの掘形または根石の位置について、その全部を確認するには至らなかった。

基壇の北縁は、耕作による削平が身舎北側柱列の位置にまで及んでおり、北側柱列の礎石のうち４個が地山を掘り込んだ穴の中に落し込まれているのが検出された。西縁は溝状の掘り込みに

アミの部分は基壇築土を示す。

Fig. 17　金堂身舎北側柱列・来迎壁地覆石エレベーション　1／80

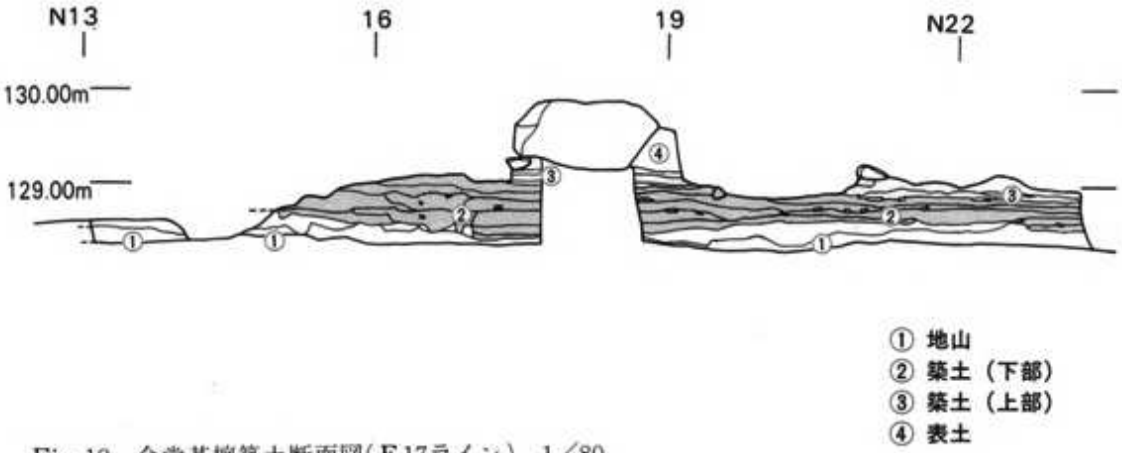


Fig. 18　金堂基壇築土断面図（E17ライン）　1／80

よって削平され、西側柱列は傾斜面にかかるため、1個が地山中に落し込まれている以外は礎石は残存せず、根石の残存状況も悪い。東縁はE40ライン付近に基壇の立ち上がりのあるのが認められるが、それより東では淡黄灰色の地山まで耕作による撹乱が及んでおり、基壇もかなり削平をうけているものとみられる。南縁は、E15～19の範囲でN15の位置に2段からなる比高差約40cmの築土の立ち上がりのあるのが確認された。この方位は礎石列の方位と一致しており、南側礎石の中心より330cmにあることから、基壇南縁の原位置を示すものと判断された。E17ラインでこの標高をみるとN13.5で旧表土面は128.65m、N15で基壇立ち上がり下段面が128.8m、N15.5で上段が128.95m、N16.5で基壇残部上面が129.1m、N18の礎石上面が129.85m・下面が129.3mを測る。E20より東ではE25およびE30付近でこれに該当する位置に築土の立ち上がりのあるのが認められるものの、それ以外では耕作による削平が進んでおり、原形状は損われている。基壇の造成の状況をみると、標高128.75m（南縁付近）付近にあった旧表土を皿状に浅く掘り込んで、地山の固くしまった黄褐色ロームを露出させ、その上に築土している。築土は、標高129.0mの位置まではゴマ粒～小豆大の白色軽石を多く含み、黄褐色土小塊・灰白色細土小塊を少量含む粘性の強い黒褐色土を主体とし、これを1単元6～14cmの厚さで固く叩き締めて4～6層積み上げている。礎石の位置から内側は比較的丁寧な層序をなすが、縁辺部はやや乱れる傾向を示す。129.0mのところに黄褐色ロームを多く含む黒褐色粘質土がほぼ水平に堆積しており、これより上部は黒褐色粘質土と黄褐色ロームとが1単元3cm前後で互層をなしてある。礎石は、固くよくしまった軽石混り黒褐色粘質土を浅く掘り込んで扁平な玉石の根石を入れた上に据えられており、礎石上面下約20cmの高さまで軽石混り黒褐色粘質土が積まれて、基壇築土最上層を形成している。築土中および地山との境いの面には軒先瓦を含む瓦小片が散在しているのが確認された。

礎石は、現状で確認されている南側柱列の2個・身舎北側柱列の2個以外に、南側柱列の東端から3個分、身舎北側柱列の1個が原位置のままで検出され、また東側柱列の南から2番目のものが原位置から南側へ転っている状態で検出された。南側柱列のものはいずれも上面が平坦な安

山岩の自然石であるが、南東隅に上面の寸法が220×130㎝・厚さ約70㎝と一際大型なものを使用していることが目立つ。これらの上面の標高は129.85m付近であり、既知のものと一致する。身舎北側柱列の礎石は、2段に円形の柱座を造り出しているが、その上段は径66㎝・立ち上がり高1.5㎝、下段は径76×79㎝・立ち上がり高4.5㎝を測る。この上面の標高は129.90mであり、既知のものと一致するが、南側柱列のものより5㎝前後高くなる傾向を示す。表土および撹乱層中には、叩き割られたような鋭い稜をもつ礎石と同質の石片が多数混じっていることから、現存するもの以外の礎石のいくつかはこの付近で割られたものとみられる。基壇上にはこれら以外に礎石の据えつけ掘形あるいは根石の所在が11箇所検出された。これらは基壇上面の撹乱が著しいため残存状況は良くないが、築土が皿状に掘り窪められ、その内部および縁辺には径30㎝大の扁平な玉石が散在している。これらの原位置を保つ礎石間の心心距離を計測すると、南側柱列では西端から（不明）—330—（1080）—330—330（㎝）となる。身舎北側柱列では西端から(不明)—360—360—(660)(㎝)となる。また南側柱列から身舎北側柱列の間は1,020㎝である。この数値により金堂の柱間寸法を復元すると桁行330—330—360—360—360—330—330（㎝）・梁間330—345—345—330（㎝）で、2,400×1,350㎝の規模の建物であることが想定できる。つまり身舎は中央の3間が各12尺・両側が11尺・奥行23尺（2間分）で、その四面に幅11尺の廂が巡るという構造となる。これまで想定してきた規模に対して、桁行が2尺狭くなり、梁間が1尺広くなる。方位はN—2°30′—Wで、調査軸線に対して北で1°30′東に振れていることがわかった。基壇の出は南面部分での計測により330㎝、つまり11尺であることが確認でき、他の3面ともこれに準ずるものとみられる。基壇の高さについては旧表土面と礎石上面との比高差が120㎝前後であることから、3.5尺前後であると看做される。基壇化粧は確認できないが、南縁部の撹乱をうけた基壇上面から凝灰岩切石の破片が出土していること、金堂の廃材を棄てた第15トレンチ瓦溜りの下層から「L」型の切り込みをもつ凝灰岩切石が出土していることから、これらが化粧材として使用されていたと考えられる。

今回の調査で、身舎北側柱列の中央の1間分で、礎石の間に40×30㎝大の扁平な玉石を5個一列に並べているのが検出された。この西側部分は後世の撹乱をうけており、本来は7個であったと推定される。石と石の間には6～14㎝の間隙がある。玉石の下半分は築土に埋め込まれるようにしてあり、その上面は標高129.80mである。これは本尊仏の背後にあたる位置であることから、来迎壁の地覆石であると判断され、この種の遺構として数少ない調査例となった。今回の調査で検出された礎石および基壇の状況からは、建て替えの行われた痕跡は確認できなかった。

金堂跡は北辺中央部に僅かに原状を留める部分が確認されたが、それ以外では基壇の周辺は主に耕作による削平、内部は墓壙の掘り込みによる撹乱が進んでいた。金堂跡の墓域化は出土する五輪塔・宝篋印塔などに刻まれた年号から1380年代頃に始まると考えられ、その頃までには金堂は全壊していたものと推定される。

(2) 遺　物

金堂基壇上およびその縁辺部の表土には、夥しい量の瓦片、礫、陶器片などが混じっている。この下部の基壇残部面には多数の墓壙があり、これらの内部からは銅銭とともに副葬品である施釉陶器の皿、素焼きの皿などが出土した。また墓壙に落とし込まれた状態あるいは撹乱を受けた状態で、多数の五輪塔、宝篋印塔の部分、板碑などが出土している。その数を見ると、五輪塔の空風輪204点・火輪４点・地輪４点、宝篋印塔の相輪118点・笠６点、墓石18点であり、空風輪と相輪が多いことが目立つ。これらは時代的には中世～近世中期のものとみられ、金堂跡の墓域化に伴って用いられたものであろう。この基壇残部面からは、天目茶埦、菊花文施釉陶器の皿などの副葬品類に混じって、奈良三彩陶の小片１点、鍍金をした帯状の銅製品２点などが出土した。奈良三彩陶は厚手で大型の壺の胴部の破片とみられ、昭和57年度の第19次調査で塔基壇表土から出土したものに類似している。銅製品は両端を山型に飾り、表面には花または草の文様を打ち出し、両端近くには小孔が穿れていることから、須彌壇の飾り金具であるとみられる。金堂に関係する遺物として注目される。瓦は表土および撹乱層中にあったため大形片は少なく、完形品はみられない。軒先瓦の文様としては創建期のものから10世紀以降に位置づけられるものまでみられる。今回の調査で、基壇築土中および下面に瓦片の入っているのがみられたが、この中にはこれまで創建期のものとされていた単弁五弁の軒丸瓦、扁行唐草文の軒平瓦が含まれている。これらの瓦片には、表面を黒色処理をしたものの多いのが目立ち、また凸面に縄叩き痕を残すもの、桶巻き造りの痕を示すものの多いことが注目された。

Table. 6　第25次調査区出土遺物（Fig. 19）

法量の（　）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	法量(cm) 底部径	法量(cm) 高さ	胎土 素地	胎土 挟雑物	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	撹乱層	壺	——	4.0	——	やや密	黒色鉱物	硬質	灰色	口辺を全く欠く。右回転ロクロ成形後摘みを付す。	15-4
②	表土	皿	(10.8)	(6.0)	(2.5)	やや密	黒色鉱物	硬質	黄白色	5/6程度残存。ロクロ水挽き後削り出し高台。内面～外面上半に黄味がかった透明の釉がかかる。	
③	撹乱層	皿	(10.8)	(6.0)	(3.0)	粗	砂粒	軟質	赤褐色	5/6程度残。ロクロ成形後糸切り未調整。	
④	撹乱層	皿	(12.0)	——	——	粗	砂粒	軟質	赤褐色	口辺破片。ロクロ成形。	
⑤	撹乱層	皿	13.2	7.6	3.5	粗	砂粒	軟質	灰褐色	口辺を僅かに欠く。左回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑥	撹乱層	皿	12.8	6.5	3.3	粗	砂粒	軟質	黄灰色	口辺を僅かに欠く。左回転ロクロ成形後糸切未調整。外面にユビアト。	
⑦	撹乱層	皿	10.7	6.6	2.8	粗	砂粒	軟質	黄灰色	5/6程度残存。左回転ロクロ成形後糸切り未調整。	
⑧	撹乱層	皿	13.0	6.6	2.6	粗	砂粒	軟質	黄灰色	口辺を僅かに欠く。左回転ロクロ成形後糸切未調整。底部は台の縁に置いたかのように凹んでいる。外面にユビアト。	
⑨	表土	皿	10.9	5.8	3.1	粗	黒色鉱物	軟質	黄褐色	完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。底部外面中央に凹みあり。	
⑩	撹乱層	皿	11.1	6.4	3.0	粗	砂粒	軟質	黄褐色	ほぼ完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑪	撹乱層	皿	11.3	5.8	3.5	粗	砂粗	軟質	黄褐色	完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	15-6
⑫	撹乱層	皿	9.4	6.3	2.2	粗	砂粗	軟質	黄褐色	完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑬	撹乱層	小皿	7.5	6.4	1.9	粗	黒色鉱物	軟質	黄褐色	完形。左回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑭	撹乱層	小皿	6.8	4.5	2.1	粗	砂粒	軟質	黄褐色	完形。左回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑮	撹乱層	小皿	7.0	4.0	1.8	粗	黒色鉱物	軟質	黄褐色	完形。左回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑯	撹乱層	小皿	7.0	5.8	1.5	粗	砂粒	軟質	黄褐色	完形。ロクロ成形後静止糸切未調整。底部に凸凹が多い。	
⑰	表土	皿	(13.3)	(7.8)	(2.5)	やや密	粕ど含まない	やや硬質	灰色	5/6程度残存。ロクロ成形後体部外面へラケズリ、底部ケズリ出し高台。底部外面を除いて、全体に釉がかった釉がかかっている。底部は墨が付着して磨耗し、硯に転用された可能性がある。	15-3
⑱	表土	皿	13.0	7.0	3.2	やや密	白色・灰色鉱物の細粒を多くふくむ	焼締め	断面灰色、釉のない外面黄灰色	口辺をわずかに欠く。左回転ロクロケズリ出し高台。体部外面はケズリ。体部外面上半と内面全体には淡緑色の釉が塗りかけされている。	15-5
⑲	撹乱層	茶碗	(9.0)	(4.0)	(3.8)	やや粗	粕ど含まない	焼締め	素地黄灰色	5/6程度残存。ロクロ成形後底部削出し高台。体部外面5/6以下を除いて黒褐色の釉がかかる。	
⑳	撹乱層	茶碗	9.6	3.5	5.1	やや密	白色鉱物	焼締め	素地黄灰色	完形。ロクロ成形後底部削出高台。体部外面5/6以下を除いて黒褐色の釉がかかる。	

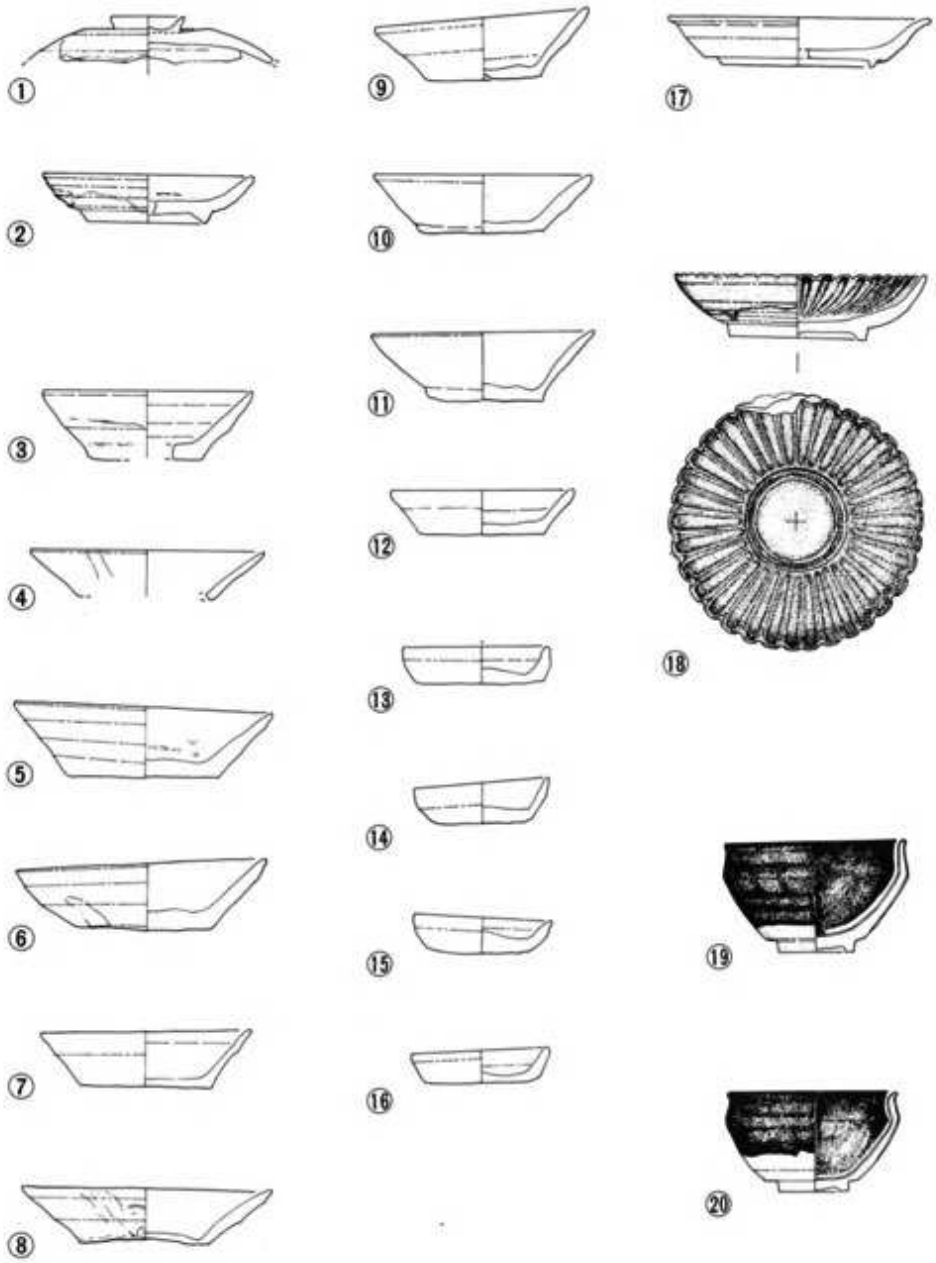


Fig. 19　第25次調査区出土遺物　縮尺1／4

Table. 7　第25次調査区出土軒丸瓦（Fig. 20）

番号	出土位置	胎　土	焼　成	色　調	成　形・調　整　等	図版番号
①	築土中	素地は粗く、白色鉱物細粒を多くふくむ。	硬　質	外面黒色のいぶし、断面黄褐色	瓦当部写が残存するが、接合部はほとんど残らない。裏面はナデ。粘土を笵につめこむ形となっている。全体に丁寧なつくり。	PL. 17-7
②	築土中	素地はやや粗く、白色・黒色鉱物細粒を多くふくむ。	焼き締め	外面灰白色・断面赤褐色	瓦当部写残存。裏面はナデ。1本作りか。	17-8
③	表　土	素地はやや粗く、白色鉱物をふくむ。	硬　質	灰色	瓦当部と丸瓦部との接合部分を欠く。裏面は布目が残る。笵に粘土をつめこみ断面は接合部が薄くなる形。	17-9
④	表　土	素地は粗く、白色鉱物・石英大粒を多くふくむ。	硬　質	灰色	瓦当部写程度残存。裏面は左から右方向のケズリ。瓦当部にミゾをつくりはめ込む形か。	
⑤	表　土	素地は粗く、石英・黒色鉱物をふくむ。	やや軟質	灰白色	瓦当部写。外区を欠く。裏面ナデ。	17-10
⑥	表　土	素地は粗く、石英をふくむ。	やや軟質	灰白色	瓦当部写程度残存。層状に粘土板を重ねている。裏面は剥離し、調整は不明。	
⑦	表　土	素地はやや粗く、黒色鉱物をふくむ。	焼き締め	灰色	瓦当部写程度残存。裏面ナデ。極めて薄いつくり。	

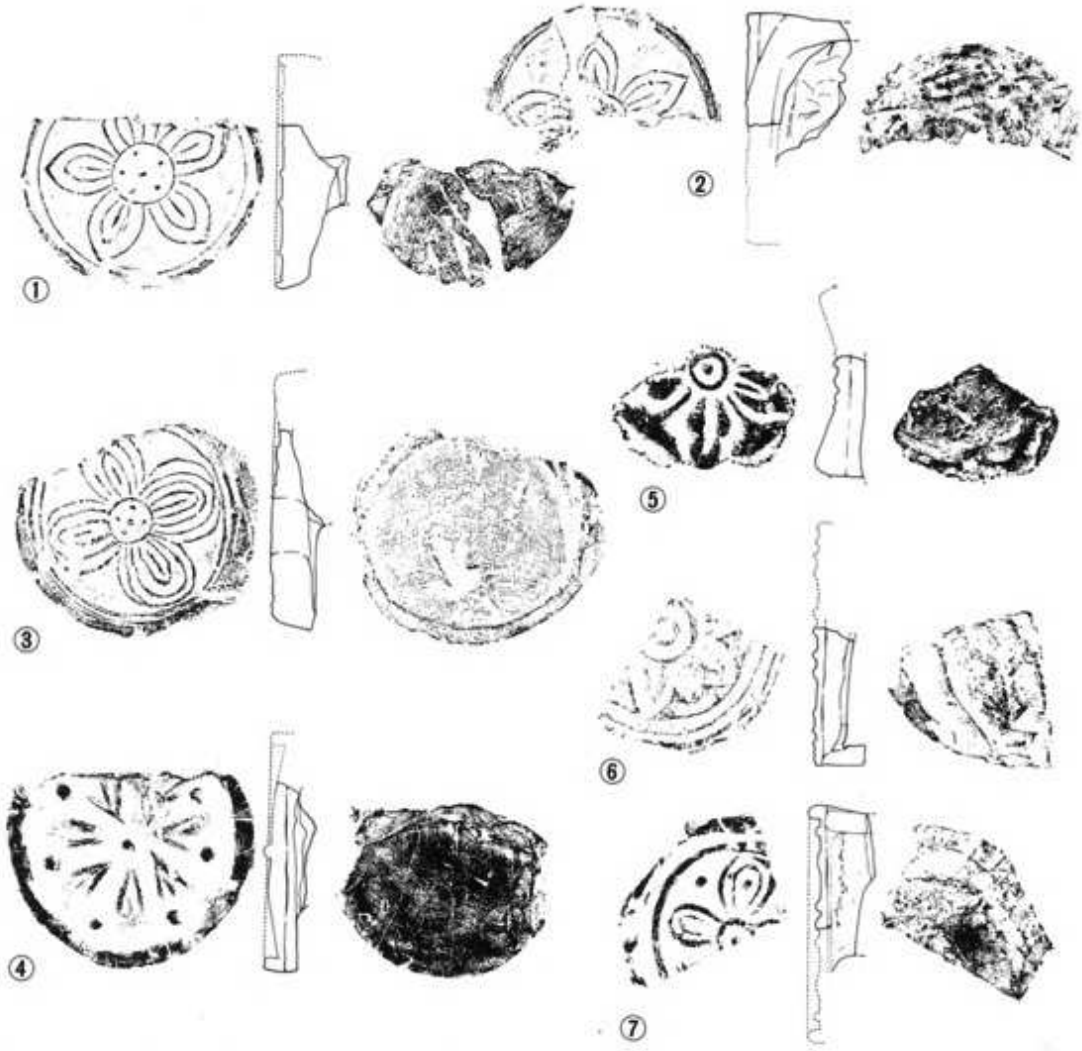


Fig. 20　第25次調査区出土軒丸瓦　縮尺1／5　①・②金堂基壇築土中から出土

Table. 8　第25次調査区出土軒平瓦（Fig. 21）

番号	出土位置	胎土	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	基壇築土下	密、微細な白色鉱物、透明な鉱物を含む	硬質	外面は全面黒色処理、断面は灰褐色	凸面は丁寧なナデが施されているが平瓦部には縄目叩きが残る。凹面は丁寧に布目をナデ消す。側面の面取り1。凹面に剥離用の細砂を使用。	PL. 18-7
②	基壇築土下層	密、微細な白色・褐色・黒色鉱物を含む	硬質	外面は全面黒色処理、断面は黄褐色	凸面はヨコ方向に丁寧なナデ。凹面は比較的丁寧に布目をナデ消す。側面の面取り1。凹面に剥離用の細砂を使用。	
③	基壇築土中	やや密、白色・黒色鉱物を含む	やや硬質	灰色	凸面は顎部はヘラケズリで平瓦部はナデ。凹面ははとんど剥離していて調整は不明。側面の面取り2。	
④	基壇築土下層（北辺東部）	やや密、白色・赤褐色鉱物を含む	硬質	外面は黒色、断面は明褐色	凸面は顎部はヘラケズリで平瓦部はナデが施されているが縄目叩きが残る。凹面は布目痕が残る。	18-8
⑤	表土	やや粗、白色鉱物、砂を含む	やや硬質	黄灰色	顎部のみ残存。凸面顎部はナデ。凹面は粘土を盛りヨコ方向にナデて布目を消すが布目が残る。連珠文は竹管でつけられている。	
⑥	表土	やや密、微細な白色鉱物を含む	硬質	灰色	凸面は顎部は瓦当面の縁1.4cmの幅でヘラケズリで、その他の顎部と平瓦部はナデ。平瓦部には格子叩きが残る。凹面は布目痕。粘土板剥ぎ取り痕あり。側面の面取り4。	18-10
⑦	表土	やや密、褐色・黒色鉱物を含む	やや硬質	黄灰色	凸面は顎部と平瓦部には平瓦方向から顎部に向ってケズリ。凹面は布目痕、粘土板剥ぎ取り痕があり、一部にナデが施されている。側面の面取り3か。	18-9
⑧	撹乱層	やや密、白色・褐色・黒色鉱物を含む	硬質	黄灰色	凸面は顎部と平瓦部に顎部方向から平瓦に向ってナデ。凹面は粗雑なナデが施されているが布目痕、粘土板剥ぎ取り痕あり。側面の面取り2。	18-11
⑨	表土	やや密、微細な白色鉱物を含む	硬質	灰色	凸面は顎部に断面が台形状を示す3条の平行沈線あり。平瓦部は縄目叩きあり。凹面は布目痕あり。側面の面取り2。顎部に赤色塗料の付着が認められる。	18-12
⑩	撹乱層	やや粗、白色・褐色・黒色鉱物・雲母を含む	軟質	外面は淡茶褐色、断面は灰褐色	平瓦の狭端部に瓦当をつけており、全体に摩耗している。凸面はナデ。凹面は布目痕あり。側面の面取り3。	

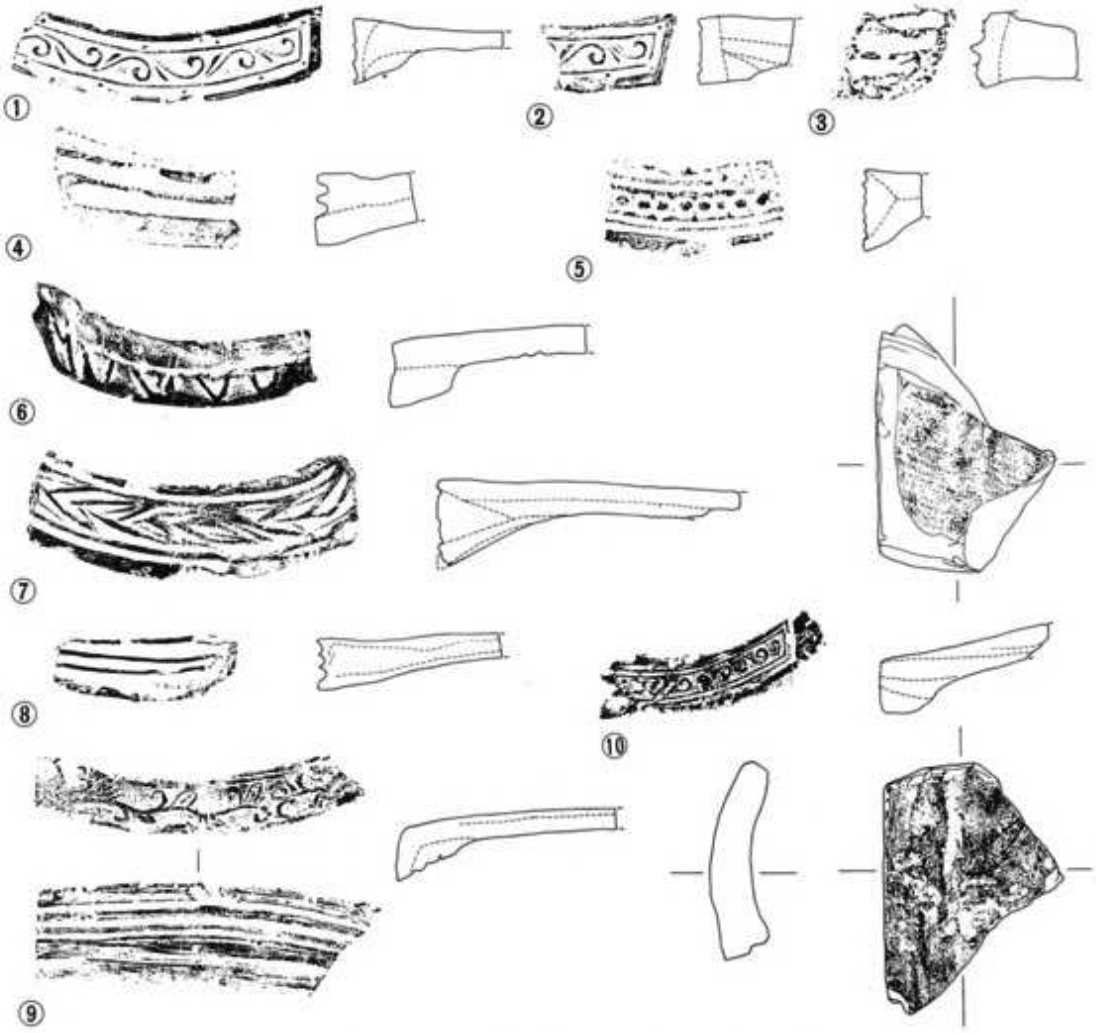


Fig. 21　第25次調査区出土軒平瓦　縮尺1／5　①~④金堂基壇築土中から出土

7．第26次調査

(1) 遺　構

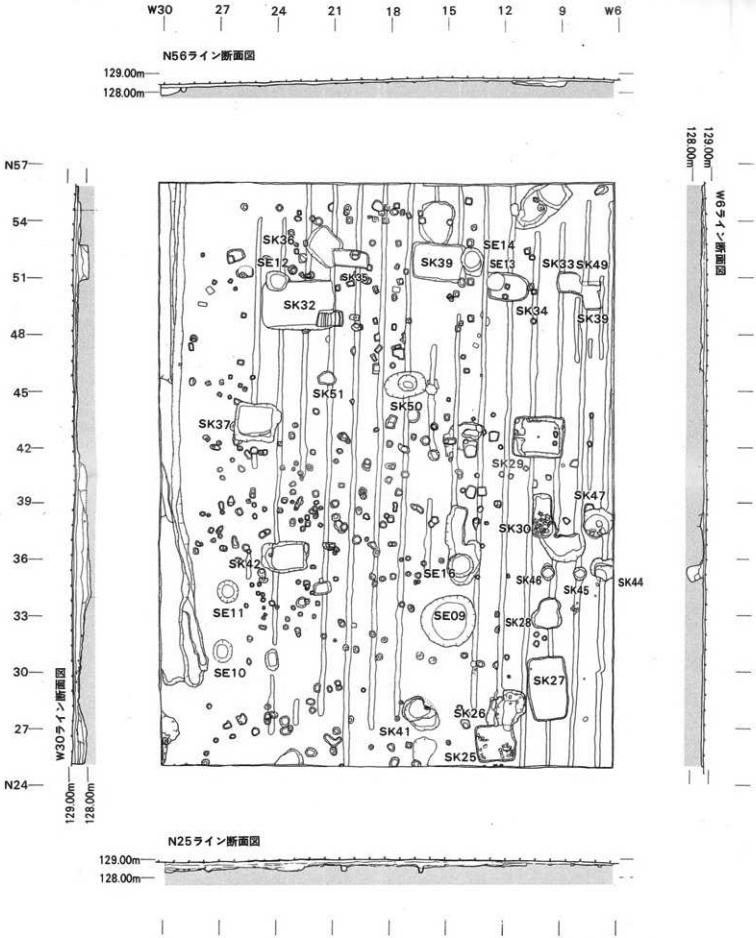
金堂の西から北西にかけての一帯は微高地状を呈しており、その位置からして何等かの遺構の所在することが予想されたため、この北半分を覆う部分に調査区を設定した。この農道を隔てた南側では、昭和57年度に第18次調査を実施している。この調査において国分寺に関係する遺構としては、N５・W７付近で平安時代に属する２×３間の掘立柱建物１棟（ＳＢ０８）、N18・W23で平安時代前期の竪穴住居１軒（ＳＪ０８）が確認された。それ以外の遺構としては、中世に属する墓壙群（墓３～６・８～10）と井戸遺構１基（ＳＥ０３）、および径20cm前後の円形・一辺20cm前後の方形の柱穴が多数検出された。この状況を見ると、墓壙はN６を南限・W８を西限として散布をしており、柱穴群はN15以北に多く検出されている。このことから、国分寺廃絶後の土地利用には、一定の区画割りが設定されていた可能性を窺うことができる。またこの付近は、表土の厚さ15～20cmで、その下は黄褐色ロームの地山となることが確認されている。

今回の調査は、東西24ｍ×南北31ｍの範囲で行った。地形的には、地山上面の標高はN25・W10で128.76cmであるが、W29から西では一段低くなっており、これは比較的新しい耕作による掘り込みによる。またN50から北へ向って緩く下がり、N56・W６では128.50ｍとなるが、これは自然地形の変化であるとみられる。遺構はほぼこの全面にわたって検出された。国分寺に直接関係する基壇、礎石の痕跡、柱穴などは確認されなかったが、国分寺存続期（奈良～平安時代）のものと看做される遺構としては土壙６基があり、中世以降のものとしては多数の土壙と柱穴群、井戸遺構７基が検出された。

ＳＫ25　N26・W12を中心とする位置にある土壙で、規模は上面で210×190cmと東西にやや長く、深さは45～50cmを測る。方位はＥ－7°5′－Ｎを示す。壁の立ち上がりは垂直に近く、黄褐色ローム中に造られた底部はほぼ水平をなし平担である。この南東隅部には、大型の平瓦・丸瓦片が凸面を上にして直径約70cmの円を描くように並べられていた。埋土はローム塊を含む暗褐色土でしまりに欠けるが、大型の瓦片を多く含んでいる。時期は平安時代に属するとみられる。

ＳＫ27　N29・W9.5を中心とする位置にある長方形土壙で、規模は上面で340×210cmと南北に長く、深さは16～18cmと浅い。方位はＮ－8°15′－Ｗを示す。壁の立ち上がりはやや急角度で、底部には緩い凹凸がある。埋土はローム混り暗褐色土を主体とするややしまった土質で、短時間に埋め戻された状況を示しており、瓦小片と礫を含んでいる。埋土および出土遺物の状況から、平安時代に属するとみられる。

ＳＫ29　N42.5・W10を中心とする位置にある長方形土壙で、規模は上面では270×220cmと東西に長く、深さは27cm前後である。方位はＥ－10′－Ｎを示す。壁の立ち上がりは垂直に近く、壁直下の床面は僅かに窪地状を呈する。床面はほぼ平担である。埋土はローム塊を多く含む暗褐色土を主体とするややしまった土質で、木炭小片および平安時代中期に属する須恵器坏を含む。時期は平安時代に属するとみられる。



断面図中斜線の部分は地山（黄褐色ローム・黄灰褐色砂質土）を示す。

Fig. 22　第26次調査区全体図　1／200

ＳＫ30　N37.5・W10を中心とする位置にある長方形土壙で、規模は上面で235×105㎝と南北に長く、深さは最深部で54㎝を測る。方位はＮ－2°－Ｗを示す。壁の立ち上がりは、南と西は垂直に近いが、北は45°前後である。底部は北から南に向って下がる形状を示す。埋土はローム塊・黒色粘質土塊を含む暗褐色粘質土で、大形の瓦片・小児頭大の礫を多く含む。ＳＫ31により南東部を切られている。時期は不明であるが平安時代に属する可能性がある。

ＳＫ33　N50.5・W8.5を中心とする位置にある方形土壙で、規模は上面で（135）×110㎝と東西に長く、深さは80㎝前後を測る。東側部分はＳＫ49によって壊されている。方位はＥ－35′－Ｎを示す。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底部は西が僅かに高くなる形状を示す。埋土は、下部に木炭小片と少量の焼土を含む暗褐色土があり、これには10～11世紀頃の土師器坏が含まれる。上部には木炭小片と鉄鉾小塊を多く含む黄褐色ローム混りの暗褐色土があり、これには下部と同時期の土器類、扁平な玉石が含まれている。この土壙からは土器類以外に鉄製鉸具２個などが出土している。この状況から、この土壙は11世紀頃に造られた塵捨て穴であるとみられる。

ＳＫ32　N49.5・W22.5を中心とする位置にある長方形土壙で、規模は上面で380×260㎝と東西に長く、深さは130㎝を測る。方位はＥ－5°10′－Ｎを示す。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直であり、灰色砂質土中に造られた底部は平坦である。南東隅には地山を削り出して造った階段が設けられており、東に向って登る４段分が残存している。埋土は、黄褐色ローム塊の混じる暗褐色粘質土を主体とし、人為的に埋められた状況を示している。全体に木炭小片が混じり、瓦片が含まれ、また埋土の最上層から「永楽通宝」が出土している。北西隅にある井戸遺構ＳＥ12を切って造られている。地下室の形状を示しているが、用途については不明である。時期はＳＥ12より新しいものであることから、近世以降のものと看做されるが詳かでない。

ＳＫ37　ＳＫ32の南約６ｍのN43.5・W25を中心とする位置にある長方形土壙で、規模は上面で210×190㎝と東西に長く、深さは170㎝前後を測る。方位はＥ－15′－Ｓを示す。壁の立ち上がりは上部が僅かに開き、底部から50㎝より下でやや緩い傾斜となるが、ほぼ垂直である。底部は

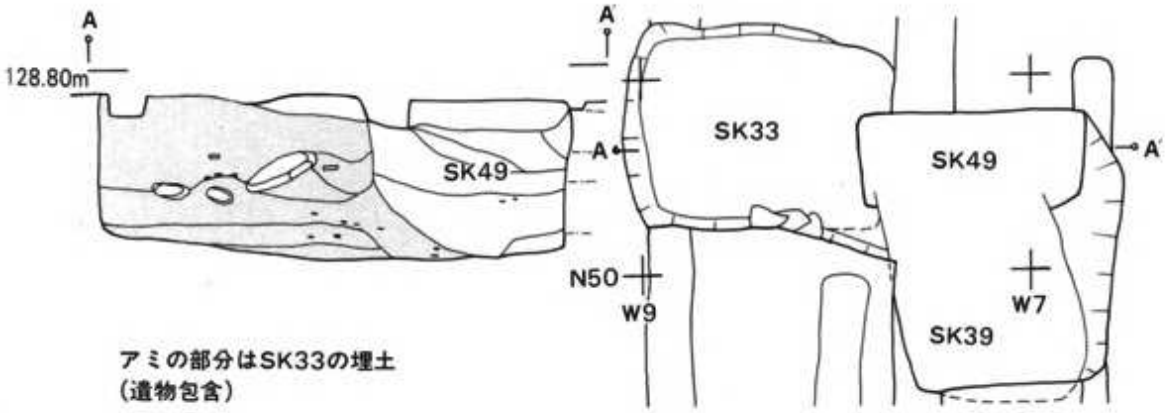


Fig. 23　SK33　1／40

灰色砂の地山中に造られており、平坦である。埋土の状況をみると、西壁から60cmのところまでは黄褐色ローム塊を含む暗褐色土・淡褐色砂質土・黒褐色粘質土が一単元の厚さ10～25cmで整然とした互層をなして水平に積み上げられているのが注目される。この埋土は固くしまっており、遺物の包含は見られない。これより東は黄褐色ロームを含んだ暗褐色土・黄褐色砂などで人為的に埋め戻された状況を示しており、埋土中の遺物の包含はほとんどみられない。この状況から、この土壙は一度整然とした堆積をなす状態で埋め戻された後、規模を縮小して再び堀り直されたものと看做される。深い地下室状を呈しているが、ＳＫ32のような階段の存在は確認できず、用途は不明である。また時期についても詳かでない。

ＳＥ09　N32.5・W14.5を中心とする位置にある。規模は上面が300×270cm、本体部は径80～90cmの円形で、本体は円筒型をし上部が朝顔型に開く形状である。石組み・木枠などの構造は確認されず、素掘りであるとみられる。検出面から底部までは730cmあり、検出面下570～610cmの細砂層から湧水がみられる。この部分から上へ約150cmの範囲で壁の崩れ（アグリ）が認められる。埋土の状況は、底部から上へ約110cmのところまでは自然堆積の灰褐色シルトおよび砂質土シルトで、それより上は黄褐色ローム塊を多く含み人為的埋土の状況を示している。この人為的埋土中には瓦片および玉石、内耳土器片、板碑小片などが含まれていた。時期は中世～近世のものと推定される。

ＳＥ12　N51・W24を中心とする位置にあり、上部の南半分はＳＫ32によって切られている。規模は上面が径90cmで、本体部もそれに近い円筒型を呈する。石組み・木枠などの構造は確認できず、素堀りのものとみられる。検出面から底部までは760cmあり、検出面下560～590cmの砂層から湧水がみられる。この湧水の直上には大きなアグリが生じている。底部から110cmまで壁の崩落による砂質シルトがあり、その上は灰褐色砂質土を主体とする人為的埋土の状況を示している。埋土の上層部には瓦片・礫が多く入り、この中には創建期の偏行唐草文の軒平瓦も含まれる。それより下層からは須恵器片、石鉢、玉石、検出面下600cmの位置からは鉄製の身に銅製の柄を

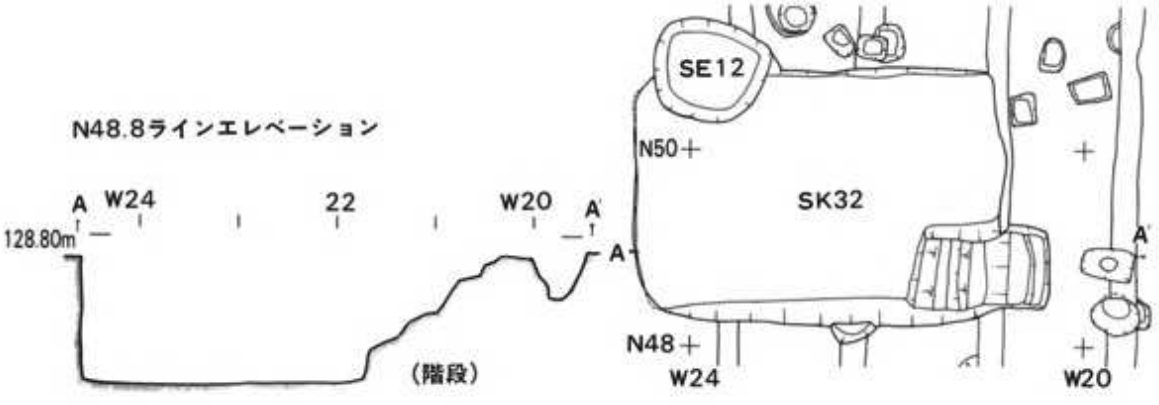


Fig. 24　SK32　1／80

付けた刀子が1点出土している。時期は中世～近世とみられる。

SE13　N51・W12.5を中心とする位置にあり、長方形土壙SK34を埋めた後に、これを切って造られている。規模は上面が径90cmで、本体部もそれに近い円筒型を呈する。検出面から底部までは770cmあり、検出面下570cmの砂層から湧水がみられる。この湧水面上には大きなアグリが生じており、これは北西に隣接してあるSE14とつながる状況を示している。底部から110cmは細砂の自然堆積土で、それから上は人為的な埋土の状況を示している。埋土の底部から90～160cmには瓦片とともに、100×70×60cmの小型の礎石状の自然石が1個出土している。時期は中世～近世のものとみられる。

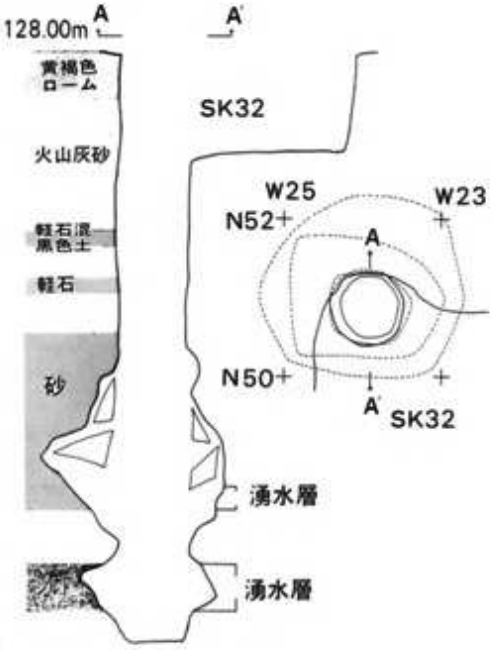


Fig. 25　SE12　1／100

SE14　N52・W13.5を中心とする位置にある。規模・形状ともにSE13に類似する。埋土中に、瓦小片・礫とともに木炭・灰・獣骨・馬歯など、生活廃棄物の混じっていることが注目される。SE13との新旧関係が明瞭でないが、壁の崩壊の状況から、SE13は使用期間が短く、SE14は長かったと思われる。

SE15　N35.5・W14を中心とする位置で、SE09の北1.5mのところにある。規模は上面が径95cmで、本体部もそれに近い円筒型を呈する。石組み・木枠などの構造は確認されない。検出面から底部までは740cmあり、検出面下600cm～640cmの砂層から湧水がみられる。底部から40cmまでは壁の崩落による自然堆積であるが、それより上は人為的な埋土の状況を示している。この中には瓦小片・礫が多量に混じり、また石臼・五輪塔・板碑・内耳土器片も混じる。これらの中には「至徳四年」(1387年)・「永享八年」(1436年)の年号を記したものがある。

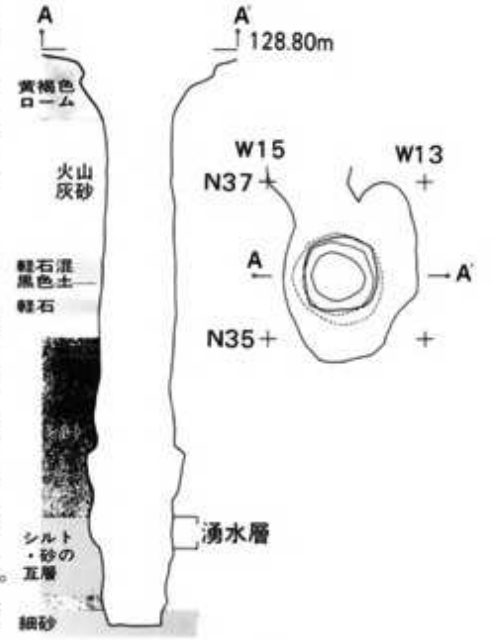


Fig. 26　SE15　1／100

土壙などと併せて多数の小柱穴が検出されたが、これらは4個が一直線上に並ぶといった状況は認められるものの、建物としてのまとまりを確認するには至らなかった。調査の状況からは、この付近は11世紀には塵捨て穴が造られるような状態となっており、中世～近世には居住区域とされていたと看做されるが、それがどのような性格のものであったかを示す資料は得られなかった。

(2) 遺　物

表土は薄く、耕作土であるため遺物などの包含はほとんどみられないが、E29から西に向って下がる掘り込み部分では局部的に瓦片・内耳の鍋型土器片・礫などが集中してあった。これは耕作によって周辺から出土したものが、地中に埋め込まれたものとみられる。今回の調査では、土壙および井戸遺構の埋土から多数の瓦片・土器・石造物などの出土をみた。

瓦は、ＳＫ25・ＳＫ30・ＳＫ41から比較的大形のものが出土している。このうちＳＫ25は底部に円形に瓦片を並べており、埋土の上層にも大形片が含まれている。ＳＫ41は南から北に向って掘られ、北側の部分が約70cmオーバーハングする形状を示す。この埋土上層に多量の瓦片が入っていた。不要な瓦片が廃棄された状況を示しているが、これがいつなされたものかは不明である。同じ形状の袋状土壙ＳＫ47は北から南に向って掘り込まれているが、この底部には礎石の根石と同様の直径30cm前後の扁平な玉石が多数入っていた。その他、ＳＥ10・ＳＥ11の埋土の最上層には夥しい数の瓦小片が詰められたように入っていた。ＳＫ33の埋土からは10世紀後半～11世紀中頃に属する須恵質の坏、羽釜、鉄製鉸具、瓦片、扁平な玉石などが出土した。土器の中には内面を黒色処理したものが３点、墨書があるもの３点がある。この埋土中には木炭小片、焼土、鉄滓小塊も混じっており、付近から羽口の破片が出土していることを考慮すると、この周辺に小鍛冶などがあったことが考えられ、その残土や不要となった土器類を一括して棄てた塵芥穴である状況を示している。これらの土器の出土状況の特色から、各土壙の年代を推定する手懸りが得られる。土器としてはこれら以外に、香炉の一部とみられるもの、素焼きの皿、内耳の鍋型土器の破

Table. 9　第26次調査区出土遺物 (1) (Fig. 27)

法量（　）は推定値

番号	出土位置	種類	法量(cm) 口径	底部径	高さ	胎土 素地	抉雑物	焼成	色調	成形・調整等	図版番号
①	ＳＫ33	坏	12.0	6.2	4.4	粗	砂粒	軟質	黄灰色	ほぼ完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
②	ＳＫ33	坏	(12.4)	(6.8)	(3.2)	粗	砂粒	やや軟質	黄灰色	5/6程度残存。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
③	ＳＫ33	坏	11.2	6.4	3.8	粗	白色鉱物の大粒	やや軟質	黄灰色	完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。底部内面中央が突出している。	
④	ＳＫ33	坏	10.0	4.0	3.4	粗	砂粒	やや軟質	灰白色に黒斑あり	5/6程度残存。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑤	ＳＫ33	坏	11.0	5.6	3.4	粗	砂粒	軟質	淡黄褐色	ほぼ完形。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑥	ＳＫ33	坏	11.0	4.4	3.6	粗	白色鉱物を多くふくむ	軟質	淡赤褐色	5/6強残存。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑦	ＳＫ33	坏	10.8	5.2	3.0	粗	砂粒	軟質	赤褐色	口辺5/6を欠く。右回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑧	ＳＫ33	坏	11.3	5.5	4.2	粗	石英大粒	軟質	灰白色	完形・右回転ロクロ成形後底部糸切未調整。	
⑨	ＳＫ33	坏	13.0	7.2	5.3	粗	黒色鉱物細粒	軟質	暗黄灰色	口辺を一部欠く。右回転ロクロ成形後底部糸切未調整のまま付高台。	
⑩	ＳＫ33	坏	11.3	6.2	5.2	粗	砂粒	軟質	黄褐色	5/6程度残存。右回転ロクロ成形後底部糸切未調整のまま付高台。	
⑪	ＳＫ33	羽釜	(21.6)	——	——	粗	白色鉱物	やや軟質	内面及び断面黄灰色、外面黒灰色	口辺～胴破片。輪積成形後調整を行す。	
⑫	ＳＫ33	坏	13.0	8.4	9.2	粗	黒色鉱物	軟質	淡赤褐色	口辺を下半欠く。ロクロ成形後付高台。	15-7
⑬	ＳＫ33	坏	10.4	4.0	3.8	粗	白色鉱物多し	やや軟質	素地黄灰色	5/6程度残存。ロクロ右回転成形後糸切未調整。黒色処理されているが、明瞭な磨きの痕跡は認められない。	
⑭	ＳＫ33	坏	11.3	6.3	4.4	粗	砂粒多し	やや軟質	素地黄灰色	口辺を一部欠く。右回転ロクロ成形後糸切未調整のまま付高台。黒色処理しているが、明瞭な磨きの痕跡は認められない。	
⑮	ＳＫ33	坏	——	——	(5.1)	粗	石英	軟質	黄灰色	底～胴部破片。ロクロ成形の後糸切未調整。やや薄手。胴部に内面の筆による墨書があるが、判読は出来ない。	15-10
⑯	ＳＫ33	坏	(13.2)	(7.5)	(4.3)	粗	砂粒	やや軟質	黄灰色	5/6程度の小破片。ロクロ成形後糸切未調整。胴部内面に墨痕があるが判読不能。	
⑰	ＳＫ33	坏	(15.8)	(7.0)	(6.6)	やや粗	砂粒	やや軟質	素地赤褐色	小破片4片による復元。ロクロ成形後糸切未調整のまま付高台。口辺外面に横位のヘラミガキ。胴部下半にユビアト。内面は横位のミガキ後、放射状のミガキが施され、黒色処理されている。底部外面に墨痕があり、残画から「吉」と読める。	15-11
⑱	ＳＫ33	鉢	(4.0)	(6.7)							
⑲	ＳＫ33	鉢	(4.5)	(7.0)							

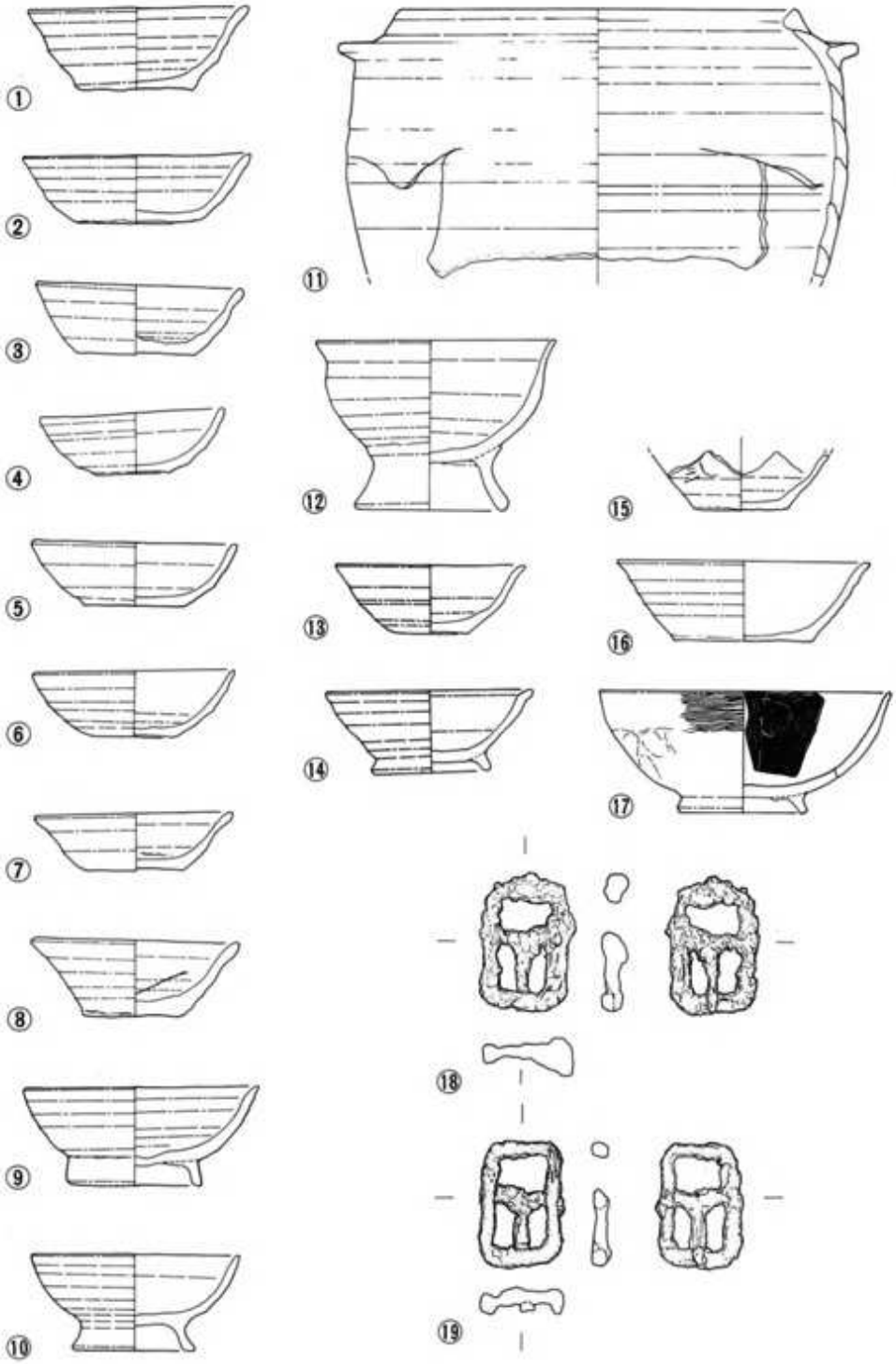


Fig. 27　第26次調査区出土遺物(1)　縮尺1／4

片などが出土している。

検出された7基の井戸遺構からは、瓦片、平安時代～中世の土器片とともに、五輪塔、宝篋印塔の部分、板碑、石臼、茶臼、石鉢などが出土している。例えば井戸遺構ＳＥ15からは五輪塔の地輪5点、板碑8点、石臼3点などが出土しているが、これらはいずれも人為的な埋土の中に含まれるものである。石造物の中には銘文および年紀をもつものがある。ＳＥ15からは、石碑に梵字で阿弥陀三尊を刻した下に「至徳二二年　月」と至徳4年(1387)の年号が記されているもの、宝篋印塔の基礎あるいは五輪塔の地輪に「奉造立逆修　石造一基　阿闍利圓了　永享八年内脱　十月十四日」と供養者の名と永享8年（1436）の年号を記したものが出土している。ＳＥ10から出土した宝篋印塔の基礎(台石)には「了善禅門　応永廿年　八月九日」と供養者の名と応永20年(1413)の年号が刻まれたもの、「逆修　□□禅尼　嘉吉元年　十月廿三日」と嘉吉元年(1441)の年号が記されたものがある。今回の第25次の金堂跡の調査では五輪塔、宝篋印塔の部分が多数出土し、また昭和56年度の金堂東側の第5トレンチの調査の際にも宝篋印塔の基礎に「妙義禅尼　至徳二年　二月　日」と銘の刻まれたものなどが出土していることを考慮すると、これらの石造物は金堂跡およびその南・西側に造られた墓壙に由来するもので、それの存在意義が失われた後に井戸の埋め立てに使用されたものであるとみられ、これらの遺構の年代を知る上で重要な意味をもっている。これら以外の出土品としては、ＳＥ12の底部から160㎝上の位置から出土した鉄製の身に銅製の柄を付ける刀子1点などがある。

Table. 10　第26次調査区出土遺物(2)（**Fig. 28**）

番号	出土位置	種類	法量(cm)			胎土		焼成	色調	成形・調整等	図版番号
			口径	底部径	高さ	素地	夾雑物				
①	ＳＫ25	瓦塔	—	—	—	やや密	砂粒	硬質	赤褐色。一部灰色	瓦塔陸棟部小破片。全体にナデ後、ヘラ及び半截竹管状の工具で細工。	PL. 16-3
②	ＳＥ12	刀子状金属製品	—	—	—	—	—	—	—	柄は銅。身は鉄。	16-5
③	ＳＥ13	皿	(12.8)	(7.1)	(3.1)	やや密	殆ど含まない	硬質	灰白色	写程度残存。ロクロ左回転水挽き成形後付高台。口辺に釉薬をつけかけしている。	15-9
④	ＳＥ11	皿	11.6	8.0	3.4	粗	砂粒多し	軟質	黄灰色	口辺をわずかに欠く。ロクロ成形後ヘラ切り。	
⑤	ＳＥ11	皿	12.0	7.0	3.3	粗	砂粒多し	軟質	黄灰色	口辺をわずかに欠く。左回転ロクロ成形後糸切未調整。	
⑥	ＳＥ11	香炉	—	—	—	やや粗	白色鉱物	硬質	灰色	小破片。脚（3本か）を付した後ナデ及び接合部分ケズリ。外面は研磨後スタンプで模様を付す。	15-12
⑦	ＳＥ15	内耳鍋	(27.0)	—	—	粗	砂粒多し	軟質	断面赤褐色	口辺破片。輪積成形後全体にナデ。外面は煤で黒変している。	
⑧	ＳＥ15	土鍋	—	—	8.4	粗	砂粒多し	軟質	暗灰色	底部破片。ロクロ左回転輪積成形後糸切未調整。器面は全体に荒れているが、内外面ともユビナデか。	
			縦	横	奥行						
⑨	ＳＥ10	宝篋印塔基礎	12.5	24.5	24.5	—	—	—	—	「応永廿年八月九日」銘。	
⑩	ＳＥ15	宝篋印塔基礎	20.0	28.0	28.5	—	—	—	—	「永享八年　内脱　十月十四日」銘。	16-7
⑪	ＳＥ10	宝篋印塔基礎	17.0	25.5	25.5	—	—	—	—	「嘉吉元年十月廿三日」銘。	
⑫	ＳＥ15	板碑	—	—	—	—	—	—	—		
⑬	ＳＥ15	板碑	—	—	—	—	—	—	—		

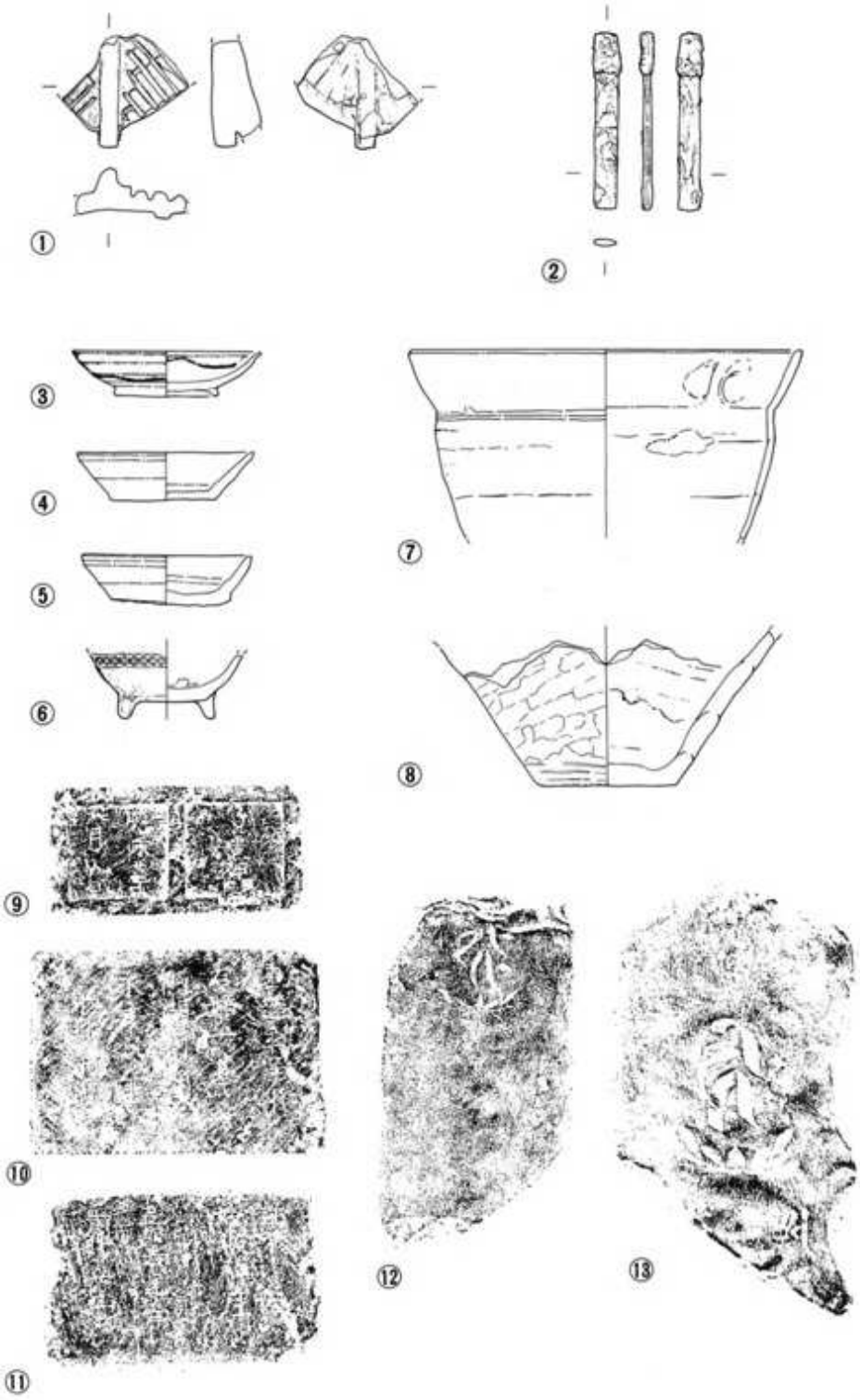


Fig. 28　第26次調査区出土遺物 (2)　縮尺1／5　⑨～⑬は1／8

V 文 字 瓦

今回の調査では、現在確認した範囲で第15トレンチ拡張調査区297点、第24次調査区2点、第25次調査区146点、第26次調査区9点、その他2点の計456点の文字瓦が出土している。これらは(1)墨書するもの、(2)押印するもの、(3)ヘラ描きするもの、(4)記号、に区別される。

墨書するものは、第15トレンチ拡張区瓦溜りから出土した平瓦の凹面に書かれたもの1点があるが判読は困難である。これまでに墨書されたものは3点が確認されているが、これらは全て凸面に書かれており、凹面に書かれたものは今回のものが初例である。

押印には「多」(Fig.29—④⑤)、「勢」(Fig.29—⑦)、「佐位」(Fig.29—⑧)、「雀」(Fig.30—⑦)、「薗田」(Fig.30—⑧)、「山田五子□」(Fig.30—⑨)などがあり、「多」＝多胡郡、「勢」＝勢多郡、「佐位」＝佐位郡、「雀」＝佐位郡雀部郷、「薗田」＝山田郡園田郷と、郡名または郷名を示すとみられるものが多い。この内「薗田」は金堂基壇築土下からも出土しており、国分寺創建時における瓦の生産あるいは貢進の単位を知る手懸りとなるものである。

ヘラ書きの中で注目されるのは、「多胡郡織裳郷□」(Fig.29—①)、「勾舎人□」(Fig.30—①)である。前者は桶巻き作りの平瓦の凸面の上部に描かれており、手慣れた書き方である。織裳郷は『続日本紀』和銅4年(711)3月辛亥(6日)条に「甘良郡織裳」郷などを割いて多胡郡を建置すると見えるもので、現在の多野郡吉井町に折茂の地名が残っている。本品は下部を欠失するが、この下にも文字があったものとみられ、貢進者とその本貫を示すものと考えられる。本県内出土の瓦で、郡郷名を併せて記すものは本品が初例である。「勾舎人□」は第4字目が不明であるが、『日本書紀』安閑天皇二年四月丁丑朔条に「置勾舎人部。勾靱部。」とある「勾舎人部」に該当するとみられる。安閑天皇の名代であるが、これが実際に置かれていたことを示す資料はほとんど無く、上野国内に所在した氏族についての新しい知見を得たことと併せ、全国的な名代の分布の状況と6世紀代のヤマトと東国との政治的な結びつきを考える上で重要な史料である。なお、これと同文とみられるものが国分尼寺跡から1点出土している。これ以外のものとしては「武美子」(Fig.31—①)、「八伴氏成」(Fig.31—②)などがあるが、前者は多胡郡武美郷の「子」、後者は同郡八田郷の「伴氏成」と、貢進者とその所属郷名が記されている。ただ「子」が姓であるか、名であるかは詳かでない。「八田」を「八」と略すのは、「山字」を「山」、「織裳」を「織」とするのと同例である。これら郷名と判断できるものでは、多胡郡に属するものが多いことに注目される。

今回出土の文字瓦の中に、「生部」(壬生)を示すとみられる「生」を丸瓦の凹面にヘラ描きしたものが18点あった。『日本後紀』弘仁4年(831)2月14日条に甘楽郡大領として壬生公郡守が、『三代実録』貞観12年(870)8月15日条に群馬郡の壬生公石道が、また延長6年(928)4月4日には群馬郡綱丁として壬生常見のいたことが知られ(東大寺文書)、これら壬生氏と国分寺との関係を窺わせるもので、この地域の氏族の動向を知る上で興味深い資料である。以上のように文字瓦は、この地域の古代の社会の諸様相を明らかにしていく上で、多くの課題を提示していると同時に、それに近づくための手懸りを与えていると言える。

Table. 11　文字瓦（Fig. 29、30、31）

第15トレンチ拡張調査区は15T. 拡と略す

番号	内容	種類	部位	出土位置	備考	図版番号
1－①	多胡郡織裳匚	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	下部を欠失、縄目叩きあり、捲巻作り	PL.19-1
1－②	コ武子	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　表土下層	上部を欠失	19-2
1－③	宮麻呂	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層	完形	19-3
1－④	多	押印（陽刻）	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	2ヶ所以上に押印される	19-4
1－⑤	多	押印（陽刻）	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	下部を欠失、1－⑥の凸面	
1－⑥	多	ヘラ描き（左字）	平瓦凹面	15T. 拡　瓦溜り	下部を欠失、1－⑤の凹面	
1－⑦	勢	押印（陽刻）	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	上部を欠失、格子叩きあり	19-5
1－⑧	佐位	押印（陽刻、左字）	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	格子叩きを伴う、2ヶ所以上に押印される、捲巻作り	19-6
1－⑨	休（佐カ）	押印（陽刻）	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層	斜格子叩きあり、布目をナデ消す	
1－⑩	仿（佐カ）	押印（陽刻）	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	斜格子叩きあり、2ヶ所以上に押印される	
1－⑪	□（石カ）井	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		19-7
1－⑫	大子	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層	下部を欠失	
1－⑬	大栃	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	下部を欠失	19-8
1－⑭	子才	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層	上部を欠失	19-9
1－⑮	真	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		19-10
1－⑯	家	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層	上部を欠失	
1－⑰	長	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層		19-11
1－⑱	田	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	左上部を欠失	
1－⑲	野	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	上部を欠失	
1－⑳	子	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層		
1－㉑	文	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉒	井	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層	左上部にヘラ描（＋）あり	
1－㉓	多	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	ほぼ完形	19-12
1－㉔	与（子カ）	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉕	石	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り下層		
1－㉖	□（稲カ）	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉗	木	ヘラ描き	平瓦凹面	15T. 拡　瓦溜り	下部を欠失	
1－㉘	成	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	右上部を欠失	
1－㉙	丈	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉚	□（川カ）	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉛	二	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉜	ム	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉝	山（山カ）	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉞	夾	ヘラ描き	丸瓦凹面	15T. 拡　瓦溜り		
1－㉟	丁	ヘラ描き	平瓦凸面	15T. 拡　瓦溜り	下部を欠失	
1－㊱	キ	ヘラ描き	平瓦凹面	15T. 拡　瓦溜り		
2－①	勾舎人匚	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	下部を欠失、平行線叩き、布目は細かい	20-1
2－②	大伴	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土下層	上部・下部・右部を欠失	20-2
2－③	吉□（井カ）	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	下部・右部を欠失	20-3
2－④	勢	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土	上部を欠失	20-4
2－⑤	仿（佐カ）	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次撹乱層	格子叩きあり	
2－⑥	仿（佐カ）	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土		
2－⑦	雀	押印（陽刻、左字）	平瓦凸面	25次撹乱層	格子叩きを伴う、布目をナデ消す	20-5
2－⑧	衛田	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土	右部を欠失、2ヶ所以上に押印される	20-7
2－⑨	山田五子匚	押印（陽刻、左字）	平瓦凸面	25次表土	下部を欠失、布目は細かい、「山田五子」の下に文字あり	
2－⑩	子王	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土	5ヶ所以上に押印される、布目は細かい	20-6
2－⑪	コ八田匚	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	上部・下部を欠失	20-8
2－⑫	八大匚	ヘラ描き	丸瓦凸面	25次撹乱層	下部・左部を欠失、布目は細かい	
2－⑬	山匚（乙カ）	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	左部・下部を欠失	
2－⑭	大子	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	上部・下部を欠失	
2－⑮	□（石カ）井	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	下部を欠失	
2－⑯	コ嶺	ヘラ描き	丸瓦凸面	25次表土	上部を欠失	
2－⑰	乙□	ヘラ描き	平瓦凹面	25次撹乱層	下部・右部を欠失	
2－⑱	明カ	叩き文	平瓦凸面	25次表土	格子叩きを伴う、3ヶ所以上あり、布目をナデ消す	
2－⑲	□（嶺カ）□（山カ）	押印（陽刻、左字）	平瓦凸面	25次表土	上部・下部・右部を欠失、類例により判読	

番号	内容	種類	部位	出土位置	備考	図版番号
2—⑳	人ヵ	押印（陽刻）	平瓦凸面	25次表土	斜格子叩きを伴う。2ケ所以上に押印される。布目をナデ消す	
2—㉑	羊	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	下部を欠失	
2—㉒	馬	ヘラ描き（左字）	平瓦凸面	25次撹乱層	下部を欠失	
2—㉓	大	ヘラ描き（左字）	平瓦凹面	25次表土	縄目叩きあり。布目をナデ消す	
2—㉔	山	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土		
2—㉕	本	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	上部・下部を欠失	
2—㉖	与	ヘラ描き	平瓦凸面	25次基壇上	布目は細かい	
2—㉗	乙	ヘラ描き	平瓦凸面	25次撹乱層		
2—㉘	子	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	2—㉙の凸面	
2—㉙	子	ヘラ描き	平瓦凹面	25次表土	2—㉘の凹面	
2—㉚	文	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	上部・下部を欠失	
2—㉛	真	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土		
2—㉜	秋	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	下部・左部を欠失	
2—㉝	千	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土		
2—㉞	田	ヘラ描き	丸瓦凸面	25次表土		
2—㉟	三	ヘラ描き	平瓦凹面	25次基壇築土下部	縄目叩きあり、布目をナデ消す	20-11
2—㊱	六	ヘラ描き	丸瓦凹面	25次表土	下部を欠失	
2—㊲	も	ヘラ描き	平瓦凸面	25次表土	上部・下部を欠失	
3—①	武美子	ヘラ描き	平瓦凹面	26次ＳＥ09埋土	右部を欠失	20-9
3—②	八伴氏成	ヘラ描き	平瓦凸面	26次ＳＥ11埋土下層	上部・下部を欠失、布目は細かい	20-10
3—③	井	押印（陰刻）	平瓦凸面	26次円形瓦溜り	縄目叩き、平行線叩きあり	
3—④	大	ヘラ描き	丸瓦凸面	採集	右部を欠失	
3—⑤	成ヵ	押印（陰刻）	平瓦凸面	26次表土	左部を欠失、斜格子叩きあり	
3—⑥	＋	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T.拡　瓦溜り		
3—⑦	×	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T.拡　瓦溜り	下部を欠失	
3—⑧	＋	ヘラ描き	平瓦凹面	15T.拡　瓦溜り	下部を欠失	
3—⑨	＋	押印（陰刻）	平瓦凹面	15T.拡　瓦溜り下層		
3—⑩	◯	押印（記号）	平瓦凸面	15T.拡　表土下層	斜格子叩きあり、2ケ所以上に押印される	
3—⑪	○	押印（竹管）	丸瓦凹面	15T.拡　瓦溜り		
3—⑫	∴	押印（竹管）	軒平瓦凸面	15T.拡　瓦溜り下層		
3—⑬	◎	押印	平瓦凸面	15T.拡　瓦溜り	下部を欠失	
3—⑭		押印（胡桃）	平瓦凸面	15T.拡　瓦溜り	平行線叩きあり	
3—⑮	□（不明）	押印	平瓦凸面	25次表土	半分程欠失（上下不明）、3—⑱の凸面	
3—⑯	⊡（不明）	押印	平瓦凹面	25次表土	半分程欠失（上下不明）、3—⑰の凹面	
3—⑰	◯	押印（記号）	平瓦凸面	25次表土	上部・下部を欠失、格子叩きあり	
3—⑱	○	押印（竹管）	丸瓦凹面	25次表土		
3—⑲	◎	押印	不明	25次撹乱層		
3—⑳		押印（胡桃）	平瓦凸面	25次表土	平行線叩きあり	
3—㉑	十	ヘラ描き	丸瓦凹面	25次表土	上部・下部を欠失	
3—㉒	生	ヘラ描き	丸瓦凹面	15T.拡　瓦溜り	上部を欠失	
3—㉓	生	ヘラ描き（左字）	丸瓦凹面	15T.拡　瓦溜り下層		
3—㉔	王	ヘラ描き	丸瓦凸面	15T.拡　ＳＪ15		
3—㉕	生	ヘラ描き	丸瓦凹面	25次表土	平行線叩きあり	
3—㉖	圖	押印（陰刻）	丸瓦凹面	15T.拡　瓦溜り		
3—㉗	圖	押印（陰刻）	平瓦凸面	15T.拡　表土	上部・下部・右部を欠失	
3—㉘	圖成	押印(陰刻)＋ヘラ描き	平瓦凸面	15T.拡　瓦溜り		
3—㉙	□（不明）圖	押印(陰刻)＋ヘラ描き	軒丸瓦凹面	15T.拡　瓦溜り		
3—㉚	圖大	押印(陰刻)＋ヘラ描き	丸瓦凹面	15T.拡　瓦溜り	上部・右部を欠失	
3—㉛	圖	押印（陰刻）	平瓦凸面	25次表土	上部を欠失・布目をナデ消す	
3—㉜	□（圖ヵ）丁（不明）	押印(陰刻)＋ヘラ描き	平瓦凸面	25次撹乱層	上部・左部を欠失	
3—㉝	圖鬼	押印(陰刻)＋ヘラ描き	丸瓦凹面	25次撹乱層	下部を欠失	
3—㉞	圖大	押印(陰刻)＋ヘラ描き	平瓦凹面	25次撹乱層	下部を欠失、3—㉜の凹面	
3—㉟	井	ヘラ描き	平瓦凸面	25次撹乱層	3—㉛の凸面	

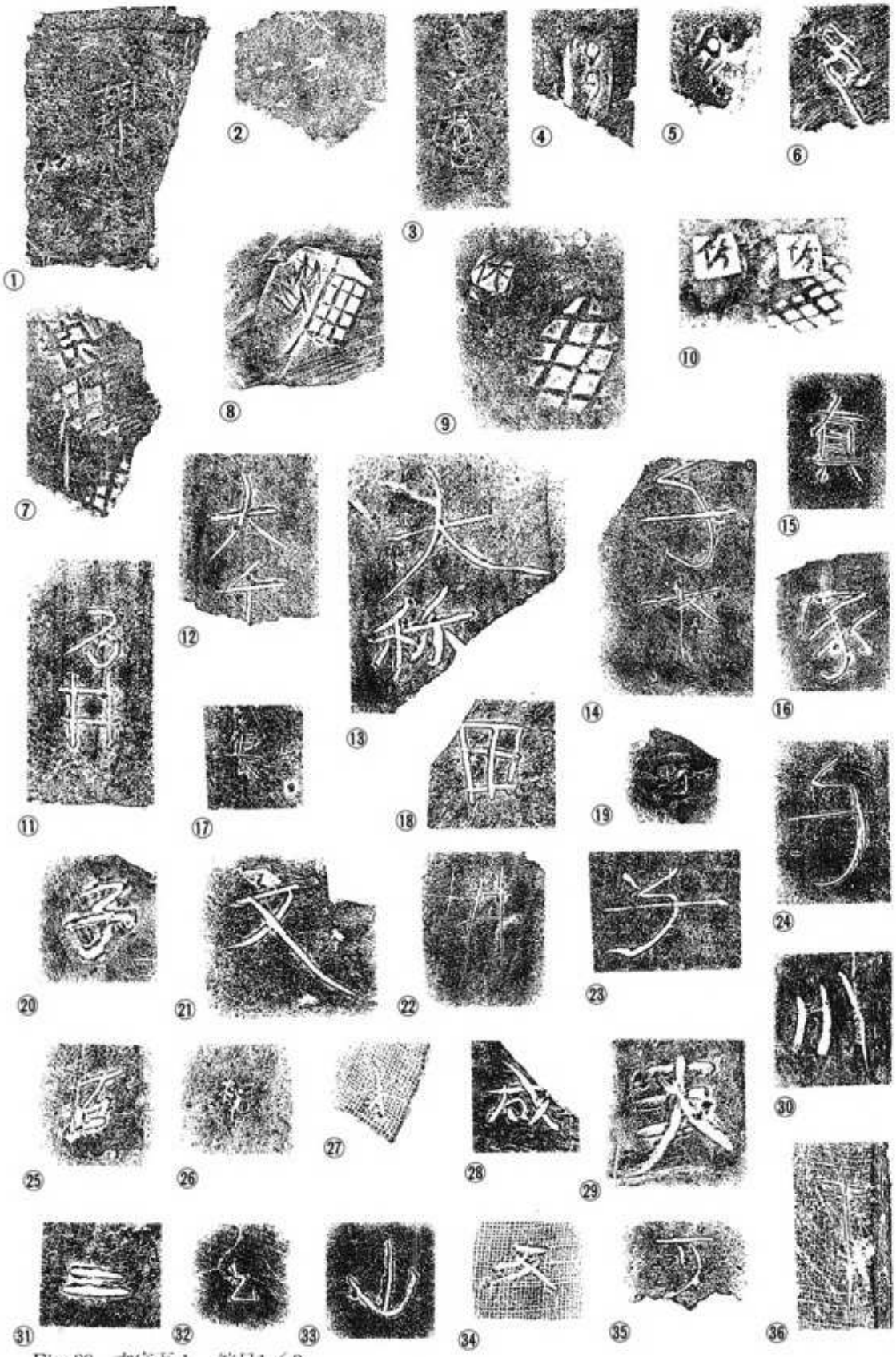


Fig. 29　文字瓦1　縮尺1／3

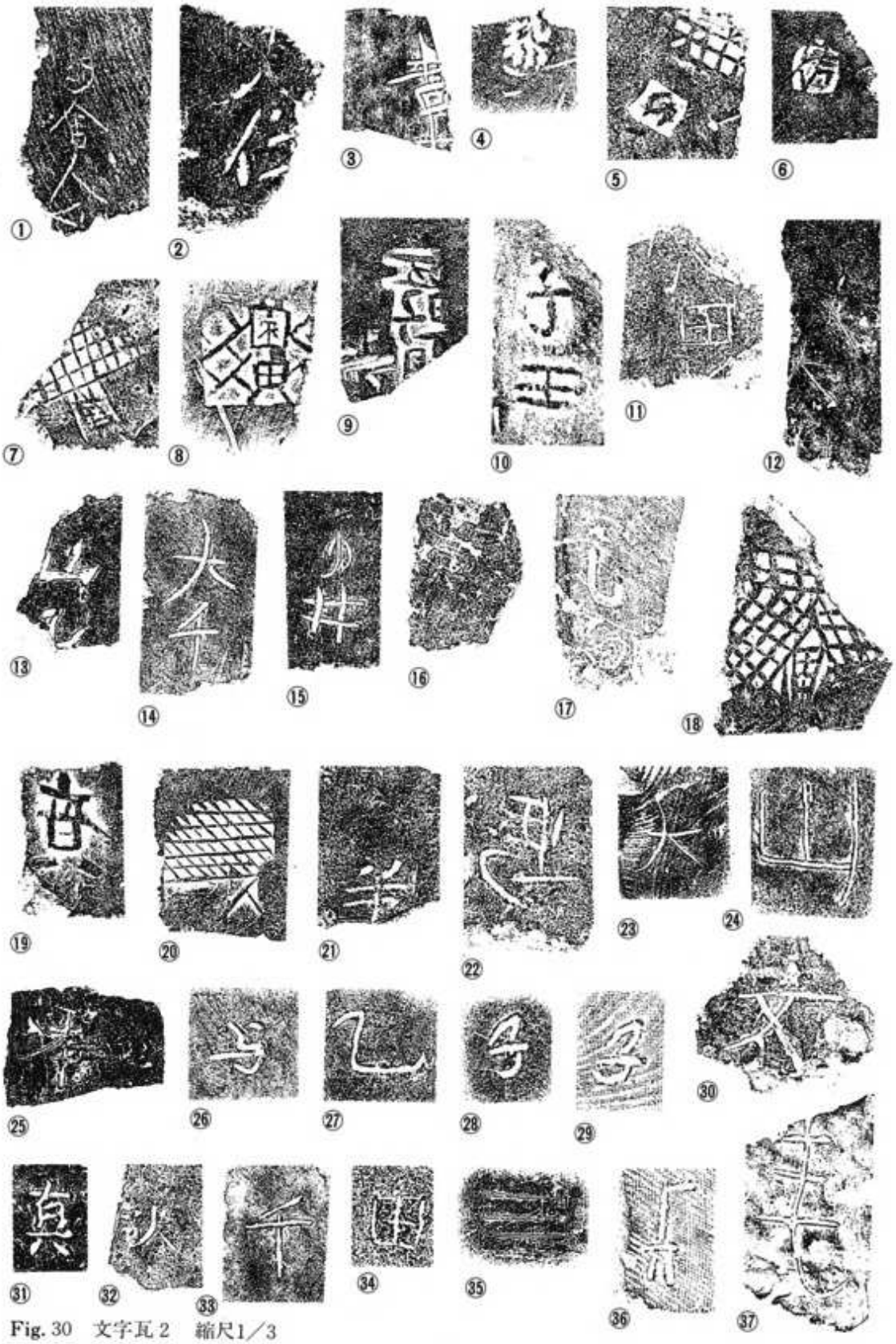


Fig. 30　文字瓦 2　縮尺1／3

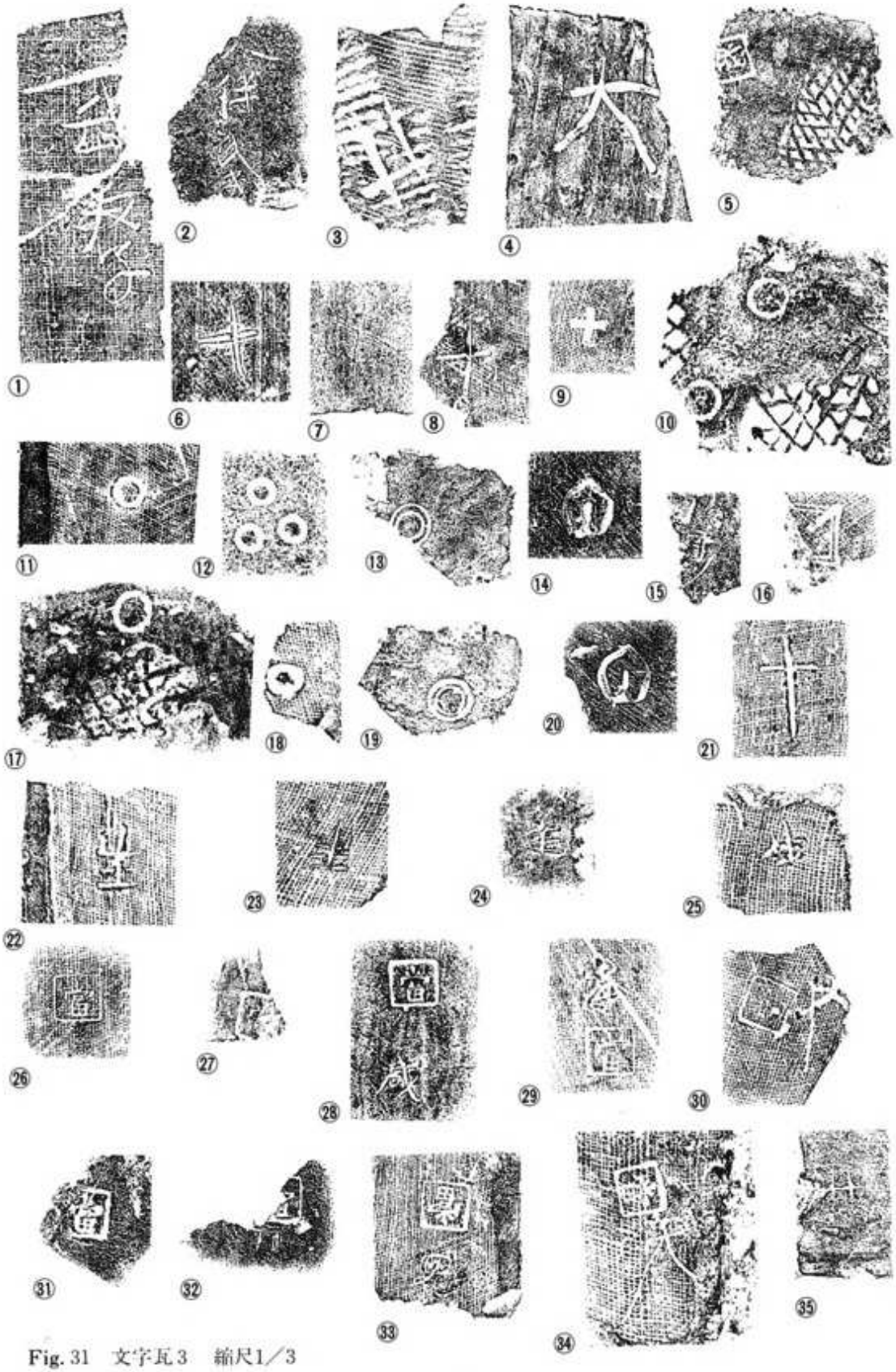


Fig. 31　文字瓦3　縮尺1／3

Ⅳ まとめ

今回の調査の主な目的である寺域南辺および金堂の状況、それに出土遺物の整理状況について、そのまとめと課題とを示しておきたい。

寺域南辺については、これまでに昭和55年度の第1、2、7、9トレンチ、昭和57年度の第16次、昭和58年の第23次調査で、南辺築垣の位置と構造の確認、および周辺の状況を確認するための調査を行ってきた。この結果、(1)寺域南東隅のE 134 ～ 137 では、S 100 ～ 101 で地山が階段状に削られており、これより南側は谷地となっている（第16次）。(2)寺域南辺東半部では、S 98.4を中心とする位置で築垣（SF01）が確認されたが、その規模は現況で築土の上部巾 180 cm、同基部巾 200 cm、築垣基部巾 420 cmを測る。この外側には巾約3mの溝（SD01）および「U」型の小溝（SD12）がとりつく。E 35.7ラインでの標高をみると、地山上面は127.00m付近、築垣本体下面は127.50m付近にある（第1トレンチ、第23次）。(3)南大門は、E 29.6ラインを中心とする位置の、S 95.2～101.4の範囲で、東側妻柱列の礎石3個が原位置のままで検出された。これには寺域内では旧生活面より45cm高く、外側へはSD01を切るように張り出す基壇が伴う。礎石の間隔は 315 ― 315 （cm）を測り、方位はN―0°―Eで、調査軸線に対して4°の振れを示しており、南辺築垣東半部と直交していない。礎石上面の標高は127.74m前後である（第23次）。(4)寺域南辺西半部では、S 97.6を中心とする位置で築垣が確認されたが、その規模は現況で上部巾150cm、基部巾 600 cmを測る。標高は築垣本体下面で127.44m付近にある（第9トレンチ）。(5)寺域南辺西端近くでは、S 92～ 110 の範囲では築垣は検出されず、この付近は窪地状となっていた（第7トレンチ）、などの点が明らかとなった。また南辺築垣の方位はE―3°50′―Nとなることが知られた。第23次西拡張ではS 96.1～98.4で築垣の基部が検出され、第24次調査のE 60～64.4の範囲ではS 87.6～90で築垣基部および本体の一部が検出された。いずれの場合もこの南側は深い掘り込み状を呈しており、大規模な造成作業がなされた状況は確認できない。。このことから、南辺築垣の西半部は、創建当初から南大門より西へ 100 mの位置で10m北へ寄る形状を示しており、この南側は一段低くなる地形であることが考えられた。現在この付近に、東西方向に北が高く南が低くなる段差があるが、これが南辺築垣の位置を示すものであろう。その形状の詳細の解明については、W30付近のこの段差を含む位置での調査が必要である。また第24次調査では、平安時代に築垣が造り直された状況が認められたが、南東隅でも平安時代中期に谷地の縁辺部が盛土による改修がなされており、南大門の基壇も造り替えの行われたことが知られる。これらが一時期になされたのか、部分ごとになされたものであるのかを示す資料はまだ得られておらず、今後の調査と諸資料の整理、検討を進めていく上での課題である。これと併せ、寺域西辺も塔より南側では東に屈曲する形状である可能性が高いと判断された。これらは、微地形の制約をうけて地形が比較的高い尾根筋に主要伽藍・南大門を配置し、南から入り込む谷地の北縁上部を南辺とするといった占地が行われたことと、寺域を敢えて正方形あるいは長方形に整える必要がない、あるいはそうするための整地作業をなし得なかった事情があったことを窺わせるものである。

金堂は、今回の調査によって規模と基壇の構造をほぼ明らかにすることができた。後代の墓地

化による撹乱と耕作による削平のため、基壇の損壊、礎石の減失はかなり進んでいたが、原位置を保つ8個の礎石および根石・掘形の位置から、金堂は、桁行7間で柱間は11—11—12—12—12—11—11（尺）、梁間は4間で柱間は11—11.5—11.5—11（尺）であることが確認された。基壇の出は南縁部分の計測で11尺であることが知られたが、他の部分では確認をすることができなかった。基壇の高さは3.5尺程度と推定され、塔が4尺であるのに対してやや低くなっている。基壇化粧は残存していなかったが、周辺から凝灰岩切石の破片が出土しており、これらが化粧材として使用されていたことが考えられる。基壇の築造は、旧表土を浅く皿状に掘り込んだ上に築土を積み上げるが、1単元の厚さ6～14cmで丁寧さに欠ける。基壇上の構造物としては、身舎北側柱列の中央1間分の礎石の間に扁平な玉石が一列に並べられているのが確認された。これは本尊仏の背後にあたり、来迎壁の地覆石であると判断された。遺構での確認例として注目されるものである。また金堂の方位はN—2°30′—Wで、調査軸線に対して1°30′の振れを示すことが明らかとなった。塔はN—1°22—Wであり、これとは相違するものである。金堂については、公有地化の進展を俟って中門を含めた南面一帯の調査を進めることによって、周辺部を含めた全容を明らかにすることができよう。

今回の調査では、約500点の文字瓦が出土した。その多くは文字の判読が困難なものあるいは記号であるが、郡・郷名を押印するもの、地名・人名をヘラ描きするものも多数確認された。この中では、「勾舎人匚」とこれまで上野国内ではその存在が知られなかった氏族名を記すものの出土、「生」と群馬郡などに力を持っていた生部氏を示すものが多数出土したこと、金堂基壇の築土下から「薗田」を押印した平瓦の出土したことなどが注目された。創建にあたって郷を単位とする瓦の貢進体係が編成されたと推定できること、これまでその動向が注目されることの少なかった生部氏の活動の様子を知る史料の得られたことなど、これらの資料は、上野国分寺を中心とする、この地域の社会状況を明らかにしていく上で重要な役割りをはたすことになろう。また第25次、第26次調査では、五輪塔・宝篋印塔・板碑・墓石など、多数の石造物の出土をみた。これらは金堂跡およびその周辺の墓地化に伴う遺物とみられる。これらの中には年号が記されたものがあるが、その最も古いものは至徳4年（1387）で、応永・永享・嘉吉など1380年代～1440年代のものが多い。この時期に墓地化が進んだことを示しており、第26次調査で検出された小柱穴群、井戸などの生活の痕を示す遺構も、土地利用の状況からみてこの墓地の形成に関連するものである可能性がある。国分寺衰退後の状況を知るための資料として、伴出する内耳鍋型土器、素焼きの皿などの編年とともに検討を要する点である。

課題を設定して調査を実施したものの、遺構の残存状況が悪いため、その検出や検討に苦慮するという状態は今年も同前であった。しかし、この国分寺跡は創建以来1230余年の歴史を有するものであることを想う時、このような遺構の状態こそ、国分寺の衰退過程、後代の墓地化、畠地化、さらに宅地化といった歴史的変遷、さらに噴火や流水などの自然現象への対応など、この地域の歴史の集積とその結果を物語る貴重な遺産であると言ってよいであろう。

PL. 1

上野国分寺跡調査区全体航空写真（1984年12月）

PL. 2

1．第23次西拡張調査区全景（西から）・上は第23次調査区（1983年12月）

2．第23次西拡張調査区全景（南から）

3．第23次西拡張調査区遺物出土状況（東から）

PL. 3

1．第15トレンチ拡張調査区全景（東から）

2．第15トレンチ拡張調査区E50～70検出状況
（南から）

3．第15トレンチ拡張調査区　SJ15
（西から）

PL. 4

1．第15トレンチ拡張調査区瓦溜検出状況（南から）

2．第15トレンチ拡張調査区瓦溜発掘状況（南から）

3．第15トレンチ拡張調査区瓦溜出土状況

4．第15トレンチ拡張調査区瓦溜凝灰岩切石出土状況

PL. 5

1．第24次調査区全景(航空写真)

2．第24次調査区全景(南から)

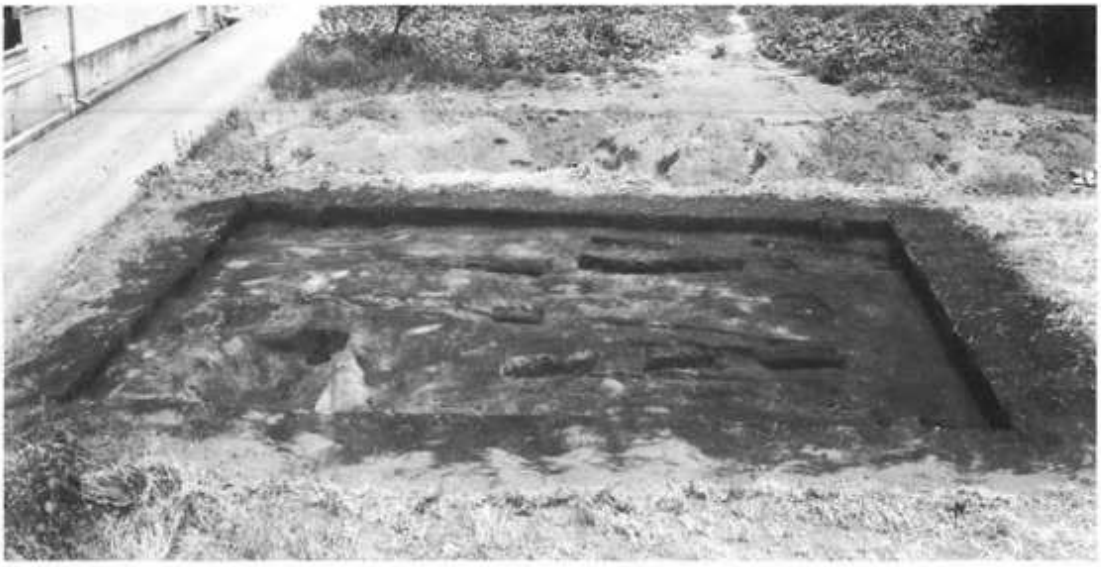
3．第24次調査区全景(東から)

PL. 6

1．第24次調査区　SF01（北から）

2．第24次調査区　SF01断面（西から）

3．第24次調査区　SJ13、SJ14（東から）



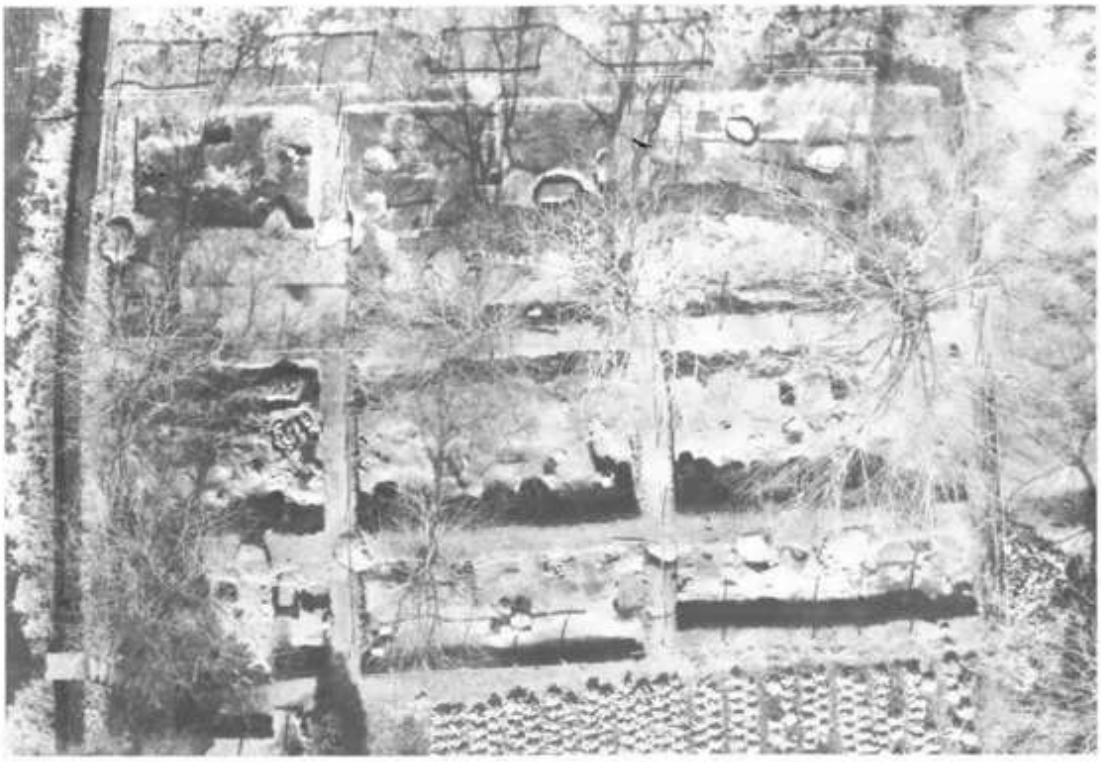
1．第24次北拡張調査区全景（南から）

2．第24次北拡張調査区 SB11全景（東から）

3．第24次北拡張調査区　SB11柱穴掘形

4．第24次北拡張調査区　SB11柱穴掘形

PL. 8



1．第25次調査区全景
（航空写真）

2．第25次調査区全景
（南から）

3．第25次調査区全景
（北から）

PL. 9

1．第25次調査区基壇南縁部（南から）

2．第25次調査区基壇南縁中央部（西から）

3．第25次調査区基壇東縁部（南から）

1．第25次調査区金堂来迎壁地覆石検出状況（北から）

2．第25次調査区金堂来迎壁地覆石検出状況（西から）

3．第25次調査区金堂身舎北側柱礎石検出状況（北から）

PL. 11

1．第25次調査区金堂基壇築土状況（E17ライン）

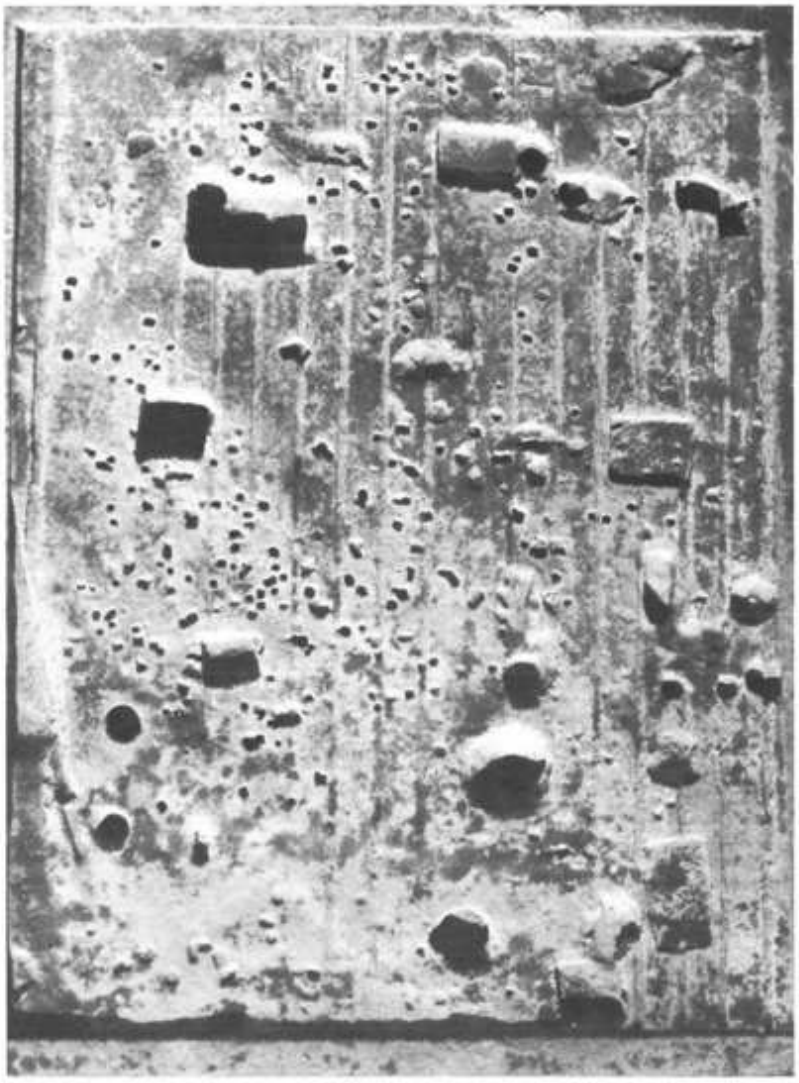
2．第25次調査区金堂基壇築土状況（E17ライン・中央部）

3．第25次調査区金堂基壇築土状況（E31ライン・北端部）

1．第25次調査区検出状況（西から）

2．第25次調査区礎石検出状況（南から）

3．第25次調査区墓壙検出状況



1．第26次調査区全景
（航空写真）

2．第26次調査区全景（西から）

（左）1．第26次調査区　SK30（南から）
（右）2．第26次調査区　SK29（西から）

3．第26次調査区　SK33・39（南から）

4．第26次調査区　SK32・SE12（西から）

PL. 15

1．15トレンチ拡張 SJ15 須恵器蓋

2．15トレンチ拡張
輪宝を墨書する皿

3．25次表土 施釉皿（底部は硯として使用）
上・内面、下・底部

4．25次撹乱層 須恵器蓋

5．25次表土 施釉皿

6．25次撹乱層

7．26次 SK33 土師器坏

8．26次 SK33 土師器坏

9．26次 SE13 須恵器皿

10．26次 SK33
土師器坏(墨書)

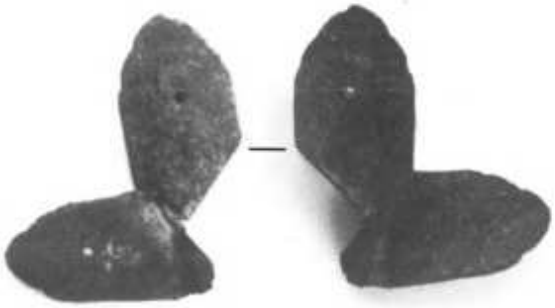
11．26次 SK33
土師器坏(墨書「吉」ヵ)

12．26次 SE11 香炉(脚部)

2．15トレンチ拡張
瓦溜　壁土塊

1．15トレンチ拡張　瓦溜　塑像（部分）　左・表面、右・裏面

3．26次　SK25　瓦塔（部分）



4．25次撹乱層　銅製飾金具

5．26次　SE12　刀子状金属製品

6．26次　SK33　鉄製鉸具　左・表、右・裏

7．26次　SE15　宝篋印塔基礎
「永享八年」銘

8．15トレンチ拡張表土
宝篋印塔基礎「応永五年」銘

9．25次撹乱層
板碑（部分）

PL. 17

1．15トレンチ拡張　瓦溜

2．15トレンチ拡張　瓦溜

3．15トレンチ拡張　瓦溜

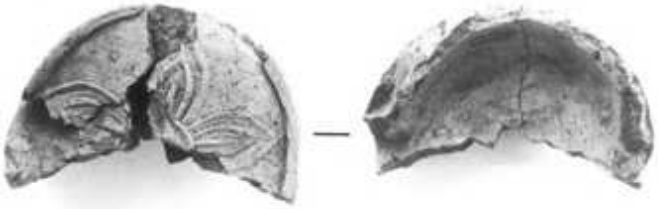
4．15トレンチ拡張　瓦溜

5．15トレンチ拡張　瓦溜

6．15トレンチ拡張　瓦溜

7．25次基壇築土中　　左・瓦当面、右・裏面

9．25次表土



8．25次　基壇築土中　左・瓦当面、右・裏面

10．25次表土

1．15トレンチ拡張　瓦溜

2．15トレンチ拡張　瓦溜

3．15トレンチ拡張　瓦溜

4．15トレンチ拡張　瓦溜

5．15トレンチ拡張　瓦溜

6．15トレンチ拡張　瓦溜

7．25次　基壇築土下

8．25次 基壇築土下層

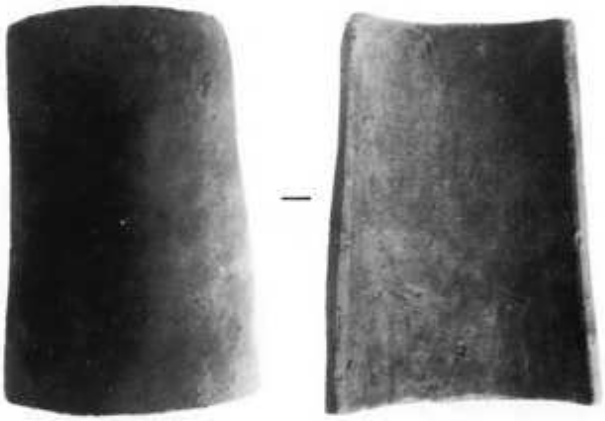
9．25次表土

10．25次表土

11．25次撹乱層

12．25次表土

13．15トレンチ拡張　瓦溜　鬼瓦



14．24次　SJ13　平瓦　左・凸面、右・凹面

1．15トレンチ拡張　瓦溜　「多胡郡織裳郷□」左・凸面、右・凹面

2．15トレンチ拡張表土　「□武子」

3．15トレンチ拡張　瓦溜「宮麻呂」

4．15トレンチ拡張　瓦溜　押印「多」

5．15トレンチ拡張　瓦溜

◀押印「勢」

6．15トレンチ拡張　瓦溜　押印「佐位」(左字)

7．15トレンチ拡張　瓦溜　「(有)井」

8．15トレンチ拡張　瓦溜

◀「大称」

9．15トレンチ拡張 瓦溜「子十」

10．15トレンチ拡張 瓦溜「真」

11．15トレンチ拡張 瓦溜「長」

12．15トレンチ拡張 瓦溜「多」

1．25次表土　「勾舍人□」

2．25次表土　「大伴」

3．25次表土　「舍□」（井カ）

4．25次表土　押印「勢」

5．25次撹乱層　押印「雀」（左字）

6．25次表土　押印「子王」

7．25次表土　押印「薗田」

8．25次表土　「□八田□」

9．26次　SE09　「武美子」

10．26次　SE11　「八伴氏成」

11．25次　基壇築土下部　「三」
上・凹面、下・凸面

参 考 文 献 （近年刊行の上野国分寺関係論文など）

上田市立信濃国分寺資料館『東山道の国分寺』　1982年
森　郁夫「古瓦から見た群馬の古代寺院」　群馬歴史散歩　第52号　1982年
前沢和之「発掘調査を通してみた上野国分寺」　月刊上州路　№125　1984年
森田秀策「国分寺をめぐる遺跡」　月刊上州路　№125　1984年
大江正行「群馬県における古代窯跡群の背景」　群馬文化　199　1984年
関口功一「上野国多胡郡山部郷に関する覚書」　信濃　第36巻第11号　1984年
松田　猛「山王廃寺の性格をめぐって」　群馬県史研究　第20号　1984年
須田　茂「上植木寺院跡の軒瓦の型式分類」　伊勢崎市史研究　第３号　1985年

調 査 関 係 者 （敬称略）

発掘作業員

一倉ヤヨイ・入沢喜一・入沢タケノ・上原隆子・金井モトエ・川端キヨ子・菊地松之助・渋谷ユキ・住谷紀子・田原かねえ・塚田マサエ・塚田みさほ・塚田光代・塚田幸雄・仲野俊雄・東野菊江・東野ノブ子

整理補助員

関口功一（立教大大学院）・亀山幸弘・柏瀬和彦・湯本俊明・小林康典・間渕幸代・横澤永子・池田賢一・萩原　泉（以上群馬大）・木幡玲子（県立女子大）・石原清和（芝浦工大）・野口智代（東京女子大）・新井万里子・木下道子

協　　力

群馬町教育委員会・前橋市教育委員会・群馬町東国分地区・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

この他に住谷隆司、住谷宗七、住谷栄一(東国分区長)ほか多くの方々のご協力とご指導を得た。

史跡上野国分寺跡発掘調査概要　5

印　刷　　昭和60年３月25日
発　行　　昭和60年３月30日
発　行　　群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1—1
TEL 0272—23—1111
編　集　　群馬県教育委員会文化財保護課
印　刷　　株式会社精真社印刷所